伊丹市

原 田 西 遺 跡

－猪名川流域下水処理場における急速ろ過施設建設に伴う発掘調査報告書－

平成21（2009）年３月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

原田西遺跡遠景（南東上空から）

原田西遺跡遠景（西上空から）

巻頭カラー図版２　南Ⅲ地区

原田西遺跡遠景（南西上空から）

調査区全景（北上空から）

調査区全景（北から）

調査区東半全景（南から）

巻頭カラー図版４　南Ⅲ地区

SR01断ち割り

SR01堆積状況

SR01堆積状況

杭列第２群全景
（北から）

杭列第２群全景
イ・ホ・ニ列
（北から）

杭列第２群全景
（北東から）

巻頭カラー図版６　南Ⅰ地区

杭列第２群
ヘ・チ・ト・リ・ヌ列
（北東から）

杭列第２群
ヘ・ト・リ・ヌ・ル列
（北から）

杭列第２群
イ・ホ列　（北東から）

杭列第２群
ニ列（北東から）

杭列第２群
ル列　南大壁断面
（北から）

杭列第２群
検出風景

巻頭カラー図版８　中央・東Ⅰ地区

昭和56年度調査地区全景
（東から）

昭和56年度調査
東Ⅰ地区（西から）

SX３（東から）

SX３　主体部２
（西から）

SX３　主体部１とSK15
（西から）

SX３内SK14
土器出土状況（南から）

SX２（西から）

SX２　主体部１・２
（南から）

SX２　主体部３（東から）

SX１　南溝（東から）

SX１　北溝・東溝
（北から）

SX１　東溝
土器出土状況（北から）

巻頭カラー図版12　東Ⅱ地区

昭和58年度調査地区全景
（南から）

SX11（北から）

SX10（西から）

例　　言

1　本報告書は猪名川流域下水処理場における急速ろ過施設建設に伴い阪神南県民局西宮土木事務所の委託を受けて昭和50年度～56年度、同58年度および平成15年度に発掘調査を実施した原田西遺跡の発掘調査報告書である。

2　兵庫県教育委員会が発掘調査主体となり、文化財保護課（昭和50年度)、社教・文化財課（昭和51年度～53年度)、社会教育・文化財課（昭和54年度～56年度・58年度)、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（平成15年度）に在籍の職員が発掘調査を担当した。

3　遺跡の所在地は伊丹市岩屋である。

4　兵庫県立考古博物館における遺跡調査番号は第１章第４節・第５節に記した。

5　遺物番号の表示は本文・図版・図面を通して統一した。

6　本書で使用した地図は、国土地理院および尼崎市編集発行のものを使用した。

7　本報告書については、各調査担当者が執筆し、編集については非常勤嘱託員友久伸子の協力を得て行った。

8　遺構写真は調査担当者の撮影によるもので、航空写真は昭和23年の米軍撮影および日本産業航空社に撮影委託したものを使用した。また、遺物写真については、谷口フォトに撮影委託した。

9　図示した方位は、平成15年度調査図版については座標北、それ以外については磁北を示し、水準はＴ.Ｐ.を使用した。

10　整理後の遺物については、兵庫県立考古博物館および同博物館魚住分館に保管している。

11　調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々のご指導とご教示を仰いだ。記して感謝の意を表するものである。

奈良国立文化財研究所（当時）	工楽善通・沢田正昭・光谷拓実・肥塚隆保	
京都大学（当時）	池田次郎	
尼崎市立田能資料館（当時）	福井英治	
伊丹市教育委員会（当時）	浅岡俊夫	
猪名川流域自然史調査会	那須孝悌	大阪市立自然史博物館（当時）
	樽野博幸	同　上
	粉川昭平	
	古谷正和	
	野口寧世	

(敬称略)

※第５章自然史的背景に記載の^{14}Ｃ年代については学習院大学放射性炭素年代測定室（コード番号GaK-6408）および第四紀総合研究会^{14}Ｃ年代測定小委員会（台帳番号：＃393）に依頼し同定されたものである。

本　文　目　次

例言
第１章　調査の契機と経過
第１節　調査の契機……小川……1
第２節　平成15年度の発掘調査の契機と経過……渡辺……3
第３節　整理作業の経過……渡辺……4
第４節　試掘調査の実施（昭和50年度）……小川
1　試掘調査の方針と方法……6
2　確認調査と地質トレンチの調査結果……6
第５節　本発掘調査の経過……小川・森内……8
第２章　遺跡の立地と環境……小川……13
第３章　平成15年度の調査
第１節　遺構……渡辺……17
第２節　遺物……渡辺・古谷……18
第３節　小結……渡辺……20
第４章　昭和50～58年度の調査
第１節　遺構
1　北地区……小川・森内……21
2　中央地区……森内……22
3　南地区……小川……23
4　東地区……別府……28
第２節　遺物
1　土器
縄文時代～弥生時代前期の土器……別府……37
弥生時代中期の土器……友久……41
弥生時代後期～古墳時代初頭の土器……渡辺……45
古墳時代中期～奈良・平安時代の土器……森内……47
中・近世の土器・陶磁器……岡田……49
2　木器……別府……51
3　石器……古谷……55
4　金属器
鉄斧……別府……57
銭貨……渡辺……58
第５章　自然史的背景（再掲）……那須・小川……59
第６章　まとめ
第１節　遺構について
1　原田西遺跡の自然的環境と水利施設について……小川……63
2　方形周溝墓について……別府……64
3　遺構の立地と時期別分布……森内……65
第２節　遺物について
1　弥生前期土器について……別府……71
2　弥生中期土器について……友久……72
第３節　おわりに……森内……75

図　版　目　次

図版１　南Ⅲ地区　第１面平面図
図版２　南Ⅲ地区　土層断面図
図版３　南Ⅲ地区　ＳＲ01土層断面図
図版４　南Ⅲ地区　第２面平面図
図版５　南Ⅲ地区　第２面遺構実測図（１）
図版６　南Ⅲ地区　第２面遺構実測図（２）
図版７　南Ⅲ地区　第３面平面図
図版８　南Ⅲ地区　第３面遺構実測図（１）
図版９　南Ⅲ地区　第３面遺構実測図（２）
図版10　南Ⅲ地区　出土遺物実測図（１）
図版11　南Ⅲ地区　出土遺物実測図（２）
図版12　南Ⅲ地区　出土遺物実測図（３）
図版13　遺構配置図
図版14　北Ⅰ・Ⅱ地区　全体図
図版15　北Ⅰ・Ⅱ地区　遺物出土位置図
図版16　北Ⅱ地区　Ｙ19溝　杭列
図版17　中央地区　トレンチ配置図
図版18　中央Ⅴ地区　トレンチ北壁土層断面図
図版19　中央地区　遺物出土位置図
図版20　南Ⅰ地区　全体図
図版21　南Ⅰ地区　遺物出土位置図
図版22　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第１群実測図
図版23　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群実測図
図版24　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群堆積状況(１)
図版25　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群堆積状況(２)
図版26　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群堆積状況(３)
図版27　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第３群実測図
図版28　南Ⅰ地区　方形周溝墓ＳＸⅠ～Ⅲ・Ｙ11～13溝実測図
図版29　南Ⅱ地区　全体図
図版30　南Ⅱ地区　ＳＢ１・ＳＢ３実測図
図版31　南Ⅱ地区　ＳＢ２・Ｙ22溝実測図
図版32　東Ⅰ・Ⅱ地区　全体図
図版33　東Ⅰ・Ⅱ地区　Ｍ２・Ｍ３溝土層断面図
図版34　東Ⅰ・Ⅱ地区　ＳＢ４・ＳＨ１実測図
図版35　東Ⅰ地区　ＳＸ１実測図
図版36　東Ⅰ地区　ＳＸ２実測図
図版37　東Ⅰ地区　ＳＸ３実測図
図版38　東Ⅰ地区　ＳＸ４・ＳＸ７実測図
図版39　東Ⅰ・Ⅱ地区　ＳＸ５実測図
図版40　東Ⅰ地区　ＳＸ６実測図
図版41　東Ⅱ地区　ＳＸ９・ＳＸ10実測図
図版42　東Ⅱ地区　ＳＸ11実測図
図版43　東Ⅰ地区　ＳＫ７・８・９実測図
図版44　東Ⅰ地区　ＳＫ14～16･20･22･26実測図
図版45　東Ⅱ地区　ＳＫ25･27･30　ＳＤ３･10実測図
図版46　中央地区　出土遺物実測図（４）
図版47　中央・南Ⅰ地区　出土遺物実測図（５）
図版48　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（６）
図版49　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（７）
図版50　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（８）
図版51　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（９）
図版52　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（10）
図版53　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（11）
図版54　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（12）
図版55　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（13）
図版56　中央・東Ⅰ地区　出土遺物実測図（14）
図版57　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（15）
図版58　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（16）
図版59　東Ⅰ・Ⅱ地区　出土遺物実測図（17）
図版60　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（18）
図版61　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（19）
図版62　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（20）
図版63　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（21）
図版64　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（22）
図版65　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（23）
図版66　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（24）
図版67　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（25）
図版68　昭和50～53年度調査　出土遺物実測図（26）
図版69　木器　出土遺物実測図（27）
図版70　木器　出土遺物実測図（28）
図版71　木器　出土遺物実測図（29）
図版72　木器　出土遺物実測図（30）
図版73　石器　出土遺物実測図（31）
図版74　石器　出土遺物実測図（32）
図版75　石器　出土遺物実測図（33）
図版76　石器　出土遺物実測図（34）
図版77　石器・金属器　出土遺物実測図（35）

本文挿図目次

第１図　遺跡周辺航空写真 …… 2
第２図　調査対象地と隣接遺跡 …… 5
第３図　1975年度確認調査・地質トレンチ配置図 …… 7
第４図　年度別調査地区 …… 10
第５図　周辺の遺跡分布図 …… 15
第６図　Ｙ18溝底土坑 …… 21
第７図　墨書土器 …… 48
第８図　出土銭貨拓影 …… 58
第９図　「ハ」トレンチ北壁土層図 …… 59
第10図　「ハ」トレンチ北壁土層概念図 …… 60
第11図　「ハ」N-Ⅳ（P）の花粉分析結果 …… 61
第12図　「ハ」トレンチ（N-1-D）柱状サンプル中の珪藻群変遷図 …… 62
第13図　弥生時代の溝・流路想定図 …… 68
第14図　古墳時代の溝・流路想定図 …… 69
第15図　中・近世の溝・流路想定図 …… 70

巻頭カラー図版目次

巻頭カラー図版１　上　原田西遺跡遠景（南東上空から）
　　下　原田西遺跡遠景（西上空から）
巻頭カラー図版２　南Ⅲ地区　上　原田西遺跡遠景（南西上空から）
　　下　調査区全景（北上空から）
巻頭カラー図版３　南Ⅲ地区　上　調査区全景（北から）
　　下　調査区東半全景（南から）
巻頭カラー図版４　南Ⅲ地区　ＳＲ01
巻頭カラー図版５　南Ⅰ地区　上　Ｙ１溝 杭列第２群全景
　　中　Ｙ１溝 杭列第２群　イ・ホ・ニ列
　　下　Ｙ１溝 杭列第２群　全景
巻頭カラー図版６　南Ⅰ地区　上　Ｙ１溝 杭列第２群　ヘ・ト・チ・リ・ヌ列
　　中　Ｙ１溝 杭列第２群　ヘ・ト・リ・ヌ・ル列
　　下　Ｙ１溝 杭列第２群　イ・ホ列
巻頭カラー図版７　南Ⅰ地区　上　Ｙ１溝 杭列第２群　ニ列
　　中　Ｙ１溝 杭列第２群　ル列　南大壁断面
　　下　Ｙ１溝 杭列第２群　検出風景
巻頭カラー図版８　中央・東Ⅰ地区　上　昭和56年度調査地区全景
　　中　昭和56年度調査　東Ⅰ地区全景
　　下　ＳＸ３
巻頭カラー図版９　東Ⅰ地区　上　ＳＸ３　主体部２
　　中　ＳＸ３　主体部１とＳＫ15
　　下　ＳＸ３内ＳＫ14
巻頭カラー図版10　東Ⅰ地区　上　ＳＸ２
　　中　ＳＸ２　主体部１・２
　　下　ＳＸ２　主体部３
巻頭カラー図版11　東Ⅰ地区　上　ＳＸ１　南溝
　　中　ＳＸ１　北・東溝
　　下　ＳＸ１　東溝
巻頭カラー図版12　東Ⅱ地区　上　昭和58年度調査地区全景
　　中　ＳＸ11
　　下　ＳＸ10

写 真 図 版 目 次

写真図版１　遺跡周辺空中写真（国土地理院）
写真図版２　遺跡遠景
写真図版３　南Ⅲ地区　調査区全景（空中写真）
写真図版４　南Ⅲ地区　調査区全景
写真図版５　南Ⅲ地区　調査区全景
写真図版６　南Ⅲ地区　調査区北半全景
写真図版７　南Ⅲ地区　ＳＲ01
写真図版８　南Ⅲ地区　ＳＤ01･03･05･10･ＳＸ05
写真図版９　南Ⅲ地区　ＳＤ09･11･ＳＫ01･05･07･09
写真図版10　南Ⅲ地区　ＳＫ10・Ｐ02･03･04
ＳＲ01断ち割り
写真図版11　南Ⅲ地区　ＳＸ01･07･08・
ＳＲ01下層遺構(ＳＤ11)
写真図版12　南Ⅲ地区　出土遺物（１）
写真図版13　南Ⅲ地区　出土遺物（２）
写真図版14　南Ⅲ地区　出土遺物（３）
写真図版15　確認調査　地質トレンチ
木製鋤・弥生前期土器出土状況
写真図版16　北地区　全景・Ｙ19溝
写真図版17　北Ⅰ地区　Ｙ19溝杭列
写真図版18　北Ⅱ地区　全景・Ｙ14～18溝
写真図版19　中央地区　Ⅲ-2・Ⅰ-1・Ⅱ-1地区
写真図版20　中央・東Ⅰ地区　昭和56年度調査区全景
写真図版21　中央地区　Ⅵ･Ⅶ地区
写真図版22　南Ⅰ地区　Ｍ１溝
写真図版23　南Ⅰ地区　全景・Ｙ１溝土層断面
写真図版24　南Ⅰ地区　全景・Ｓ１溝
写真図版25　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第１群
写真図版26　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版27　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版28　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版29　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版30　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版31　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版32　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第２群
写真図版33　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第３群
写真図版34　南Ⅰ地区　Ｙ１溝　杭列第３群
写真図版35　南Ⅰ地区　方形周溝墓群･Ｙ11～13溝
写真図版36　南Ⅰ地区　Ｙ11･12溝・方形周溝墓Ⅰ･Ⅱ
写真図版37　南Ⅱ地区　Ｍ２溝
写真図版38　南Ⅱ地区　ＳＢ１・２・Ｙ４･22溝
写真図版39　東Ⅰ地区　全景
写真図版40　東Ⅰ地区　全景・ＳＸ１～６
写真図版41　東Ⅰ地区　Ｍ２・Ｋ１・Ｈ１溝
写真図版42　東Ⅰ地区　ＳＸ１
写真図版43　東Ⅰ地区　ＳＸ１
写真図版44　東Ⅰ地区　ＳＸ２
写真図版45　東Ⅰ地区　ＳＸ２
写真図版46　東Ⅰ地区　ＳＸ３
写真図版47　東Ⅰ地区　ＳＸ３
写真図版48　東Ⅰ地区　ＳＸ４・６
写真図版49　東Ⅰ地区　ＳＸ７
写真図版50　東Ⅰ地区　ＳＨ１・ＳＤ３・ＳＫ14
写真図版51　東Ⅰ地区　ＳＫ７･10･11･16･17
写真図版52　東Ⅱ地区　全景
写真図版53　東Ⅱ地区　Ｍ２・３・４溝・Ｋ１溝・
ＳＢ４
写真図版54　東Ⅱ地区　ＳＸ５・９～11
写真図版55　東Ⅱ地区　ＳＸ２・９
写真図版56　東Ⅱ地区　ＳＸ５･10
写真図版57　東Ⅱ地区　ＳＸ10･11
写真図版58　東Ⅱ地区　ＳＫ20･22･26
写真図版59　東Ⅱ地区　ＳＫ25･27･30
写真図版60　東Ⅱ地区　ＳＤ５･10
写真図版61　東Ⅰ地区　木棺取り上げ状況（1）
写真図版62　東Ⅰ地区　木棺取り上げ状況（2）
写真図版63　出土遺物（４）
写真図版64　出土遺物（５）
写真図版65　出土遺物（６）
写真図版66　出土遺物（７）
写真図版67　出土遺物（８）
写真図版68　出土遺物（９）
写真図版69　出土遺物（10）
写真図版70　出土遺物（11）
写真図版71　出土遺物（12）
写真図版72　出土遺物（13）
写真図版73　出土遺物（14）
写真図版74　出土遺物（15）
写真図版75　出土遺物（16）
写真図版76　出土遺物（17）
写真図版77　出土遺物（18）
写真図版78　出土遺物（19）
写真図版79　出土遺物（20）
写真図版80　出土遺物（21）
写真図版81　出土遺物（22）
写真図版82　出土遺物（23）
写真図版83　出土遺物（24）
写真図版84　出土遺物（25）
写真図版85　出土遺物（26）
写真図版86　出土遺物（27）
写真図版87　出土遺物（28）
写真図版88　出土遺物（29）
写真図版89　出土遺物（30）
写真図版90　出土遺物（31）
写真図版91　出土遺物（32）
写真図版92　出土遺物（33）
写真図版93　出土遺物（34）
写真図版94　出土遺物（35）
写真図版95　出土遺物（36）
写真図版96　出土遺物（37）
写真図版97　出土遺物（38）
写真図版98　出土遺物（39）

第１章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

遺跡の立地する地は猪名川下流域・伊丹市域の南東部にあたり、東は大阪府豊中市、南は尼崎市と接している。当地域は西摂平野の中心地にあたり、1960年代の高度経済成長期においては阪神経済圏の郊外住宅地として人口の急増をみた。これに伴い流域諸市・町では下水施設の普及・拡充の必要に迫られてきていた。それに伴う大規模な汚水処理施設の設置は急務であった。そこで、兵庫県・大阪府では猪名川流域における諸都市の終末汚水処理を行う、広域下水処理施設を伊丹市岩屋・豊中市原田西両地区にわたる地域において建設することで計画が進められていた。

その後、当該地域における住民説明会等を通じてこの事業計画を知った地元研究者が、1974年に関連市・町・府・県の諸機関にこの開発事業に伴う遺跡保護に関して公開質問状を送付する事態となった。しかし、行政諸機関の反応はにぶく具体的な遺跡保護施策協議は進展しなかった。県教育委員会においても県土木部との協議をもち、年度末近くになり確認調査の実施に向けた一応の合意が取り付けられた。そして年度末の３月になり当該地の土層状況の具体を観察するために既に着工されていた事業地の外周道路（事業地東北部）の一部において試掘調査を実施し、発掘調査実施に向けた判断材料の一助とすることとした。その結果、水田土壌下には礫層が厚く堆積しており中には大型の流木も含まれていたが、土器を始め遺構の存在を示唆するものは出土しなかった。しかしながら、地表面には条里遺構が見られることに加え周辺地区では土器の散布等が認められていた。このため広大な事業地内には小規模な新たな遺跡の存在することも十分に予測された。一方、当該地の近距離には大規模集落遺跡（田能・勝部遺跡）が存在しており、それら遺跡の周縁部を明確にすると共に、地形・地層を中心とする立地条件を広範囲に探索する最大の機会と判断された。

そこで、内部的には異論もあったがこれらのことを勘案・判断して、遺跡立地の地理的条件を探る観点の確認調査を実施することとなった。調査にあたっては地質学をはじめとする自然科学部門の方々の協力を仰いで実施することとなった。この部門の調査は「猪名川流域自然史調査会―代表・那須孝悌氏(大阪市立自然史博物館―当時)」に一任のうえ着手することになった。

４月に入ると地元研究者を中心とした「兵庫県文化財保存対策協議会」より県教育委員会に対して、条里遺構の保存をはじめとして遺跡の保存と必要なる発掘調査の実施等の申し入れ書が送付されてきた。これに対して県教育委員会は発掘調査の実施方針を回答した。他方、県土木部とは発掘調査実施に向けた協議を行った。結果、現地では未買収地を含め建屋撤去工事の進行中の箇所があり、発掘調査はこれらの案件の一応の落着がみられると予想された年度後半以降に着手することとなった。しかし、建設計画の第一期工事は一部の土地収用の進捗度にかかわらず、早期に着手する方針であることも判明した。

発掘調査は当初予想より遅れ、昭和50年11月10日になって開始することができた。

第１図　遺跡周辺航空写真（1948年米軍撮影）

第２節　平成15年度の発掘調査の契機と経過

原田西遺跡の調査終了から20年が経ち、猪名川流域下水道原田処理場も施設の充実（急速ろ過施設）が必要となり、協議が行われた。その結果、施設建設予定地は以前の全面調査区に隣接した地域であることが明らかになった。遺跡の広がりの可能性は非常に高いものと思われたが、調査深度（機械掘削と人力掘削の深さ）を把握する必要性があったことからも、確認調査を実施することとなった。調査は阪神南県民局尼崎土木事務所の依頼により兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が実施し、調査第１班渡辺　昇が担当した。

調査対象地域には厚い盛土がなされていた。５m前後の盛土があると予想されたので、安全勾配を採るために２段の小段を設けることとした。その結果、３×３mの確認調査を行う予定で設定したが、上面では15m四方となる大規模な確認調査となった。３箇所のグリッドを設定した。上面で675㎡、下面で27㎡の調査となった。調査は平成15年７月７日から９日までの３日間行った。３箇所とも遺構が確認されたので、本発掘調査が必要と判断された。

本発掘調査が必要となり、さらに本体工事の期限から年度内の対応が生じてきた。平成15年11月10日から平成16年２月17日までの実働52日間を費やして2,207㎡の本発掘調査を行った。確認調査で明らかになったように調査地には約５mの厚い盛土が存在した。そのため、現地表から約3.5mについては尼崎土木事務所に掘削をお願いし、その下層からを調査した。調査では包含層上面までを機械掘削し、包含層から人力掘削を行った。面的な調査を行うとともに、４周の断面観察も調査資料とした。

調査の組織　　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査事務

　所長　　平岡憲昭

　主幹　　輔老拓治

　総務課長　織田正博

　主任調査専門員　　井守徳男

　主査　　深井明比古

　課付　　稲田　毅

調査担当（調査番号：2003188）

　調査第２班　主査　岡田章一

　調査第１班　主査　渡辺　昇

調査参加者

　高田祐一・門田諭佳・前田陽子・

　北山由紀子・西山はるみ

調査風景

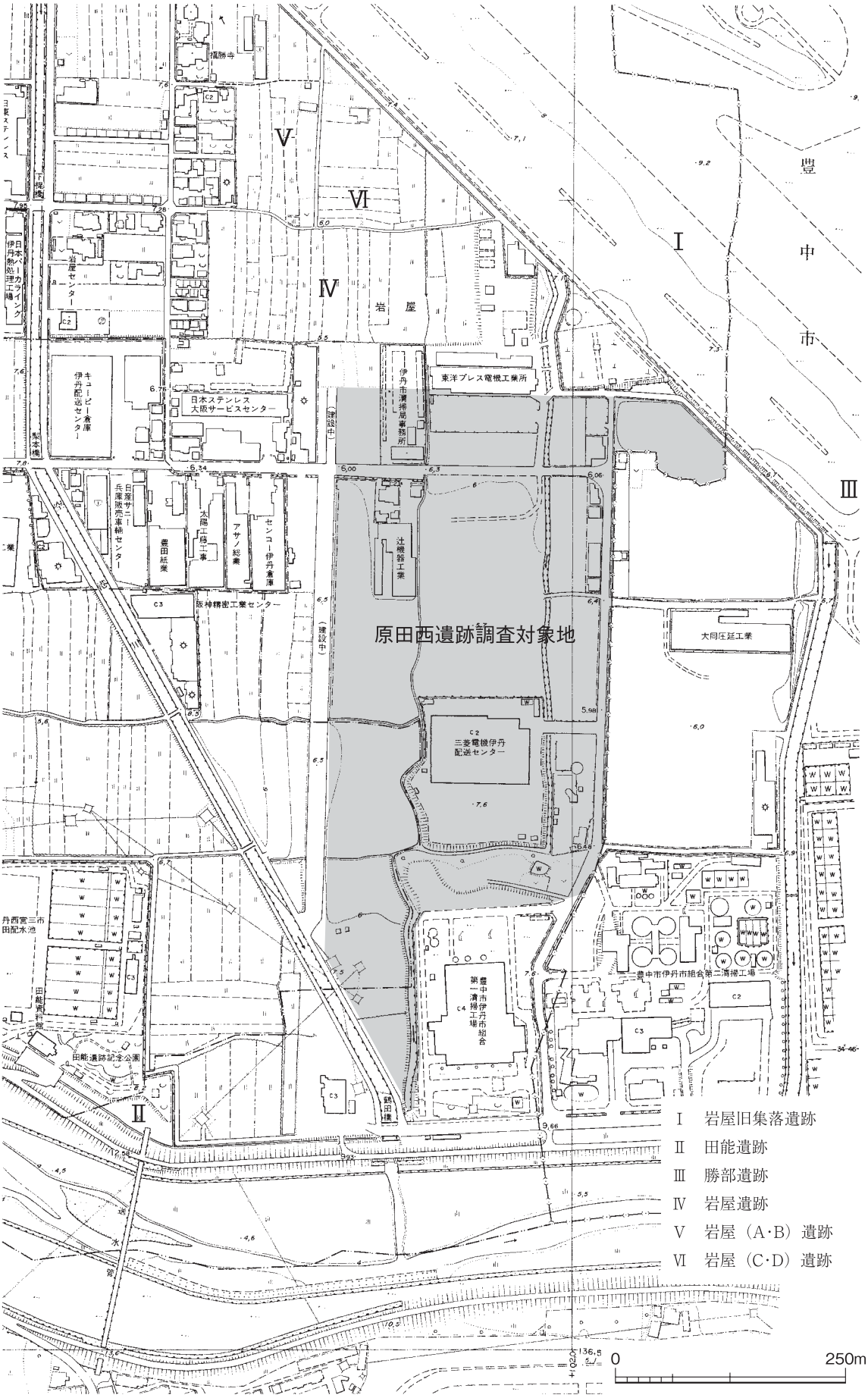
調査風景

第３節　整理作業の経過

一部の作業については発掘調査中などに実施していたが、本格的には平成18～20年度に行った。兵庫県教育委員会が調査主体となり、埋蔵文化財調査事務所・兵庫県立考古博物館で実施した。平成18年度は台帳作成・水洗い・注記・接合作業などから実測まで、それ以後は写真撮影・遺構図作成・製図そして執筆編集作業を実施し、報告書を刊行した。

整理担当職員	整理保存班	森内秀造・岡田章一
		岡本一秀(金属製品保存処理担当)
	調査第１班	別府洋二
	調査第２班	渡辺　昇
整理担当非常勤嘱託職員		友久伸子・古谷章子・宮田麻子・岡崎輝子・加藤裕美・西村美緒
		吉田優子・島村順子・蔵幾子・宮野正子・早川有紀・荻野麻衣
		今村直子・小林俊子・渡辺二三代・村上令子
その他協力者（順不同・敬称略）		岡みどり・藤原晴実・岡村真理子・池野栄子・社領育代・西上勝弘
		竹山嘉夫・福井敦・井上進次・深澤良章・谷本達也・西上知予子
		二葉滋・渡辺玲・木村慶子・岸田功・細尾肇・菅原明弘・国見幸春
		藤吉真弓・三輪隆子・梅津智子・妹尾有規子・藤吉真一

遺跡から見た西摂平野



第２図　調査対象地と隣接遺跡

第４節　試掘調査の実施（昭和50年度）

１．試掘調査の方針と方法

昭和50年に始まった試掘調査の調査対象面積は15万㎡にのぼる広大なものであった。当初ここで認識されていた遺跡は、この地域一帯の地表面に認められる条里地割だけであった。これ以外には、土器の散布等何らかの遺跡の存在を予測させる兆候が認められなかった。しかも、当地は地形図によると沖積地の中央部の最も低地にあたり、集落遺構が存在するには悪条件な地勢であった。

その以前には近接の田能・勝部遺跡において、大規模な調査がなされていた。その調査の結果、この２遺跡の中間地帯である当地は地形的に弥生時代の水田が存在するであろうことが推測されていた。遺跡範囲がその距離から当地まで延びているとは考えられなかったが、これらの遺跡の周縁部、特に存在したであろう水田耕作地についての十分な情報は無い状況であった。そこで、調査は遺跡周辺部における地理的条件を探ることに主眼をおいた調査とすることとした。

そこで調査実施に当たって「猪名川流域自然史調査会」との協議で、地層観察のトレンチ調査を優先に行うことを前提として自然科学部門と文化財面の調査の進め方の摺り合わせを行った。その結果基本的な方針は下記のようになった。

① 対象地域全域の地層状況を把握できるように、支障のない限り連続したトレンチを縦横に設定する。
② 兵庫県側の事業地は汚水処理水槽の建設予定地で、地下10m近く掘削されるのでトレンチの深さは可能な限り掘り下げる。
③ トレンチ掘削途次に遺構が出現した場合は遺構の調査を優先して行う。

調査は対象地に対して東西南北に25m間隔でそれぞれ２m四方の試掘坑を設けた。また、遺構・土器の出土状況などによっては適宜トレンチ調査を行った。

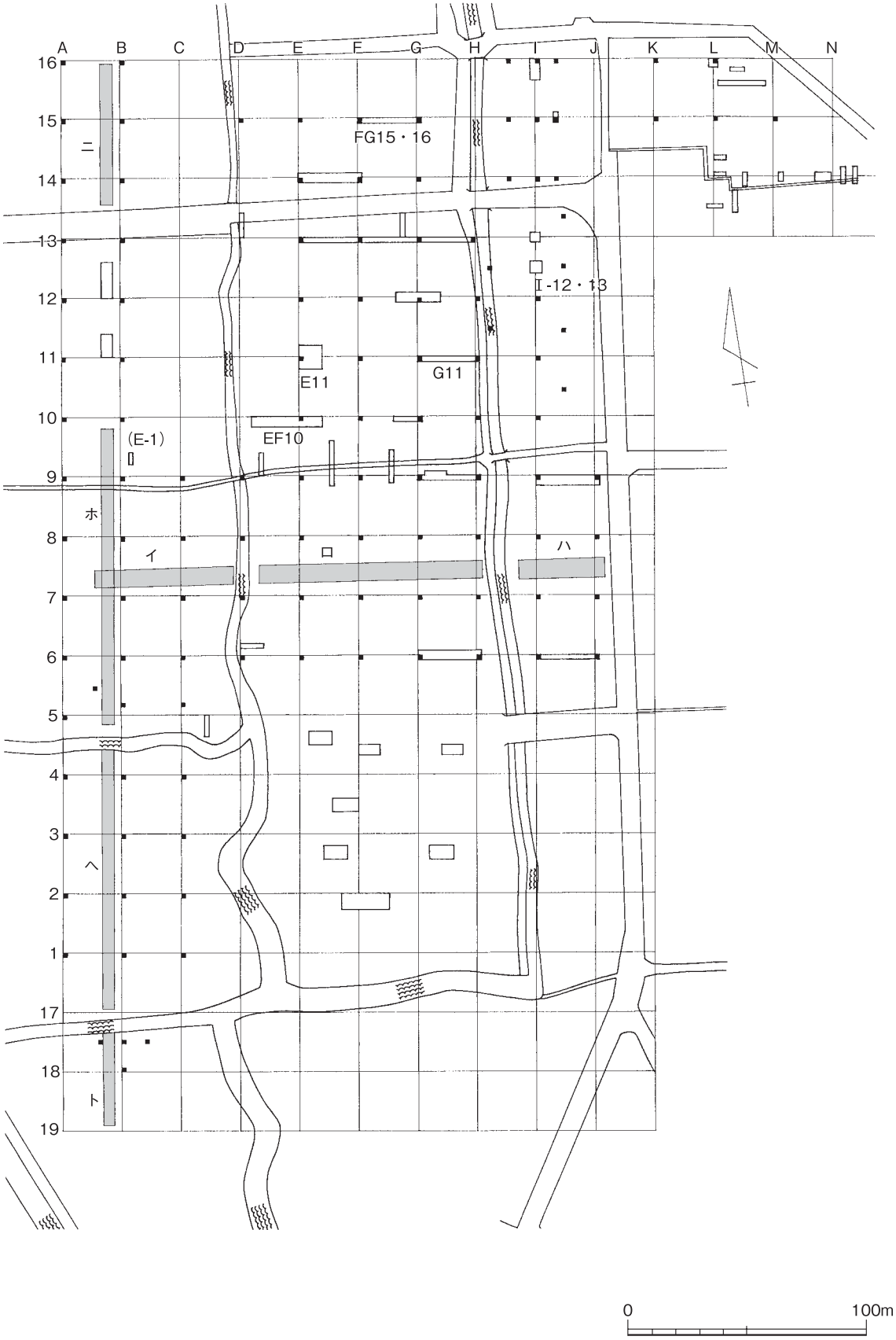
一方、地層観察トレンチについては、事業地内に未買収地などが残っていたため東西方向は敷地中央部に、南北方向は事業地の西地区に設けた。トレンチ規模は幅４m・深さ平均４mとし、計７本、総延長は540mにのぼった。

２．確認調査と地質トレンチの調査結果

調査番号：750001

担当　文化財保護課　技術職員　小川良太

確認調査では最初に最も大規模な調査になる地質トレンチの設定位置を検討した結果、未買収地･未撤去の建造物などをさけると南北トレンチは事業地の西端区、東西トレンチは南地区の中央に設ける以外に適地はなかった。このため各トレンチ位置にあたる地点の試掘調査から開始した。この他に調査としては、現地表に見られる条里地割の初源、その他の手がかりを得る目的で坪境にトレンチを７ケ所設



第３図　昭和50年度　確認調査・地質トレンチ（イ～ト）配置図

定した。

試掘調査の結果、Ｄ～Ｊ－６～16の調査区の大多数において、数は多くなかったが弥生式土器を中心として須恵器その他の出土品があった。これらの出土品の多くは黒色のシルト層あるいは砂層から出土していた。そして、これらの堆積層の多くは植物遺体層を伴っていた。この状況は明らかに水路内の堆積層を示し、また一部では水路の岸も確認できた。

遺構については土坑状のものが２～３基認められたが、顕著な遺構は見られなかった。他にはＨとＪライン上で中世から近世初頭期のものと考えられる溝跡を発見できた。この２ヶ所の溝は南北に一直線に続いていることが推測された。条里遺構に関してはどのトレンチにおいても、地表面の畦以外には下層に何らの徴候も見出すことはできなかった。Ａ～Ｃ－９より南の地区については土器の出土もなく、土層についても遺跡の存在を示すものはなかった。

地質トレンチについては、Ａ・Ｂ－11～13において弥生式土器を出土する水路跡が発見できたためトレンチの設置は見合すこととし、遺構探索のトレンチを設定したところ弥生式土器を出土する水路跡を発見した。東西方向のトレンチについては掘削途次に水路跡・土器の出土があったが、未買収地などの条件で他に事業地を間断なく横断できる場所がなかったため当初予定地内のトレンチを掘削した。地質トレンチは計７ヶ所となった。これらの各トレンチにおいては、土層観察および各土層ごとの土壌サンプリングを行なった。(ロ）トレンチでは現地表面からトレンチ底間－約４ｍの柱状サンプリングを行った。(成果は第５章に記載)

これらの調査の結果、事業地の全般にわたって現地表下（水田）70～80㎝までは黄灰色ないしは黄褐色の土壌（シルト）が水平に堆積していた。Ｍ１溝はこの層の中間にて検出される。ここまでは明らかに水田土壌と判別ができた。この層の下面には平均20～30㎝の灰色ないしは茶褐色のシルト層が、全域的にほぼ水平に堆積している状況が見て取れる。その下層には黒色粘土層が堆積する。ここが弥生時代の遺構面となる。Ｉラインから東の地区については褐色の粘土層が挟まってくる。この層面においてＭ２溝・掘建柱建物等の遺構が検出された。また、Ｂ－９地区において青磁片の出土した中世の土坑墓(Ｅ－１）が検出された。

第５節　本発掘調査の経過

昭和51年度

調査番号：760001

担当：社教・文化財課　技術職員　小川良太・吉田　昇

兵庫県社会文化協会　派遣職員　波毛康宏　同嘱託職員　山本芳彦

調査期間：昭和51年７月12日～昭和52年３月25日

当該年度は前年度の調査結果を踏まえて全面調査に移行することになった。調査の対象範囲にはいまだ土地の未収用・建屋の未撤去地区もあったが、工事着手時期も近づきつつあり対象面積も広大であったためである。そのため、この後も随時確認調査をも並行して実施していくこととなった。そして第一

期工事予定地区として提示された約10,500㎡を全面調査とし、新たに土地の収用が完了した一部地区の確認調査を含めた範囲を調査対象とした。この事業規模に対して、県教育委員会としては対応職員の不足することが判明したが、教育委員会としての人員増は出来なかった。このため発掘調査事業の一部を(財）兵庫県社会文化協会に委託し、同協会内に「埋蔵文化財発掘調査団」を設置し２名の調査員を配置して実施することになった。一方、県教育委員会でも２名の職員を配置して調査に当たることになり両組織の共同調査形態となった。

この調査においても引き続き地層その他の自然史部門については、「猪名川流域自然史調査会」に助言・指導を調査進行に合わせて適宜うけることとした。

昭和52年度

調査番号：770001

担当：社教・文化財課　技術職員　小川良太・森内秀造

調査期間：昭和52年４月１日～10月20日

当年度の調査の開始にあたって教委では、これまでの調査成果から本格調査を構える必要性は認められないとの判断に基づき、今年度にて調査は終了するとの方向性を打ち出した。そのため調査範囲は前年度に引き続き、第一期工事予定地区内の南地区に設定することを中心とした。併せて事業地北端地区で発見された大型水路の流路方向を見極めるために、調査区を南方向に拡張することも計画した。調査は工事着手時期も迫ってきていることもあり、前年度末から切れ目無く継続することになった。調査体制は再び教育委員会単独による実施となり、教育委員会職員２名により実施した。

発掘調査に着手し事業を進めた結果、南地区においては表土掘削後事前に予想していた以上の大規模な木杭列の存在が判明した。この調査のためには相当数の日数が必要と判断されたが、教育委員会では他の緊急性のある事業との勘案のなかで当遺跡の調査期日延長はできないとの判断が下された。このため調査は当初予定の日程にて打ち切ることとなった。この方針のもと現地においては、残された日程の中で完遂できる範囲に絞り調査をすることにし、とくに杭列の密集する範囲については埋め戻して次期調査に備えることとした。

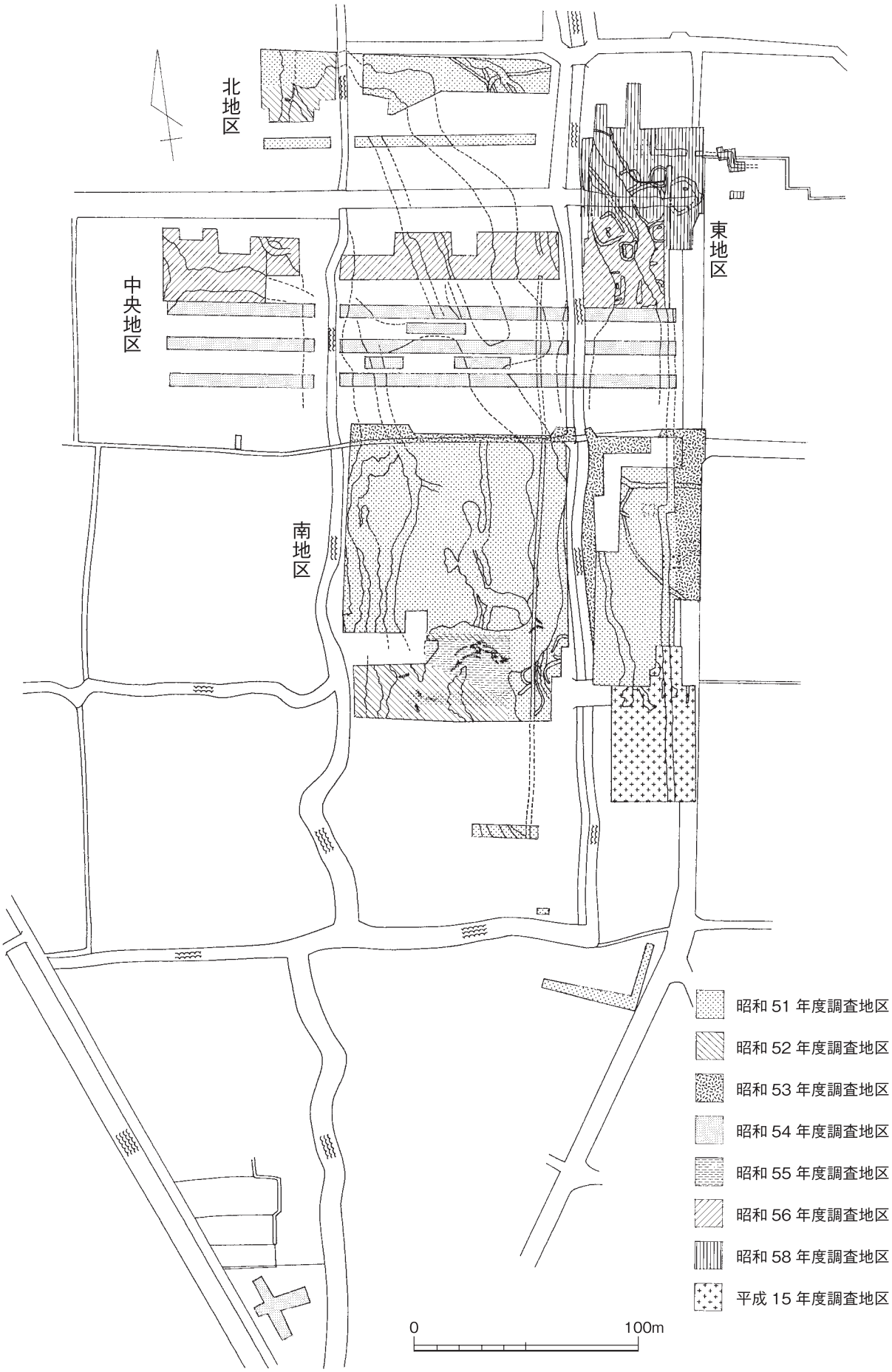
昭和53年度

調査番号：780005

担当：社教・文化財課　技術職員　小川良太・岡田章一

調査期間：昭和54年１月29日～３月25日

当年度は第１期工事区の範囲のなかで、これまで調査を着手できなかった東端の大阪府と兵庫県の府県境の県道部を中心として調査を実施することとなった。事業地の東端部・府県境地区については、それまでの調査結果からの判断であった。調査は道路使用の撤去が完了する年度後半とすることで土木部と協議合意した。


北地区
中央地区
東地区
南地区
昭和 51 年度調査地区
昭和 52 年度調査地区
昭和 53 年度調査地区
昭和 54 年度調査地区
昭和 55 年度調査地区
昭和 56 年度調査地区
昭和 58 年度調査地区
平成 15 年度調査地区
0
100m

第４図　年度別調査地区

昭和54年度

調査番号：790001・790045

担当：社会教育・文化財課　主任　櫃本誠一、技術職員　加古千恵子・岡田章一

調査期間：昭和54年５月18日～８月24日

土木部では前年度に第１期工事の２次着手地区をそれまでの南進計画を変更して、北へ拡大する方針変更がなされていた。このため調査対象地区は昭和51年度調査区の北に接する地区となった。当年度の調査計画・実施段階においては、それまでの調査結果についての評価が分かれ、調査実施の不要案まで出された。その根拠は、特に今回の対象地区についてはこれまで発見されたのが、水路跡とその中よりの土器その他遺物の散発的な出土状況にあったことである。しかし少ないながらも出土品があり、水路跡そのものにも明らかな人為の工作痕跡が認められることもあり調査実施にこぎ着けた。結果、調査は埋没水路跡の方向と、これまでに明らかになっている水路跡との連続性を確かめることを主な目的とすることとなった。

昭和55年度

調査番号：800012

担当：社会教育・文化財課　技術職員　小川良太・加古千恵子

調査期間：昭和55年４月21日～11月12日

当年度の調査は昭和52年度の調査において発見し、未調査地とした木杭列群の地区のみとなった。調査途時において当初予想の倍以上の規模になったため、写真測量を行うこととした。また、全体の調査計画は、土木部側の社会情勢の変化に伴う建設計画の縮小決定もあり、この年度限りにおいて中断することが決められた。

昭和56年度

調査番号：810010

担当：社会教育・文化財課　技術職員　加古千恵子・森内秀造

調査期間：昭和56年４月20日～10月31日

昭和54年度に実施した北側の地区の調査を実施した。当初、この昭和54年度の調査結果に基づいて中央Ⅵ地区に南北方向のトレンチ３本、中央Ⅶ地区に東西方向のトレンチ１本、東Ⅰ地区に東西方向のトレンチ２本を設定し、調査を実施した。この結果、中央Ⅵ地区と中央Ⅶ地区で弥生時代・古墳時代・中世の流水路、東Ⅰ地区では方形周溝墓等の遺構が発見されたことにより、それぞれの地区でトレンチを拡張し、本発掘調査を実施した。

なお、東Ⅰ地区方形周溝墓ＳＸ２およびＳＸ３で発見された木棺は棺の底板等が残存していた。木質の残存例は当時としてはきわめて珍しく貴重な発見例であったためウレタン工法により遺構を切り取って保存処理を奈良国立文化財研究所にて実施した。

昭和58年度

調査番号：830033

担当：社会教育・文化財課　技術職員　森内秀造・別府洋二

調査期間：昭和58年５月16日～９月６日

昭和56年度に実施した東Ⅰ地区の方形周溝墓群は状況からさらに北側に広がることが想定されたために、事前にトレンチで全体の遺構の広がりを把握した上で、本発掘調査を実施した。

第２章　遺跡の立地と環境

遺跡は伊丹市の東南端域に位置し、南は尼崎市、東は大阪府豊中市に接している。事業地の南は東流する猪名川に接している。猪名川は丹波山地に源を発し、当地の北西約７㎞の川西市域の南部で平野部(西摂平野）に入り平野西部にある伊丹台地の東崖面に沿って南流し、当遺跡の西２㎞で藻川を分岐すると共に東に向きを変え、再び遺跡の地点で方向を変え南流し大阪湾に流入する。一方平野の東部には千里丘陵が広がり、丘陵からは箕面川と千里川が西流し猪名川に合流する。この千里丘陵の東崖面にはこの２河川による扇状地が形成されている。当遺跡はこの３河川により形成された沖積平野の中央に位置し、近世の地形図（明治18年陸軍測量図）によると平野中央の等高線は北西から南西に開口する浅い谷地形を示している。

周辺における遺跡は古くからこの沖積地を取りまく地域を中心として知られてきた。平野西の伊丹台地が北に延びる川西市域の台地では加茂遺跡が知られてきた。遺跡は大量の石器及び土器が散布していることで知られてきており、1960年代以降の長年の宅地化に伴う調査が継続されている。その結果、弥生時代の大規模な環濠を伴う集落で中心部に方形の区画と共に大型の建物・竪穴住居・方形周溝墓・土坑･溝等が発見されている。この他縄文時代後期の土器埋設遺構･土坑なども検出されている。川西市栄根遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓が検出されている。伊丹台地では江戸時代の伊丹郷町の発展に伴い古くから都市化が進み多くの遺跡が消滅していると考えられていたが、最近の調査の進展により古墳の痕跡・縄文時代の土坑・土器が発見されている。千里丘陵では豊中市待兼山遺跡では弥生時代中期の高地性集落が発見されている。丘陵に続く扇状地上では豊中市の勝部遺跡が1967年の空港拡張工事により発掘調査された。その結果、弥生時代の前期から中期にいたる時期を中心とする大規模な集落遺跡であることが判明した。遺跡からは中期の竪穴住居跡・木棺墓群とともに多数の人骨が発見されている。さらに古墳時代前期の掘建柱建物・土坑・井戸等も発見されている。豊中市・池田市にまたがる宮の前・蛍池遺跡では弥生時代中期の方形周溝墓や竪穴住居跡が発見されている。尼崎市では1966年取水場建設に伴い田能遺跡が発見されている。遺跡は弥生時代中期の方形周溝墓・竪穴住居など多くの遺構が発見された。周溝墓には木棺が残っており、中には銅製の釧を装着した人骨や装飾として多量の碧玉製管玉を装着した人骨などが発見されている。また、銅剣の鋳型も出土している。

この西摂平野の北辺台地の上では銅鐸の出土が多いのも特徴である。猪名川上流域では川西市万願寺と伊丹台地の北辺の川西市栄根で近畿式銅鐸が出土している。伊丹市の大阪空港内（旧神津村小坂田）からは外縁付紐式四区袈裟襷文銅鐸（中村銅鐸）が出土している。豊中市岡町原田神社からは外縁付紐式流水文銅鐸が２個、箕面川上流の箕面市如意谷の山中からは近畿式銅鐸が出土している。当遺跡から最も近くでは、豊中市利倉遺跡の水路の堰遺構から鰭の飾耳片が出土している。

伊丹市神津地区においては1936年からの大阪空港の前身の軍用空港建設に際し、大阪空港Ａ遺跡（弥生時代後期・古墳時代後期)・同Ｂ遺跡（縄文時代後期・弥生時代前期)・中村銅鐸出土地などの遺跡が知られてきたが、これらの遺跡は箕面川による扇状地の末端の沖積低地との境に立地すると考えられる。その後1960年代以降の高度経済成長期に入り道路をはじめその他の事業による遺跡の発見に伴い、当遺跡周辺の調査例も増加してきた。上記したように当遺跡の東西の隣接地の尼崎市田能遺跡・豊中市勝部遺跡の調査が相次いで行なわれ、大規模な弥生時代を中心とする集落遺跡の存在が確認された。大阪空

港の拡張工事に伴う調査は伊丹市岩屋の旧集落の移転の際にも行なわれ弥生土器・古墳時代の須恵器等と共に水路跡が発見された。その後、当地域においても都市化の波及による調査が増加し新たな遺跡が発見されている。口酒井遺跡においては縄文時代晩期の溝と土坑が発見され、突帯文土器と共に炭化米・籾圧痕土器・石包丁が出土している。弥生時代後期の竪穴住居・円形周溝墓も発見されている。森本遺跡においては縄文時代中・後・晩期の土器が発見されている。2003年来の空港騒音対策事業の大阪国際空港周辺緑地整備事業による岩屋Ｃ～Ｆ遺跡の調査においては、弥生時代前・中期の堰遺構が発見されている。このように縄文時代中期からの遺構はまだ確認はされていないが、人の活動の痕跡がそれまでの予想よりも早い時期から認められることとなった。

調査地内に三の坪・九の坪の字名がみられるように、調査地域一帯の猪名川左岸は最近まで都市化が進まず農耕地が多く残っていたため条里遺構が顕著に見られる。ここは摂津国川辺郡と豊島郡の境界地に位置する。調査地は川辺南条の三条一里に当たると推定されている。 (小川)

1	**原田西遺跡**	16	大塚山古墳	31	豊島南遺跡
2	田能遺跡	17	松ヶ内遺跡	32	住吉宮の前遺跡
3	口酒井遺跡	18	池田山古墳	33	宮の前西遺跡
4	森本遺跡	19	塚口城跡	34	蛍池西遺跡
5	岩屋遺跡	20	猪名寺廃寺	35	箕輪遺跡
6	勝部遺跡	21	南本町遺跡	36	蛍池北遺跡
7	田能高田遺跡	22	有岡城跡･伊丹郷町遺跡	37	蛍池東遺跡
8	四ノ坪遺跡	23	森本居館跡	38	待兼山遺跡
9	利倉西遺跡	24	西桑津遺跡	39	御神山古墳
10	東園田遺跡	25	大阪空港遺跡Ｂ地点	40	新免遺跡
11	西浦遺跡	26	大阪空港遺跡Ａ地点	41	山ノ上遺跡
12	深田遺跡	27	大阪空港銅鐸出土地		
13	古宮遺跡	28	北園遺跡		
14	前畑遺跡	29	下河原遺跡		
15	中ノ田遺跡	30	小阪田遺跡		

周辺遺跡名一覧表

第５図　周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

参考文献

兵庫県教育委員会　1985「兵庫県埋蔵文化財調査年報」昭和57年度
兵庫県教育委員会　1987「兵庫県埋蔵文化財調査年報」昭和59年度
兵庫県教育委員会　1988「兵庫県埋蔵文化財調査年報」昭和60年度
伊丹市教育委員会　2000「口酒井遺跡」
伊丹市教育委員会　1968「岩屋旧集落遺跡調査報告」
豊中市教育委員会　1972「勝部遺跡」
豊中市　2005「新修豊中市史」第４巻
尼崎市教育委員会　1982「田能遺跡発掘調査報告書」
伊丹市　1971「伊丹市史」第１巻
尼崎市　1966「尼崎市史」第１巻
兵庫県教育委員会　2006「岩屋遺跡・森本遺跡」
関西大学　1968「摂津加茂」
大阪府　1978「大阪府史」第１巻
兵庫県　1992「兵庫県史」考古資料編

第３章　平成15年度の調査

第１節　遺構

基本土層は①盛土　②黄褐（灰オリーブ）細砂～中砂（小礫含む）　③にぶい黄褐（灰オリーブ）細砂　④黒褐シルト質細砂　⑤黒褐中砂　⑥黄灰（にぶい黄褐）シルト（地山）となっている。一部②層上面の盛土下に耕土が残っているところもある。

確認調査の結果から、遺構面は３面あると判断した。第１面は④層上面で時期は中世～近世、第２面は⑤層上面で時期は古墳時代末期から弥生時代にかけてのものである。第３面は地山面で検出しており、時期は弥生時代である。

第１面の遺構は、大溝（ＳＲ01）と土坑（ＳＫ01・02)、耕作痕（鋤溝)、地震痕跡（噴砂）を確認している。ＳＲ01は調査区中央東側を南北に貫流している。ほぼ直線である。北側から続いている遺構で、既存の調査でも中世遺物が出土している遺構（Ｍ２溝）である。幅３m前後で深さは0.6m以上を測る。土坑は２基とも調査区北端で検出されている。遺構の性格は不明で、ＳＫ01は最大長0.6m、ＳＫ02は最大長1.1mを測る。耕作痕は東西方向のものが大半であるが、新しい時期には南北方向の鋤溝も見られる。大溝と平行もしくは直交している。大溝を除いて調査区全域が耕作地であったことが明らかである。地震痕跡もほぼ全域で確認されるが、ＳＲ01周辺がより顕著である。噴砂だけでなく、土層全体が大溝に向かって地滑りを起こしている。特に西側はほぼ全体に地山のシルト層も含めてずれている。大溝の空間があることで内側に滑りやすかったことによって生じたものと思われる。噴砂も溝と平行に近い主軸方向で検出されているものが多いが、北西部では45°近く角度を変えている。

第２面の遺構は、掘立柱建物・土坑・落ち込み・溝・ピットを確認している。第１面の大溝（ＳＲ01)はこの時期には埋没しており、弥生時代に掘削され大きく時期を隔ててほぼ同じ位置に築かれた溝である。第２面の遺構は調査区北東部分に集中している。掘立柱建物（ＳＢ01）は南北２間で東側調査区外へ延びている。芯間の距離は北から3.0m、2.4mと同距離ではない。北辺のみ北西隅から２本目の柱穴が検出されており、距離は3.0mを測る。柱穴からの出土遺物は土師器小片だけで、時期は確定できないが、古墳時代末かと思われる。主軸方向はほぼ南北を示している。土坑は７基検出しているが、性格がわかる遺構はない。ＳＸ01とＳＸ02は方形で竪穴住居跡の可能性が高いと思われるが、柱穴・壁溝を検出できなかったことから、落ち込みとして報告する。ＳＸ01は南北4.8mの落ち込みで西側は大溝に切られ、東側は調査区外に続いている。また、床面にはコンクリート基礎掘り方が一部かかっており残存状況は悪い。ただ、北辺は壁溝状になり、ピットも検出していることなどから竪穴住居跡かと思われる。須恵器が出土していることから、６世紀末頃の遺構である。ＳＸ02も方形の落ち込みで西辺を大溝で削られている。南北3.8mを測り、最大の深さは0.2mである。やはり須恵器小片が出土しているので、ＳＸ01と同じ６世紀末頃の遺構と思われる。ＳＸ04とＳＸ05は自然の遺構の可能性の高い落ち込みである。ＳＸ04は全体では長方形に近い不定形で、東は直線で西は歪になっている。最大長8.2m、深さ0.5mを測る。ＳＸ05は溝状の落ち込みである。幅２m前後で北西から南東方向に向かっている。検出した長さ13.4m、深さ0.6mを測る。ＳＸ05上面砂層から石包丁が１点出土している。溝は５条検出している。ＳＤ01は調査区北東にあり、ほぼ南北方向に直線的に南流している。調査区北側から続いており、

７ｍのところで消失しているが端部は僅かに西側に曲がりかかっている。幅１ｍ前後で直線に延びており、断面はレンズ状である。ＳＤ02は小規模な溝でＳＤ03を切っている。僅かに弧状になり、幅40㎝に満たない溝で深さも10㎝と僅かである。ＳＤ03は調査区東側に延びる溝で西側はＳＤ02に切られている。長さ２ｍ余りである。ＳＤ04は大溝に接するようにその西側を南北に走っている。南側は端部となり丸く納まっている。長さ９ｍ、幅１ｍで北側は東に隅円方形に曲がっており、ＳＲ01に切られている。ＳＤ05は東西方向にやや主軸方向を振る直線的な溝である。途中はＳＲ01に切られているが長さ７ｍを測る。幅は0.1m前後である。下層(第３面)の遺構の可能性が高い。ＳＤ07は東西方向の溝で調査区東側に延びている。調査長４ｍ、深さ0.2mである。ＳＤ01・ＳＤ07・ＳＤ04は一体の遺構で方形周溝墓の溝ではないかと考えている。方形周溝墓とすると、その規模は東西11m、南北14mになる。

第３面の後で第２面の遺構が構築される前に大溝（ＳＲ01）が築かれている。大溝（ＳＲ01）は第１面と同じ位置に存在する。弥生時代の溝の位置に断続して築かれ利用されたものと思われる。規模は第１面の溝より大きく、深さは１ｍ前後になる。断面形状も逆三角形に近い鋭角になる。

第３面の遺構は落ち込み・溝・土坑・ピットを確認している。やはり調査区北側に集中しているが、ＳＤ11だけ南側で調査している。落ち込みは１基でＳＸ08である。自然の落ち込みでシルトと砂層が堆積している。不定形で北側には木材が出土しており、杭も認められる。旧河道の端部でしがらみが北側の近いところに存在するかもしれない。ＳＫ11～ＳＫ13は土坑としたが、ＳＸ08の一部かもしれない。溝は５本確認している。ＳＤ05・ＳＤ08・ＳＤ11は東西方向に流れ、人工の溝である。特にＳＤ11は断面逆台形に近いＵ字形でしっかりした溝である。長さ９ｍを測る。

(渡辺)

第２節　遺物

１．土器（図版10・11）

SX05出土土器

1・*2*の須恵器が出土している。*1*は杯身で立ち上がり部を欠くが、受け部径13.5㎝を測る。底部は丸みを帯び、外面ヘラ削りを施す。*2*はすり鉢で底部を欠くが、体部は比較的大きく開き、口縁端部をわずかに肥厚する。

SX08出土土器

*3*の弥生土器の底部が出土している。比較的薄手で、外面にはヘラミガキが施されており、煤の付着がみられる。

SD01出土土器

*4*の須恵器の杯身が出土している。口径は11.5㎝に復元できる。立ちあがりは内傾気味に高く立ち上がり、口縁端部には段を持つ。底部外面のヘラ削りが確認できる。

SR01出土土器

5・*6*の弥生土器、*7*・*8*の須恵器が出土している。*5*は高杯の脚部で杯部及び脚端部を欠く。上端に粘土剥離痕がみられる。円孔等は確認できない。*6*も高杯で脚端部のみであるが、*5*とは別の個体である。大きくハの字状に開く端部は丸く収めている。二次焼成による赤変がみられる。*7*は須恵器杯蓋で、口径13.4㎝に復元できる。杯身になる可能性もある。天井部外面のヘラ削りが確認できる。*8*は提瓶の耳。鉤状に突出している。

鋤溝出土土器

*9*の須恵器、*10*の瓦質土器、*11*の青磁が出土している。*9*は口縁端部、底部ともに欠くが、斜め上方に延びる径12.4㎝を測る受け部と、ほぼ直立する立ち上がりが確認できる。

*10*は羽釜の鍔部と考えられる。器面が磨耗して、細かい調整は不明であるが、全面に強いヨコナデ調整を加える。色調は暗灰色を呈する。中世前半の製品と考えられる。

*11*は青磁碗の底部である。内面には片切り彫りで簡易な草花文を施文する。内外面とも青磁釉を施釉するが、高台畳付～高台裏にかけては露胎である。龍泉窯系青磁劃花文碗で、12世紀後半～13世紀前半代の所産である。

包含層出土土器

12～*15*の弥生土器、*16*～*34*の須恵器、*35*の瓦質土器、*36*の瓦器、*37*の土師器、*38*の瓦が出土している。

12・*13*は広口壺の口縁部である。外反して大きく開く口縁端部を肥厚して*13*では下方へ引き下げている。*14*・*15*は底部である。*14*は厚手で指成形されており、体部はほぼ垂直に立ち上がっている。*15*は比較的薄手で外面にはヘラミガキが施されており、外面に煤が付着している。胎土に微細な雲母粒含む。

16～*22*は須恵器の杯蓋である。*17*・*18*は天井部の2/3以上の範囲にヘラ削りを施す。天井部と口縁部の境は鋭く稜をなす。口縁端部内面は段をもち、*22*は天井部が平らで、口縁部との境付近までていねいに手持ちヘラ削りを施す。天井部と口縁部の境は稜をもつ。口縁端部は丸くおさめる。*20*と*21*は天井部がヘラ削りのままで調整は施していない。天井部と口縁部の境はわずかに屈曲する程度である。*16*は天井部と口縁部の境に稜をもつ。口縁部は平坦で、わずかに外側に開く。杯蓋に分類しているが、口縁部の形態から壺蓋になる可能性がある。

23～*28*は須恵器の杯身である。*23*と*24*は別個体として図化されているが、諸特徴から同一個体になる可能性が高い。口縁部はほぼ直上に立ち上がり、端部は小さく面をなす。*25*も口縁部を欠くが、*23*・*24*とほぼ同様の形態になると思われる。*26*は*23*～*25*よりもひとまわり口径が大きく、口縁端部内面にわずかに段を残す。*27*は底部が丸く、外面にヘラ削りを施す。*28*は立ち上がりが低く内側に傾く。底部外面は約1/2の範囲にヘラ削りを施す。

29・*30*は須恵器の小破片であるが、いずれも瑳の破片であろうと思われる。*29*は外面に櫛描き波状文が見られ、頸部にあたると思われる。*30*は屈曲して立ち上がる口縁であろう。

*31*は須恵器の平瓶の肩部であろう。肩上面に自然釉がかかっている。

32～*34*は須恵器鉢である。*32*は口縁部内面が窪み、口縁端部が丸味をもつ。*33*は口縁端部外縁が突出するもので、端部内面が若干窪む。*34*は*32*同様口縁端部が若干丸味をもつが、口縁部内面の窪みは見られない。口縁部の形態から、いずれも東播系須恵器魚住窯の製品で、*32*・*34*は13世紀後半～14世紀前半代に、*33*は14世紀代の所産と考えられる。

*35*は瓦質土器羽釜である。口縁部は僅かに内傾し、外面に断面台形状の短い鍔を貼り付ける。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を加える。形態から中世後半の所産と考えられる。

*36*は器面の摩滅が著しく、細かい調整痕は観察できない。断面台形状の低い高台をもつ椀の底部で、瓦器椀の底部と考えられる。*37*は非ロクロ成形の土師器皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面には強いヨコナデ調整を、また体部内外面にはヨコナデ調整を施す。焼成はややあまく、色調はにぶい黄橙色を呈する。

*38*は丸瓦の見込み部片で、内面には布目痕がある。 (渡辺)

２．木器（図版11）

*W1*はＳＸ08出土の棒状の木製品である。一端が尖っている。

３．石器（図版12）

打製石器１点、磨製石器３点を図化した。

*Ｓ１*はサヌカイト製の平基式の石鏃である。表裏両面に素材剥片の剥離面を残しており、二次加工は周縁部にとどまる。側縁の形態は、ほぼ左右対称である。

*Ｓ２*は凝灰岩製の砥石である。上の一部は石理に沿った剥離で欠損し、下部も欠損しているが、長方形を呈していたと思われる。側面も全て使用しており、表面は図化したように非常に細かい擦痕と、かなり深い溝状の擦痕が見られる。砥ぎ方向は一定ではなく、砥面は平坦である。裏面は剥離したと思われる。

*Ｓ３*は粘板岩製の磨製石包丁である。刃部は極めて直線的で、背部は半月形を呈する。裏面も緩やかな鎬を形成する両刃である。刃部には、使用による欠損を再研磨した部分が見られる。穿孔は両側からされている。

*Ｓ４*は粘板岩製の石包丁未製品である。粗割し、敲打調整を経て、完成時の平面形を意識した整形が開始された段階のものと思われる。裏面の研磨痕は非常に細かく、方向は一定ではない。下半部は石理に沿って剥離したため、製作を中断したものと思われる。（古谷）

報告番号	器　種	石　材	出土地区	出　土　遺　構	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
Ｓ１	石鏃	サヌカイト	南Ⅲ地区	包含層　黄灰色土	24.5	18.4	3.6	1.3
Ｓ２	砥石	凝灰岩	南Ⅲ地区	溝下層	58.7	41.7	11.5	30.5
Ｓ３	磨製石包丁	粘板岩	南Ⅲ地区	ＳＤ11	91.1	37.2	9.1	41.4
Ｓ４	石包丁未製品	粘板岩	南Ⅲ地区	ＳＤ10	91.5	46.9	9.5	53.8

第３節　小結

本発掘調査の結果、３面で調査したが、時代は中近世と弥生～古墳時代の２時期である。中近世の遺構は大溝と耕作痕・土坑を検出した。長期間にわたって水田として土地利用がなされていたことが明らかである。大溝も水路として利用されていたものである。大溝は条里地割に沿っている溝と思われる。遺構ではないが、地震痕跡を比較的広く多く確認した。慶長の伏見地震による痕跡で大規模に地滑りしている状況が観察された。

古墳時代後期から奈良時代近くまで調査区北側は居住域となっていたが、弥生時代には方形周溝墓として墓域であったようで、南側の広い範囲は長期間水田域となっていたようである。北西部分には旧河道があり、水量調節を果たしたしがらみなどが存在している可能性が高いと思われる。

（渡辺）

第４章　昭和50年～58年度の調査

第１節　遺構

１．北地区（図版14～16）

Ｙ14溝～Ｙ17溝

Ｙ18溝の東ではＹ14溝～Ｙ17溝の４本の水路跡が重複して発見できた。Ｙ14溝・Ｙ15溝・Ｙ17溝の流路は北西から南東の方向にとり、Ｙ16溝は東から西行しＹ14溝・Ｙ17溝と交差して方向を変え南流する。溝の断面形はどれもＵ字形を示している。

Ｙ14溝は北端をＹ17溝によって削平されており、南ではＹ15溝・Ｙ16溝により切られている。溝内からは弥生時代前期の土器片が出土している。幅は0.9m～１mである。Ｙ15溝は北西から南下してきてＹ14溝と接して南に方向を変えており、幅は0.8m～１mである。Ｙ16溝は東西方向に位置し西端においてＹ14溝・Ｙ15溝と交差し南流し、幅は0.9m～1.1mである。また、Ｙ17溝は蛇行しながら北西から南東に流れＹ14溝・Ｙ16溝と交差し、南部で２分している。この溝の特徴は他の３溝と違いその底の形態に凹凸が多くあり、そこには砂礫が堆積していた。溝内からは弥生時代中期の土器が出土している。これらの水路の用途・性格に付いては明らかではないがＹ17溝を除く３溝は平面形態の特徴・溝側面の傾斜などからすると人工的に掘削された水路と推定される。一方、Ｙ17溝については、蛇行状況・断面形態の状況からは自然水路跡と推測される。

Ｙ18溝

当該溝は北Ｉ区において北から南へ下った後、東に方向を転じ、II区に続く。北から東へ転じるカーブ付近は南側の壁を大きく侵食する。II区では東行し、すぐに90°方向を南西に換える。水路幅は西端で10m、深さ1.7m、方向を変えた南西で幅14m、深さ1.8mある。水路の底からは弥生時代前期の土器・材等が出土している。水路の北東角の外湾部では水路底に直径２m・深さ1.3mのスリ鉢形の土坑があり、底からは弥生時代中期の土器片が出土した。その底近くの南西壁際に径0.3m・長さ1.2mの丸太材が水平に据えられていた。また、この丸太材の直上の土坑壁の一部には幅0.6mの階段状にステップが刻まれていた。この状況からこの水路が完全に埋没する以前の弥生時代中期の水汲み場遺構と推定できる。

第６図　Ｙ18溝底土坑

Ｙ19溝

Ｙ18溝は弥生時代末には埋没し、本来の溝機能は失われていたと思われるが、埋没の後も一定の滞水があったものと思われ、Ｙ19溝はこのＹ18溝の埋没上面を開削して北から南に流れる。Ｙ18溝は前述の通り、北から東へ流れを転じるが、Ｙ19溝はＹ18溝の南肩口を切って南に下り、この肩口を過ぎたあた

りで２つに分岐し、１本はそのまま南下、もう１本は南東方向に下る。この分岐後の２本の溝のうち、北から南に真っ直ぐに下る溝をＹ19西溝、Ｙ19西溝から分岐し南東方向へ延びる溝をＹ19東溝とすると、Ｙ18溝の埋没域で３m前後あった溝幅は、西溝で2.4m前後、東溝が3.4m前後となっている。従って、Ｙ19溝は溝全体が人為的に掘削されたどうかはわからないが、少なくともＹ18溝の埋没域から外れた東溝と西溝に関しては灌漑用水路として人為的に開削された可能性が高い。

東溝への分岐口は西溝の東肩を切る形で設けられている。分岐口の幅は約４mあり、この間には西溝の肩口に沿って多数の杭が打ち込まれている。このうち南側2.5mの間は多数の護岸杭列、北側2.3mの間は横板を通した堰である。東溝は幅3.5m前後で、深さは約20cmと浅いが、中央部が幅約1.5m、深さ約40cmと一段深く掘り下げられており、堰の部分から続いている。一方、西溝からの分岐口は４mの幅があり、杭を打ってその幅を狭め、その延長線上に堰を設けている。従って、堰から続く中央部溝の掘り下げは当初からではなく、水利改修に伴う２次的な処置であると考えられる。すなわち、西溝東肩の護岸杭、東溝堰の設置及び東溝中央部溝の掘削は、明らかに水量の少ない時に効率的に水を流す効果を狙ったもので、水利に伴う一連の処置と判断してよい。なお、東溝・西溝ともに堰付近などに土坑状に深く掘られている箇所があるが、溝自体が浅いので水量が少ないときの取水箇所として利用したものと思われる。このほか、溝の肩に人の足跡状の痕跡を検出している。　(小川・森内)

２．中央地区 **(図版17～19)**

Ｙ２溝

北西から南東方向へ流れる幅７～10m、深さ２mの流水路で、本調査地内において分岐・合流を繰り返す。まず、Ⅵ地区西において南西方向に向かうＹ２′溝と東方向に向うＹ２溝本体の２つに別れる。このうち、Ｙ２′溝は調査区外に延びるためにその行方を辿ることはできないが、Ｙ２溝本体は東に向い、Ⅲ－２地区付近において南に下るＹ３溝が分岐する。さらにＹ２溝本体も東進の後に、Ⅲ－２地区およびⅡ－２地区付近でＹ18溝と合流し、Ｙ１溝となる。

遺物はⅥ地区において溝の肩口付近より弥生時代前期～中期の土器や石包丁等の石器類、中央部から木製品、Ⅲ－２地区下層褐色砂層状面より磨製石包丁、砥石、凹石、土器が出土している。又、Ⅵ地区溝底より、流木群が検出された。これらの流木群は表面に皮がなく一見すると加工材のようにも見えたが、大洪水で流されたために木の皮がなくなったものと判断した（当時奈良国立文化財研究所の光谷拓美氏の御教示による)。なお、この流木群を含む最下層の砂層は土器の出土がないので、弥生時代前期以前の堆積層と思われる。

Ｙ18溝

南に流れる幅約10m、深さ２mの流水路で、弥生前期から中期の土器や木製品、石皿や石槍等の石器が出土している。土層観察より４回に分けて埋まっており、溝底にはかなりの砂が堆積している。Ⅱ－２地区付近でＹ２溝と合流してＹ１溝となる。Ⅲ－２地区下層の黒褐色礫混じり粘質土層および褐色砂層内から前期～中期の弥生土器片、Ⅰ－２地区Ｙ１下層から後期の弥生土器片が出土している。

Ｙ20溝

Ｓ１′溝の西肩に平行して走る溝で、杭列が検出されている。*167*の弥生後期の土器のほか石錘がかたまった状態で出土している。この溝の延伸部については不明である。

Ｙ19′溝

Ⅳ地区で検出された幅約２～３ｍ、深さ30～40㎝程度の浅い水路で、茶褐色砂質土中に弥生時代末期の土器が多く含まれていた。Ｙ19西溝の延伸部の可能性がある。

Ｓ１′溝

南に流れる幅２～10ｍ、深さ30～60㎝の溝が２本交差する流水路で、Ⅲ－２地区、Ⅱ－２地区、Ⅰ－２地区ではＹ２溝およびその延長のＹ１溝の埋没土上層を開削し、南１地区のＳ１溝につながる。出土遺物には古墳時代の土師器及び須恵器がある。

Ｓ２溝

Ⅱ－１地区、Ⅰ－２地区においてＹ２溝の上層を開削して南に下る溝である。中央区ではＹ２溝と重なるが、南区では分離する。Ⅴ－２地区西端、Ⅲ－２地区西端では確認されていない。須恵器出土。

Ｓ４溝

幅約１ｍ、深さ30～40㎝の南に流れる小溝で、部分的に合流したり離れたりしている。

Ｓ５溝

幅約３～６ｍ、深さ80㎝の溝で、北側では幅が狭くなりＶ字状を呈する。調査区南端で枝分れする。

Ｍ１溝

幅1.8ｍ、深さ80㎝のＶ字溝で、トレンチ南壁から北へ２ｍの所で終結しており、これに付随する施設等は検出されなかった。

Ｍ２溝

溝の切り合い関係により、Ｓ３溝より新しくＫ２溝より古い溝であるが、土器の出土がないため明確な時期は不明である。幅約２ｍ、深さ50㎝のＶ字形を呈する。

Ｋ１溝

Ⅴ－３・Ⅲ－３地区の西端で、東地区で検出した近世溝（Ｋ１溝）の西側の肩口を確認している。

Ｋ２溝

南東に流れる幅約９ｍ、深さ40㎝の浅い流水路で、土器及び曲物の底板が出土している。

（森内）

３．南地区 **(図版20～31)**

Ｙ１溝および堰遺構

南Ⅰ地区の東端を南北に流れており、東岸は現用水路の下になっており全幅は確認できなかった。水路内の最下層には細砂が堆積、この砂層の上には多量の植物遺体層が堆積しており、植物層の下面からは弥生時代前期の土器片が出土している。また、この植物層の上の堆積土中よりは中期の土器が出土している。この水路は調査区の南辺地区で西方向に向きを変え、水域がⅠ地区の調査地の東西幅全体に広がりを見せており、大きな湿地状態であったことを窺がわせる。この地域における北岸の高さは標高4.1～4.2ｍであった。

当地区Ｙ１溝の中央部と最南端の流路内の３地点にて、木杭による堰等の遺構が発見できた。遺構は北より杭列第１～３群とした。各群の概要は以下の通りである。

（第１群）；図版22

位置はＹ１溝が西へ流路を変換する直前の流路幅の西半側にあたり、Ｓ１溝が西から流入する位置に

も当たる。杭列は３組あり、それぞれ列の方向は違っている。

Ａ列は西南西―東北東の方向にあり、水路内の堆積層を除去した底の地山面にて検出できた。杭列の東端はＹ１溝の西岸から2.5mの位置になる。この位置はＹ１溝の西岸から水路中央の最深部への傾斜地の中に当たる。杭列の中央部は、上層の遺構であるＭ２溝により欠けている。杭はその間が空かないようにほぼ隙間なく設置されている。地表に出ている杭の長さは20～50㎝前後である。

Ｂ列はＡ列の東側にあり、Ｙ１溝の中央最深部を横断している。杭列は6.5mの長さに渡り、西北西―東南東の方向で設置されている。杭間は非常に空いておりその距離は30～50㎝ある。東端部には斜めに打設された杭があり、そこからはＢ列と直角方向―Ｙ1溝の主軸方向に打たれた杭が10本ばかり見られる。

Ｃ列はＹ１溝の西岸とほぼ直交する北西―南東の角度で設置されている。杭は複数列で南から北へ斜めに密度高く打設されている。列の長さは５ｍに渡る。杭列はＹ１溝の西岸とＡ列のある島状の地山の高まりの間にできた細い凹地――時期の水路部を塞ぐ状況である。杭間あるいは西南方向の下流側には材が散乱している状態であった。地表面上にでている杭長は30～60㎝である。

ここでの堰体の構造は杭頭の残存状態が悪いこともあり、詳細の状況は不明であった。

（第２群）；図版23～26

Ｙ１溝が北からの流路を90°西に変換する地点に扇形に築かれた堰群である。堰は大小13列以上築かれている。数次に渡り築造され、複数の堰が連関して機能していたと推測されるが詳細な関連性は十分には明らかにできなかった。堰の配列状況の平面形態から、二群に分類できると考えられる。第一はイ列を中心としロ・ハ・ニ・ト列までの群と、第二群はリ列を中心としてホ・ヘ・チ・ヌ・ル・ヲ列までである。どちらのグループも上流側である、北東及び北西方向に大きく弧を描いて築造されている。第一群がＹ１溝もしくはＳ１溝からの北ないしは北東からの流れに対し、第二群はＹ３溝とＳ２溝の北からの流れに対するものと考えられる。水流の主流が変化した結果に対応しているのかと推定されるがその前後・同時性については判然としない。この地区における杭の形状は丸太・板状の２形態である。長さは110～180㎝あり、丸太は径５㎝内外、板杭は最大幅15㎝・厚さ３㎝が平均的な大きさであった。大きさもほぼそろっていた。Ⅱ群における水路底は礫層が主体であり、そこが堰構築に際しての工作面となっている。標高2.7～2.8mである。

イ列

延長12.5mに及ぶ。南西端部はＹ１溝の東岸の傾斜面に達している。この地点における杭列の平面形態はＹ字形に二分し、水路岸の斜面を掘り込んだうえに設置されている。出土した杭頭部には横木が据えられており、南西端は地山面の高まりまで打ち込まれている。横木の長さは5.2mになる。横木は北西区端はＣ断面のところで終わっている。こちらの杭列端部も平面はＹ字状の形態を示している。この列における堰の構築構造は、杭列の前面(上流側)の川底礫層を幅100～130㎝・深さ70～100㎝・断面Ｕ字形に掘り下げている。この掘削は杭列のほぼ全域に渡って行われている。そこに植物繊維(草本類)を敷き詰めその上に粘土を中心とした土砂をはりつけるという工法を５～８回繰り返している。その高さは60～90㎝になる。この掘削溝の下流側の肩口に最前列（上流側）の杭を打ち込んでいる。杭は垂直ないし若干の傾斜（75～80°南に傾き）をもって打ちこまれている。その下流側に堰体の中心となる大量の杭を傾斜を持ち（45～50°）打設している。杭間隙は小枝・木ノ葉・粘土で充填されていた。その最上部に直径15㎝の横木として長さ3.8mの丸太材を置き、上を植物繊維で覆っている。横木は杭列から

50～60㎝南西（下流）に流されているように観察できた。ここにおける杭の頭部の高さは3.3～3.5m、横木の高さは3.4mある。(図版24　土層断面Ａ・Ｂ)

ロ列

延長2.2mの小規模な杭列でイ列の関連施設かと推定される。機能としてはイ列端部の地山との接地点の水流からの攻撃に対する防護施設とも推測される。杭頭の高さは3.1～3.2mである。

ハ列

延長5.2mの疎らに打たれた杭列である。イ列の関連施設か。杭頭部の高さは3.1～3.4mである。

ニ列

杭は長さ4.5mに渡り南西に弧を描き、下流側に頭部を傾け（50～60°）杭間の隙なく打設されている。杭頭部の高さは3.5～3.6mである。土層断面からするとイ列に先行して構築されている（図版24　土層断面Ａ)。これに付随して、杭列の根元から幅（南北）1.6m、横（東西）0.8mに渡って半円形に丸太材を敷き並べられていた。この敷き並べた状況の材はニ列中央部に対応する位置にだけ見られたが、築造当初にはニ列全域に対応して敷設されていたかどうかは不明である。材の長さは50～60㎝と比較的短いもので浅いスリ鉢状の凹地に沿って並べている。高さは3.0～3.2mに位置する。イ列の横木はこの施設に対応する位置にある。横木とは1.6mの間隔がある。これらはニ列の杭列と一体となって、イ列の越流水を受ける「水たたき」といわれる潜（洗）掘防止施設と推測される。イ列の頂上部との高低差は30㎝ある。

ホ列

延長9.8mあり、上面には横木が全長に渡って残存している。杭は疎らに残っている。築造構造はイ列とほぼ同様である。横木の高さは3.3～3.4m、杭頭部は3.1～3.3mである。

ヘ列

長さ1.6m。杭数は疎らである。東端はホ列に接する。杭頭部の高さは3.3～3.4mである。

ト列

長さ1.8m。杭列東端はＹ字状に分れてイ列に接している。杭頭部の高さは3.5～3.6mである。

チ列

長さ1.5m。リ列の東端の施設と考えられる。杭頭部の高さは3.1～3.2mである。

リ列

長さ13.6mに渡り、規模としては最大の堰遺構となる。堰の南西端はヲ列と重複しており、当該部は水路底の地山が中州状の高まりを示す位置に敷設されている。堰のほぼ中央部において長さ0.5m・0.8mの小規模の横木が認められる。杭は頭部を南に向け地底面から30～45°の角度で打ちこまれている。中には20°前後の角度のものもあった。使用されている杭は板材が60%近くあった。杭頭部の高さは3.2～3.5mある。横木の長さは3.6mある。

ヌ列

長さ2.4mの小規模なものである。横木を伴っている。杭頭部の高さは3.2～3.3mである。横木の長さは1.8mある。

ル列

長さ6.4mあり、北西に大きく弧を描いている。杭は疎らに並んでいる。ホ列の延長部と考えられる杭頭部の高さは3.2～3.5mある。

ヲ列

長さ6.4mあり、リ列の南部の一部と考えられる。杭は密に打たれている。1.8mの横木が北半に見られ長さ6.4mあり、杭材の形状・打ちこみ状況もリ列と同様である。杭頭部の高さは3.3〜3.4mである。横木の高さは3.1〜3.2mである。

ワ列

長さ1.6mと小規模である。

（第３群）；図版27

当地区における４遺構の機能および、それぞれの堰（杭列）の機能、あるいはその間の関連性に付いては明らかではない。Ｃ・Ｄ・Ｅは形態・設置位置の地形から水路を遮断する小規模な堰と推測される。Ａ・ＢについてはＣも含めて一連の遺構群と捕らえるとＹ１溝の中央の凹地の曲折部の西外湾に沿った水利施設である。

Ａ地点

木杭が1.0m×1.3mの小範囲に密集して打設されている。杭間はほぼ隙間なく、かつ垂直に打ちこまれている。検出した時点では横木あるいは、杭間の充填物は認められなかった。杭頭部は水路底の地山面上にわずかに残るだけであった。杭列の位置は凹凸のある水路底の凹部の入り口を塞ぐ状況にある。

Ｂ地点

杭の状況はＡ地点と同じ様相を示している。打ち込まれた平面形態が、幾本かの列をなしているとも見られる。その長さは25〜105㎝。水路底地下に入っている長さは最長のもので100㎝、短いもので20㎝ある。

Ｃ地点

杭列は西ー東の方向にあり、2.6mにわたって続く。列の東端はＹ１溝中央の凹地部を横断する位置にある。杭の大半は垂直に打設されているが、列中央部の杭については頭部を北に向けて斜めに打たれている。またこの部分については杭の密度も高く横木と考えられる材も出土している。そのほか、杭列の南には杭材が散乱した状態で検出された。

Ｄ地点

杭列は北ー南方向に、1.7mにわたって打設されている。杭頭を西にして斜めに打ちこまれている。杭の間隔は疎らであるが横木と考えられる材も出土している。設置されているのは、北から延びてきた凹地の一部が西へと分岐する地点に当たる。

Ｅ地点

杭列は西南ー北東の方向になり、垂直に打ちこまれた杭群である。設置された地点はＹ３溝がＹ１溝に流入してくる延長線上の凹地を横切る位置にあたる。

Ｙ３溝（図版20）

調査区内を蛇行しながら南北に貫流しており、北辺でＳ２溝と接合している。幅は２〜４mあり、深さは0.5mの全般に浅い水路である。Ｓ２溝との分岐点のすぐ南で東に向って支流がでている。(Ｙ５溝)しかし、分岐点から５mのところで水路は消滅している。この分岐点を中心として水路からは弥生時代前期の土器が出土している。

Ｙ４溝（図版29）

南Ⅱ地区の西端において北から南南東に向かって、ゆるやかに蛇行している。水路幅は一定しない。北端は現用水路等により破壊されているが、南Ⅰ地区のＹ１溝に接続していると推測される。水路断面形態はU字状を呈している。溝内よりは打製石剣が１点出土している。水路幅は1.1～2.5mである。水路南端は南Ⅲ地区の調査区では明確には検出できなかったので、拡散消滅しているものと推定される。形態的にも南進するに従い幅が広がり、蛇行も大きくなり水路の深さも浅くなっている。

Ｙ11溝（図版28）

Ｙ１溝の東岸が西に大きく曲がるところから南に直線的に南下し、その後、西方向に大きく弧を描いている。幅0.4～0.7m、深さ0.2mである。

Ｙ12溝（図版28）

Ｙ11溝の東側で、同様にＹ１溝より南に直線的に延びており南辺部で東に弧を描いている。幅は0.8～1.3m、深さ0.2mである。

Ｙ13溝（図版28）

Ｙ11溝・Ｙ12溝と交差しながら大きく弧を描いている。溝底は全面に凹凸がある。幅1.2m、深さ0.2mである。

Ｙ21溝（図版29）

南Ⅱ地区の北を東西にほぼ直線に横断して東へと延びている。この水路も西においてはＹ１溝と接続しているものと推測される。水路の断面形態は西半ではU字形をしているが、東半ではV字形に近くなっている。幅は2.7～3.0m、深さ0.7～0.8mある。

Ｙ22溝（図版29・31）

南Ⅱ地区の北西から南東にかけて大きく弧を描き、調査区の東に向かっている。水路幅は1.5～1.7m、深さ0.7mである。断面形態はV字形を呈している。北端にてＹ21溝により切られている。

方形周溝（墓）群（図版28）

ＳＸⅠ　周溝の北辺から西辺が調査できた。方形の北西・南西角の確認ができたが、何れも連続している。周溝幅0.55～1.3m。南北の規模は5.5mと推定される。

ＳＸⅡ　全体の西半部が調査できた。南北規模7.5m・東西3.5m以上（周溝外縁）。周溝幅0.6～1.0m。南西角は周溝が0.7mの間途切れて陸橋部となっている。

ＳＸⅢ　北辺の周溝はＹ１溝の南岸に接している。周溝の南東角は途切れて、陸橋部となっている。東西の規模は7.5mである。

この３基の方形周溝墓からは埋葬施設あるいはその痕跡も発見できなかったが、その原因は後世の地表面の削平によると推定され、平面形態から周溝墓であろうと推定した。溝内からは弥生時代中期の土器が出土している。

Ｓ１・２溝

Ｓ１溝は南Ⅰ地区の中央において不整形な凹地が南北に広がり、その中央部からは北に向ってほぼ一直線に延びていた。この水路の断面はU字形を示している。幅は1.5～2.1mある。この部分については、人工的に開削された水路跡と考えられる。出土品は古墳時代の須恵器と木器が出土している。南方向には２本の細い水路が枝分かれしてＹ１溝に流入する。また、東に方向を90°変え同じくＹ１溝に流入し

ている。この部分における水路の底には大きな凹凸がみられ、幅も一定ではなく自然水路と考えられる。

Ｓ２溝は南Ｉ地区の西端において発見された同じく不整形な形態を示す水路跡である。水路は北から南に向って蛇行している。この水路の屈曲点においては、その底の形状は著しく凹凸を呈していた。水路内の底部の堆積土は砂・礫であり、その上には灰色のシルトが堆積していた。出土品は弥生時代終末期の壺・古墳時代の須恵器・土師器・奈良時代の墨書土器・曲物であった。

この２つの水路跡は当地が弥生時代以降埋没していく過程で最後まで残った凹地形―湿地―の姿を表しているものと考えられる。Ｓ２溝の「井」字の墨書土器の出土はこの地点が古代の「水汲み場」であったとも推測される。

Ｍ１溝（図版20）

南Ｉ地区の東辺の現用水路の西６ｍの位置で、平行に南北に直進する溝である。

幅は1.3～1.6m・深さ0.6～0.7mあり、断面形はＶ字形を呈している。内部の堆積土からは土師器・羽釜・燻し瓦の細片が出土している。底には青灰色の細砂層が25㎝ほど堆積しており、その上層は黄色の細砂に多量の黒色の粘土塊の混ざった土砂が堆積していた。この土層状況は当初には溝としての機能があったが、その後極く短時間に埋められたことを表していると考えられる。この土層状況はこの溝全域にわたって同様であった。

Ｍ２溝（図版29）

府県境の道路と平行に正南北に延びる。現地表面の条里地割の水路から西40m・Ｍ１溝とは57mの距離にある。調査区北辺で直角に２回屈曲してクランク状を呈している。屈曲幅は約3.3mである。溝の断面形は逆台形を呈している。上幅3.5m・底幅1.7m・深さ1.6～1.4mである。溝は周囲の柱穴群を切り込んでおり、内部からは瓦片・須恵器・土師器片等が出土している。

ＳＢ01（図版29・30）

複数の建物が重なっているが、正確な建物の復原は不明である。

ＳＢ02（図版29・31）

棟行を東西にする３間×２間の掘立柱の建物である。西から２列目の柱はＭ２溝により失われている。柱間は2.7mある。柱の掘り方はすべて方形であり、一辺0.63～0.81mの大型である。柱は直径0.28m前後と推定される。

ＳＢ03（図版29・30）

南北に４列の柱跡がみられるが、南端の１列は柱の形態･大きさが異質であるので別種と想定すると、棟行きを東西にする３間×２間の総柱建物と推定される。柱間は2.25mある。柱のうち２本は土坑により欠損している。

土坑は主軸を北東から南西に向け、幅1.65～2.3m・長さ5.05m・深さ0.25mの船底型の浅い土坑である。用途等は不明である。出土品はなかった。（小川）

４．東地区（図版32～45）

概要

東地区は猪名川流域下水処理場予定地内の北東部に当たり、東側は大阪府との府県境に接している。西側は現在の水路によって画されており、この河道を挟んで、東Ｉ地区は中央Ⅶ地区の東側に、東Ⅱ地

区は北Ⅱ・Ⅳ地区の東に位置している。昭和50年度の確認調査では、弥生時代前期の溝（Ⅰ－12・13溝２）などが確認されており、昭和56年度・58年度の２ヵ年次に全面調査を実施した。

昭和56年度調査の当初には東西方向のＥ・Ｆトレンチ２本を設定した。その結果、方形周溝墓などが検出されたため、両トレンチをつなぐＧトレンチやＨ・Ｉ・Ｊトレンチを追加し、合計1,610㎡の調査を行った。(東Ⅰ地区)

昭和58年度には昭和56年度調査の東Ⅰ地区の北側部分を対象に調査を実施し、東Ⅰ地区間の現道路部も舗装除去後に調査を行った。さらに北側や東側にトレンチを設定して、遺構の広がりを確認し、約2,700㎡の調査を実施した。(東Ⅱ地区)

この地区では弥生時代前期から近世に至る様々な時期の遺構・遺物が、シルト混じり砂層のほぼ同一面で検出された。現場内には大きく撹乱が走っており、遺構の検出は困難であった。今回の調査により東Ⅱ地区の北端部では遺構は希薄になり、追加トレンチでも顕著な遺構は存在しないことが判明した。この東地区が本遺跡の北東隅にあたるものと思われるが、北東側が微高地であって後世に削平を受けた可能性も残される。尚、中世後半のＭ４溝については東側への続きをトレンチ調査によって追求した。

遺構

方形周溝墓・竪穴住居・土坑・掘立柱建物・柱穴・溝・流路などを検出し、弥生時代前期・中期・後期、古墳時代前期・後期、平安時代末、室町時代、近世と断続的ではあるが、各時期の遺物が出土している。また、遺構には伴わないが、縄文晩期の突帯文土器や13世紀代の青磁碗なども出土している。以下に新しい時期の遺構から記述する。

（１）近世の遺構

溝（Ｋ１）；図版32

近世の遺構には、調査区の西端を南北に流れ、東Ⅰ地区でやや東へ蛇行する溝（Ｋ１）がある。昭和56年度の調査（東Ⅰ地区）では、溝底に多数の杭が打ち込まれていた。溝と並行する杭列については護岸用、溝を横断する太い杭列については橋脚に利用された可能性がある。溝幅は15m以上、深さも2.5mほどあるものと推定される。昭和58年度調査の東Ⅱ地区では現水路下に重複しており、湧水が著しいため底までは調査できなかった。現水路はこの溝を踏襲したものであろう。

埋土下層からは多量の陶磁器*(359～381)*とともに、曲物*(W27～29)*、卒塔婆*(W30)*、下駄*(W31～34)*などの木製品が出土している。この水路の上流、現大阪空港滑走路の位置には旧岩屋の集落があり、そこから廃棄されたものであろう。

（２）中世の遺構

中世の遺構には堀状の溝（Ｍ２・Ｍ３・Ｍ４）、掘立柱建物（ＳＢ４）がある。

溝（Ｍ２・Ｍ３・Ｍ４）；図版33

これらの溝は直線的に掘削されており、断面は「Ｖ」字形を呈し、最下部は箱堀状となる。上幅約2.8m、底幅約0.2m、深さ約1.2mを測る。埋土下層は黒色粘土に中砂層が混じるが、流水を伴う溝ではない。出土遺物はほとんどなく、わずかに図化できない備前焼片・鬼瓦片が上層から出土したにすぎない。

Ｍ２溝は南北方向に走る溝で、北端では東Ⅱ地区で一旦途切れており、東地区内では延長約65mにわ

たって検出された。南Ⅱ地区・Ⅲ地区で検出されたＭ２溝（ＳＲ01）から続くものと思われ、総延長は約280m以上となる。南Ⅱ地区ではクランクしている箇所が認められ、また、掘立柱建物（ＳＢ２）を切って掘削されている。南地区で検出されたＭ２溝からも遺物の出土は少ないが、室町時代に属するものとされている。

Ｍ３溝はＭ２溝北端から約４m北に離れた位置に東西方向に掘削された溝で、西へ約12m続き、北へと直角に折れ曲がって続いていく。屈曲部では掘立柱建物（ＳＢ４）を切って掘削されている。

これらの溝からはほとんど遺物が出土していないが、Ｍ３溝の屈曲部付近の最下層シルト層から人間の頭蓋骨が出土した。この人骨は京都大学(当時)の池田次郎先生に鑑定していただいている。残存している骨は脳頭蓋で、それも頭蓋底を欠く頭蓋冠だけであるが、その特徴から壮年後半から熟年前半の男性のもので、長型頭蓋という中世の時代的特性を示している。刀傷等は認められていない。

このＭ３溝の東端部から約3.5m東に離れた延長線上に、Ｍ４溝が同じく東西方向に掘削されており、東Ⅱ地区の東壁まで続いている。Ｍ４溝の延長をトレンチによって確認したところ、西端から約18m東へ進んだ位置で南へ８ｍクランクし、再び東へ向かっていることが判明した。中世の堀状の溝がクランクしているのは、昭和51年度調査の南Ⅱ地区のＭ２溝でも見られる。東側は大阪府となるため状況は不明である。

また、Ｍ２溝の約56m西の南Ⅰ地区や中央Ⅱ・Ⅳ・Ⅶ地区で検出されたＭ１溝も同時期のものと考えられ、Ｍ２溝と同様南北に走っている。Ｍ１溝は規模的にはＭ２～４溝に比べて小さく、中央Ⅶ地区で北端部が検出された。

これらの室町時代に機能していたと考えられる溝は、Ｍ２溝が南から直線的に続き、２ヶ所の虎口状の開口部を設けて、Ｍ３・Ｍ４溝と直交方向に配され、Ｍ３・Ｍ４溝はともに屈曲して続いていく。水路としての機能はなく、防御や区画のために設けられたものであろう。これらの中世後半の溝は周辺の条里地割には乗ってこない。

区画としての機能は、Ｍ２・Ｍ３溝上にわずかに位置をずらして現代の溝が切って設けられていることや、この複雑な溝の配し方が兵庫県と大阪府との県境をなぞるかのように配されていることから、府県境を画する溝として、この中世後半まで機能していた溝が利用されたことが伺われる。

周辺には森本居館跡や岩屋城跡が存在したと言われるが、詳細は不明である。また、西方の猪名川西岸に存在する伊丹城（有岡城）で、多くの攻防戦があった史実に関連するものかもしれない。防御的な機能があったとすれば、これらの溝に囲まれた東側にその中心部が存在していたことが想定できる。

掘立柱建物（ＳＢ４）；図版34

先述のように東Ⅱ地区で室町時代のＭ３溝に切られて検出された。２間×３間の側柱の母屋に４面の庇が付くもので、母屋の規模は、南北約4.8m、東西約5.2mを測り、その柱間は南北2.1m、東西2.4mである。東西方向の幅がやや広くなる。庇の柱間も母屋と同様である。南西隅の庇の柱が欠ける。母屋の柱穴規模は直径約0.3～0.6m。庇の柱穴規模は直径約0.15～0.4mを測る。

柱穴内から出土した遺物はわずかで、いずれも小片であった。このため、本建物に伴う遺物で図化できたものはないが、黒色土器片が見られることから、平安時代頃のものであろう。

この他にもいくつかの柱穴が見られるが、建物を復原できるものはなく、遺物が出土したものもない。また、Ｍ４溝西端部の南に平面形が長方形の土坑が３基切り合って南から北へ順に新しく設けられている。木棺墓の可能性も考えられたが、粘土質の埋土をもち、弥生時代のものとは異なる。遺物は出土し

なかった。

（３）弥生時代後期から古墳時代の遺構

弥生時代後期から古墳時代の遺構には、須恵器が出土した土坑（ＳＫ26)、古式土師器が出土した土坑（ＳＫ20・ＳＫ21・ＳＫ22）や、自然流路（Ｈ１溝）がある。ＳＫ11からも土師器甕や壺底部の破片が出土している。

土坑（ＳＫ26)；図版44

東Ⅱ地区の南西部で検出された。直径約0.4m、深さ約0.2mの土坑で、内部から須恵器杯 *(195・196)* や土師器高杯片が出土している。遺物は土坑埋土中から出土しており、土坑底からは出土していない。東地区では唯一の古墳時代後期の遺構である。

土坑（ＳＫ20・ＳＫ21・ＳＫ22)；図版44

土坑（ＳＫ20･ＳＫ21･ＳＫ22）は近接して検出されており、流路（Ｈ１溝）が砂で埋没した段階で、中州或いは岸辺に近い位置に作られている。ともに短径0.8～0.9m、長径1.0～1.1m、深さ0.4m程度の平面形が円形を呈する土坑である。

ＳＫ20からは*189～190*の小型丸底壺、ＳＫ22からは*185*の高杯などの土師器が出土している。桃核と思われる植物種子が出土したものもあり、水辺の祭祀に伴うものであろう。遺物は埋土中から出土しており、土坑底からは出土していない。粗砂のベース面に掘り込まれており、埋土は砂を含んだシルトである。基本的にレンズ状堆積を示しているが、ＳＫ22では中位に炭を含んだ薄層が認められる。

土坑（ＳＫ11)；図版32

ＳＫ11は昭和56年度調査区（東Ⅰ地区）と昭和58年度調査区（東Ⅱ地区）にまたがった中央付近で検出された。２ヵ年次にわたって検出されたため、全容が不明であるが、長円形の平面形をもつ土坑である。*77・78*の土器が出土した。

流路（Ｈ１溝)；図版32

Ｈ１溝は東Ⅱ地区の南西端部から東Ⅰ地区の南東端部にかけて北西から南東に向かって蛇行しながら流れる自然流路である。埋土は極細砂から細礫で、ラミネーションをもって堆積している。

この流路は方形周溝墓を削って流れており、埋土中からは弥生土器片やサヌカイト製の石器 *（Ｓ14)* なども出土しているが、完形に近い状態の古式土師器 *(168～184)* が出土している。甕には煤が付着したものもみられる。また、流路がある程度埋没した上面や川岸には、先述の土坑（ＳＫ20･ＳＫ21･ＳＫ22）が設けられている。

（４）弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構には方形周溝墓、竪穴住居、土坑などがある。

方形周溝墓

東地区では方形周溝墓は合計10基検出できたが、後世の撹乱等によって認識できていない周溝墓が存在する可能性が残る。また、ＳＸ８を当初設定したが、検討の結果欠番とした。方形周溝墓群はさらに北側には広がらないことがトレンチ調査等で確認され、また、南側、西側にも後世の遺構で撹乱されているものの、大きくは広がらないことが推定される。また、東に隣接する大阪府側の調査でも方形周溝墓は検出されていない。このことからこの方形周溝墓群は十数基で構成されるものと考えられる。

方形周溝墓群は溝を共有や、切り合い、或いは拡張しているが、この傾向は南北方向に隣接する周溝墓で顕著である。東がやや北に振った東西方向を基線として並んでおり、南端のＳＸ１・ＳＸ６で、中規模の方形周溝墓が並び、ＳＸ２・ＳＸ５・ＳＸ11の列で、比較的規模の大きな方形周溝墓が並んでいる。その間や北側に規模のやや小さな方形周溝墓が接するように配置されている。ＳＸ５が最も規模が大きく、また古い様相をもつ土器が出土している。

ＳＸ１（図版35）

ＳＸ1は南西端に位置する方形周溝墓で、西側の過半を近世の溝Ｋ１で失っている。溝は北東部と北西部が途切れており、南側の溝は二重に走っている。外（南）側の溝は内（北）側の溝が埋没した後に新たに掘られている。周溝の深さは0.2～0.5m残存している。

溝に囲まれた内部の規模は、南北で約11m（古）、13m（新）を測り、内部に主体部と思われる平面形が長方形の土坑（ＳＫ19）が主軸を南北方向において設けられている。主体部の規模は南北約2.8m、東西約1.2m、深さ約0.2mを測る。

北側の周溝から*98・99・102*の土器が出土している。また、東側の周溝からは*97・100・101・104*、南側の周溝のうち内側（北）の溝からは*103・105*の弥生土器が出土している。

ＳＸ２（図版36）

ＳＸ２は東Ｉ地区の北西端部で検出され、昭和58年度調査の東Ⅱ地区で周溝の北東隅部が検出できた。西側の周溝の一部をＫ１溝によって失うが、ほぼ全容が残っている。但し、北側には周溝状に走るＳＫ10が存在し、北側の周溝が二重になるのか、別の遺構になるのかは不明である。周溝は南東部のコーナーが途切れている。周溝の深さは0.4～0.5m残存している。周溝に囲まれた台状部の規模は、南北約11.5m、東西約11.6mを測る。

内部には３基の主体部が残存しており、ともに木棺の痕跡が確認できた。主体部からは土器等は出土していない。主体部１は南北方向に主軸をおいて設けられており、南北約2.75m、東西約1.4m、深さ約0.4mで、木棺の規模は1.96×0.74mを測る。主体部２は主体部１の北東に接するように、東西方向に設けられており、台状部のほぼ中央に位置する。東西約2.0m、南北約1.1m、深さは15㎝程度しか残存していない。木棺の規模は1.32×0.46mを測る。主体部３は南東隅部で検出された小型の木棺で、主軸を東西方向において設けられている。南北約0.93m、東西約1.05m、深さは15㎝残存していた。木棺の規模は0.7×0.28mで、木棺の側板と底板の一部が残存していた。この遺構は近畿ウレタン株式会社に依頼して、ウレタンフォームで梱包して切り取り、奈良国立文化財研究所（当時）で、ＰＥＧ含侵処理をおこなっている

西側の周溝から*106～109*の土器が、東側の周溝からは*110*の土器が出土している。北側周溝の延長上に存在する土坑（ＳＫ10）からは*76*の土器が出土しており、周溝内の他の土器との時期的な齟齬はないことから、周溝墓の一部を構成していた可能性がある。

ＳＸ３（図版37）

ＳＸ３は東Ｉ地区の北東端部で検出された。東Ⅱ地区では、中世の溝Ｍ１によって大きく破壊されていたため、東側周溝については不明である。西側の周溝の一部を流路Ｈ１によって失う。北側の周溝はＳＸ５の南側周溝を切って掘削されている。周溝は検出できた範囲内では全周巡っており、途切れていないが、北西部では浅くなる。周溝の深さは0.25mほど残存している。周溝に囲まれた内部の規模は、南北約８m、東西6.8m以上を測る。

内部には２基の主体部が残存しており、ともに木棺の痕跡が確認できた。第１主体部は主軸を東西方向にして設けられており、南北約1.3m、東西約2.5m、深さは0.1m残存していた。木棺の規模は1.46×0.54mを測る。第２主体部は南東部で検出された小型の木棺で、主軸を東西方向において設けられている。木棺の底板がほぼ残されており、切り取って保存処理をおこなった。南北約0.7m、東西約1.25m、深さ約0.2mで、木棺の規模は0.85×0.44mを測る。

西側の周溝から*113*～*115*・*117*～*120*の土器が出土している。

ＳＸ３の台状部上面では、当初主体部と考えられていた長方形の平面形をもつ土坑（ＳＫ14～17）が検出されているが、土坑内から弥生時代前期の土器が出土していることから、前期の土坑として取り扱う。

ＳＸ４（図版38）

ＳＸ４は、東Ｉ地区の中央部で検出され、ＳＸ２の南東部で検出された。周溝のほぼ全周が残っており、陸橋部をもたない。周溝の深さは0.2m程度残存している。周溝に囲まれた台状部の規模は、南北約6.8m、東西約5.6mを測る。内部からは主体部は検出されなかった。

西側の周溝から*128*～*130*・*133*の土器が、東側の周溝からは*131*・*135*の土器が、南側の周溝からは*132*・*134*・*136*・*137*の土器が出土している。

ＳＸ４台状部上面の西端を横切るようにＳＤ３が南北に走るが、この溝からは弥生時代前期の土器が出土している。また、ＳＸ４の北東部には北側周溝に並行して走る溝などが錯綜し、別の周溝墓が存在する可能性があるが、明確な供献土器などの出土がみられないことから、認識できなかった。

ＳＸ５（図版39）

ＳＸ５は昭和56年度調査の東Ｉ地区の北東端部で西側及び南側の周溝の一部が検出され、昭和58年度調査の東Ⅱ地区で、北側及び東側の周溝の一部が検出できた。中央部を大きく撹乱で失い、南東コーナー部もＭ２溝に切られている。また西側の周溝を流路Ｈ１によって失う。南側の周溝はＳＸ３の北側周溝に切られており、北東コーナー部もＳＸ10と重複している。周溝は検出できた範囲内では全周巡っており、途切れていない。周溝の深さは0.25mほど残存している。

周溝に囲まれた台状部の規模は、この周溝墓群中最大のもので、南北約16.2m、東西約12.7mを測る。台状部上面では長方形の土坑などが検出されたが、非常に浅く、主体部とは断定できなかった。

出土土器は細片が多いが、北側の周溝から*111*・*112*の土器が出土している。周溝墓群の中では古い様相を示している。

ＳＸ６（図版40）

ＳＸ６は東Ｉ地区の南東端部で検出された。方形周溝墓を北西から南東へ斜めに流路Ｈ１が走っており、東側も中世溝Ｍ２によって切られている。北側の周溝は土器などが出土せず、この周溝墓を構成するものかは不明確である。西側周溝の南北コーナー部と、東周溝の北コーナー部近くが途切れており、陸橋部となる。周溝の深さは0.5mほど残存している。台状部の規模は、南北約11m、東西約7.2mを測る。内部から主体部は検出されなかった。

西側の周溝南端部から*140*・*143*～*147*の土器が、南側の周溝からは*138*・*139*・*141*・*142*の土器が出土している。また、昭和54年度トレンチ調査で、南側周溝の一部が検出されており、*46*～*49*の土器が出土している。

ＳＸ７（図版38）

ＳＸ７は東Ｉ地区の東半部で検出された。西側の過半を流路Ｈ１によって失い、南東部も撹乱等で失っている。北側の周溝はＳＸ３の南側周溝と切り合って掘削されている。

台状部の規模は、南北約10.2mを測る。内部には小型の主体部が残存しており、木棺の痕跡が確認できた。主軸を東西方向に向けて設けられており、南北約0.92m、東西約1.2m、深さ約0.15mで、木棺の規模は0.73×0.49mを測る。

周溝から*121*・*122*の土器が出土しているが、この方形周溝墓に伴うものか判断付きがたい。

ＳＸ９（図版41）

ＳＸ９は方形周溝墓群の北西端部で検出された。西側の周溝を流路Ｈ１によって失う。周溝は北西コーナー部付近で途切れ陸橋部となるようである。南側周溝はＳＸ５の北側周溝と切り合うが先後関係は不明である。周溝の深さは0.2mしか残存していなかった。

周溝に囲まれた台状部の規模は、南北約7.2m、東西約６mを測る。主体部は検出されなかった。また、遺物もほとんど出土せず、図化できたものはない。

ＳＸ10（図版41）

ＳＸ10は最も北側で検出された方形周溝墓で、東側は中世の溝Ｍ１によって大きく破壊されている。南側の周溝はＳＸ５の北東コーナー部周溝と切り合って掘削されているが、先後関係は不明である。周溝は検出できた範囲内ではほぼ全周巡っており、途切れていない。周溝の深さは0.3mほど残存している。

周溝に囲まれた台状部の規模は、南北約７m、東西約６mを測る。台状部からは主体部は検出されなかった。また、遺物はＳＸ５との切り合い部周辺で出土したのみであり、ＳＸ５北溝出土のものとして取り扱った。*123*の甕は西側の周溝から出土しているが、弥生時代前期のものである。付近に同時期のＳＫ30があることから、前期の遺構から混じり込んだものであろう。

ＳＸ11（図版42）

ＳＸ11は北東部で検出された方形周溝墓で、西側は中世の溝Ｍ１や、現代の撹乱によって大きく破壊されている。周溝は検出できた範囲内ではほぼ全周巡っており、途切れていない。周溝の深さは0.4mほど残存している。周溝からは*124*の土器が出土している。

周溝に囲まれた台状部の規模は、南北約13.3m、東西約11mを測る。台状部から主体部が１基検出された。東西方向に主軸を置く長方形の平面形をもつもので、南北1.2m、東西2.3m、深さ0.2mを測り、黄褐色シルトの埋土を有する。

土坑（ＳＫ７）；図版43

弥生時代中期の土坑にはＳＫ７・ＳＫ10があり、ＳＫ10は先述のとおりＳＸ２に伴う可能性が高い。

ＳＫ７は東Ｉ地区の方形周溝墓ＳＸ４の西側で検出された。1.8×2.4mの不定形の平面形を持つ土坑で、深さ約0.2mを測る。*70*～*72*の土器が出土している。

（５）弥生時代前期の遺構

弥生時代前期の遺構には土坑、溝などがある。

土坑（ＳＫ２～６・８・９・13～17・23・25・27・30）；図版32・43～45

弥生時代前期の土器が出土した土坑は比較的多いが、土器を図化できなかったものもある。

ＳＫ３は東Ｉ地区ＳＸ1の北側で検出された。0.6×1.2mの長円形の平面形をもち、深さ0.25mの規模である。*69*の土器が出土している。

ＳＫ８は東Ｉ地区ＳＸ２の北西隅で検出された。1.1×1.7mの長円形の平面形で、深さ0.4mの規模をもち、*73*・*74*の土器が出土している。

ＳＫ９は東Ｉ地区ＳＸ２の台状部上面で検出された。1.2×1.4mの楕円形の平面形をもち、深さ0.15mの浅いもので、*75*の土器が出土している。

ＳＫ14～ＳＫ17は東Ｉ地区ＳＸ３の台状部上面で検出された。

ＳＫ14は南北方向に主軸をもつ0.8×1.5mの隅丸長方形の平面形をもち、壁面が垂直に近く立つ、深さ0.4mの土坑である。*79*～*88*の土器が底付近から出土している。

ＳＫ15はＳＫ14の北東に近接して検出され、ＳＸ３主体部１と切り合う。東西方向に主軸をもつ1.1×1.4mの楕円形の平面形をもち、深さ0.4mの規模である。*89*～*93*の土器が出土している。

ＳＫ16は南北方向に主軸をもつ0.7×1.4mの長円形の平面形をもつもので、深さ0.45mと深い。土器が出土しているが、図化できなかった。

ＳＫ17はＳＸ３台状部の北東で一部をＭ２溝で切られている。南北方向に主軸をもつ0.6×1.8mの隅丸長方形の平面形をもち、深さ0.25mで壁面は立つ。当初、ＳＸ３の主体部と考えていたが、土器の出土状況が他の土坑に類似するため土坑とした。*116*の土器が出土している。

ＳＫ25は東Ⅱ地区ＳＸ９の北側で検出された。0.8×1.5mの平面形が長円形の土坑で、深さ0.5mの規模をもつ。*94*の壺が出土している。

ＳＫ27は東Ⅱ地区のＳＸ３とＳＸ５の周溝が切り合う部分で検出され、東半部をＭ２溝に切られている。土器が内面を上に向けて出土していたため、当初周溝の一部ととらえていたが、周溝に切られた土坑と判断された。1.0×0.85m、深さ0.35mの規模をもち、*95*の土器が出土している。

ＳＫ30は東Ⅱ地区のＳＸ９とＳＸ10間で検出された。0.7×1.3mの楕円形の平面形をもち、深さ0.2mの規模である。*96*の土器が出土している。

この他、ＳＫ２（0.8×2.2m、深さ0.19m）、ＳＫ４（0.9×1.4m、深さ0.25m）、ＳＫ５（0.6×1.2m、深さ0.25m）、ＳＫ６（0.7×1.0m、深さ0.3m）、ＳＫ13（0.6×1.2m、深さ0.25m）、ＳＫ23（1.0×2.2m、深さ0.45m）からも弥生時代前期の土器片が出土している。

これらの弥生時代前期に属する土坑のうち、方形周溝墓ＳＸ３の台状部上に位置するＳＫ14・ＳＫ15・ＳＫ16・ＳＫ17は隅丸方形の平面形をもち、深さも比較的深いことから、土坑墓或いは木棺墓の可能性がある。近辺は弥生時代前期から墓域として利用されていたものであろう。但し、弥生時代前期とされる木棺墓は口酒井遺跡で検出されているが、土器は伴っていない。

竪穴住居（ＳＨ１）；図版34

ＳＨ１は東Ｉ地区で、方形周溝墓ＳＸ４の南で検出された。周壁溝が検出されず、明確な住居のプランは不明であるが。４基の柱穴（Ｐ２・Ｐ４・Ｐ５・Ｐ６）と中央土坑（Ｐ１）が検出されている。柱穴は直径30㎝以下のものであるが、60㎝近く深いものがある。中央土坑は直径１m程度の円形の平面形をもち、深さは38㎝を測る。時期については出土遺物がなく不明であるが、近辺では弥生時代前期の遺構も検出されており、弥生前期の住居址の可能性が高い。

本遺跡では他に竪穴住居は検出されておらず、また、調査された一帯が、弥生時代には、方形周溝墓群などの墓域や、水路・流路など水田灌漑に伴う施設などが多く見られる点から、居住域の末端部であ

ると推定される。石庖丁などの生活用具も出土していることからも、居住域は比較的近くにあったものであろう。唯一検出されたＳＨ１は、一般の住居とは異なる性格をもった建物の可能性も残される。

溝（ＳＤ３・５・10)；図版45

ＳＤ３は東Ｉ地区のＳＸ４台状部にＳＸ４の周溝に切られて南北に走る溝で、全面調査時にはＳＸ４の周溝外の南北では検出されなかった。幅0.8～1.2m、深さ0.25mの規模をもち、*125*～*127*の土器が出土している。但し、*127*の土器は土坑に伴うかもしれない。

また、東地区の確認調査時に検出された確認調査Ｉ－12・13溝２は、ＳＤ３を南に延長した位置に存在した浅い溝である。この溝からは*204*～*209*・*219*が出土しており、同じく弥生時代前期の土器に限られている。この溝はＳＤ３と同一のものの可能性がある。

ＳＤ５は流路Ｈ１に並行するように西の肩部を北西から南東に走る溝或いは流路である。埋土中から*148*～*151*の土器が出土している。

ＳＤ10は東Ⅱ地区の北半部で検出された東西方向からやや南に下がる細く浅い溝で、*152*の壺が出土した。他に遺物は出土していない。

(別府)

参考文献

伊丹市教育委員会　1994「口酒井遺跡発掘調査報告　第22・25次調査」伊丹市埋蔵文化財調査報告書第20集

伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会　1999「口酒井遺跡発掘調査報告　第１～10次・第12～16次調査の概要」

兵庫県教育委員会　2005「岩屋遺跡・森本遺跡」兵庫県文化財調査報告第200冊

木下晴一　2003「那珂君休遺跡（福岡市）の二重堰」同志社大学考古学シリーズⅧ『考古学を学ぶ（Ⅱ)』

菅原康夫　1980「弥生系農業における水利施設の意義と展開」古代学研究会

第２節　出土遺物

１．土器

縄文土器（図版60）

原田西遺跡からは、縄文時代晩期の土器がわずかに出土している。遺跡の北東部周辺で出土しているが、東Ｉ地区ＳＸ４南及び東溝 *(200・202)*、ＳＸ１東溝、北Ｉ地区Ｙ18′溝 *(201)* など弥生時代中期の遺構からの出土であり、同時期の遺構は検出されていない。

図化できた３点は口縁部及び口縁部直下の突帯の小破片で、器形は深鉢と思われる。

*200*は折り返して肥厚させた口縁部で、爪形の浅い刻目が施されている。

*201*はわずかに端部を残す口縁部で、内傾した口縁部から屈曲させて体部へと続くものである。口縁端部の直下及び屈曲部に突帯を貼り付けている。刻目はみられない。外面には縦方向のケズリ状の痕跡がみられる。

*202*は貼付突帯部の破片で、浅い刻目を施す。突帯下方の外面には縦方向のケズリ状の痕跡が残る。黒い砂粒を含んでチョコレート色を呈しており、生駒西麓産の土器であろう。

西方に隣接する口酒井遺跡では、多くの突帯文土器とともに集落の一部が確認されている。また、北西に隣接する岩屋遺跡・森本遺跡では中期後半～後期初頭、後期中葉、晩期の土器が出土しており、原田西遺跡の大阪府側の調査でも後期の土器が出土している。　(別府)

弥生前期土器（図版46・48・49・52・53・55・56・60・61）

（１）出土状況

弥生時代の土器編年をはじめ研究は近年非常に進んでいるが、本報告書は調査時点の判断により分類している。そのため、櫛描き文出現以前を弥生時代前期としている。

弥生時代前期の遺構としては、東Ｉ地区のＳＫ３ *(69)*、ＳＫ８ *(73・74)*、ＳＫ９ *(75)*、ＳＫ14 *(79～88)*、ＳＫ15 *(89～93)*、ＳＫ17 *(116)*、東Ⅱ地区のＳＫ23、ＳＫ25 *(94)*、ＳＫ27 *(95)*、ＳＫ30 *(96)* などの土坑や、東Ｉ地区ＳＤ３ *(125～127)*、ＳＤ５ *(148～150)*、東Ⅱ地区のＳＤ10 *(152)* などの溝がある。

土坑出土の土器ではＳＫ８、ＳＫ14、ＳＫ15出土の土器が、一括資料と認められる出土状況を有する。この他、東地区では前期に属すると考えられる土坑がみられるが、出土した土器は図化できなかった。

ＳＤ３はＳＸ４台状部上面で検出された溝であるが、この時期の遺物のみが出土している。東地区の確認調査時のＩ－12・13溝２から*204～209・219*が出土しているが、この溝はＳＤ３を南に延長した位置に存在した浅い溝である。ＳＤ３と同一のものの可能性がある。ＳＤ５は流路Ｈ１に並行するように西の肩部を北西から南東に走る溝或いは流路で、前期の土器のみが出土しているが、Ｈ１溝との切り合いのため出土状況は不明確である。

この他、東地区からは、ＪＴ溝 *(153～157)* から出土しており、この遺構は東Ｉ地区の北東部、ＳＸ３上に設定したトレンチ内で検出された溝で、ＳＫ14・15が検出された付近である。ＳＸ３西溝出土の*120*も前期のものである。また、東Ｉ地区ＳＸ６西溝からも中期の土器に混ざって*147*が出土している。東地区ＳＸ10西溝出土の*123*はＳＫ30に近接して出土している。*163*は東Ⅱ地区包含層出土のミニチュア土器である。

確実に前期に属する遺構は以上の東地区に限られている。南Ⅰ地区のＹ５溝はＹ３溝から分流後消滅する小規模の溝であるが、*212*・*217*・*218*・*220*が出土しており、比較的一括性が認められる。本流のＹ３溝からは*221*が出土しているが、弥生時代中期以降の土器も出土している。

北Ⅰ地区Ｙ18′溝からは*203*・*213*が出土しているが、弥生時代中期の土器も出土している。この北Ⅰ地区の確認調査時にはＦＧ15・16溝底の砂層上面から*216*が出土している。また、北Ⅱ地区Ｙ18溝からは*214*・*215*が出土している。

中央Ⅱ－２地区、同Ⅲ－２地区や中央地区の確認調査時に同じＹ18溝の続きと思われる位置のＧ－11トレンチ溝から*39*～*43*・*211*が出土しているが、このＹ18溝からは古墳時代後期の須恵器も出土している。

中央Ⅵ地区Ｙ２溝出土の*158*～*162*は、弥生時代中期の土器とともに出土している。

*210*は南Ⅰ地区Ｙ１溝、堰の杭列第２群から弥生時代中期の土器とともに出土している。

（２）概要

弥生時代前期の土器は調査範囲の全域にわたって出土しており、約70点が図化できた。胎土には２～５㎜の砂粒を含むものが多く、*43*が黒い砂粒を含んで褐色を呈している以外は特色を抽出することができなかった。器種には広口壺形土器（以下、壺と記述する。他器種も同じ）、甕形土器（甕）、鉢形土器（鉢）、蓋形土器（蓋）そしてミニチュア土器がある。高杯形土器はみられない。

壺

壺では、段第１種の壺（*79*）がＳＫ14から出土しており、削出突帯をもつ壺（*80*・*81*）や、逆Ｌ字口縁の甕（*85*・*86*）と共伴している。*79*は口頸部境に低い段をもつが、ヘラ描き沈線を施した後、頸部側を縦方向のハケによって作り出している。短く外反する口縁部へ続き、口縁端部は丸くおさめる。口縁部は横方向のナデによって仕上げるが、頸部付近の内面には横方向のヘラミガキが残る。

確認調査Ⅰ－12・13溝２出土の*205*は頸部に段をもち、その３㎝上方には１条の沈線を施す。外面は縦方向のハケで仕上げるが、段の上下に分けて施されており、沈線はハケの後に施している。口縁端部は丸く収める。同一遺構からは、貼付突帯をもつ*204*も出土している。

削出突帯第１種のものは、ＳＫ14出土の*80*がある。*80*は頸部に幅約1.5㎝の突帯をもち、内面は横方向のヘラミガキで仕上げる。

削出突帯第２種のものは、ＳＫ15出土の*89*に認められる。*89*では頸部の削出突帯上に２条、肩部の削出突帯上に４条のヘラ描き沈線が施されている。削出突帯自体も沈線を引いた後に作り出している。

ＳＫ14出土の*81*も肩部に沈線を引いた後、削出突帯を作り出しており、突帯上には８条のヘラ描き沈線が残る。

ＳＫ25出土*94*の頸部にも上下でヘラミガキが止まる痕跡が残り、削出突帯状に盛り上がっている。口縁部が大きく外反し、肩の張らない器形である。外面は縦方向のヘラミガキ、口縁部は内外面ともナデ、肩部内面は縦方向の強い指によるナデを残す。肩部と底部外面に黒斑がみられる。

確認調査Ⅰ－12・13溝２出土の*206*の頸部には帯状に横方向のナデを施しており、突帯あるいは段の意識がみられる。*206*の外面には縦方向のハケが残るが、口頸部境を帯状に横方向のナデによってハケを消している。内面はナデで仕上げている。口縁端部には面をもつ。同様の調整をもつものに*39*がある。

*207*では肩部に縦方向のヘラミガキを施し、頸部に横方向のナデ、その上部に縦方向のナデを施す。口縁部の調整は不明である。あまり肩の張らないプロポーションで、口縁端部が屈曲する。

段、突帯がみられず、沈線を巡らせるものには、Ｙ18′溝出土の*203*、ＪＴ溝出土の*153*、ＳＫ８出土の*73*などがある。ＳＫ30出土の*96*は風化が著しいが、沈線をもつものかもしれない。

*203*の頸部には３条のヘラ描き沈線が施され、口縁部の中程に小円孔をもつ。蓋との紐綴じのために開けられたものであろう。口縁端部には面をもつ。口縁部外面にヘラミガキが残り、他は横方向のナデによって仕上げる。

*153*は頸部に９条のヘラ描き沈線を施した、なで肩の細いプロポーションをもつもので、外面には煤が付着している。肩部にはハケ目を残しながらヘラミガキを施し、ナデによって仕上げる。口縁部から頸部内面は横方向のナデによって仕上げる。同様のプロポーションをもつものに*73*があり、頸部に４条の沈線を巡らせる。

*96*は大きく張った肩部にヘラ描き沈線を巡らせるが、器表面が剥離しているため、詳細は不明である。削出突帯をもつものかもしれない。黒斑がみられる。

貼付突帯をもつものには　ＳＤ10出土の*152*、Ｉ－12・13溝２出土の*204*がある。

*152*は頸部に６条の刻目突帯、胴部最大径位に２条の刻目突帯とその間に５条の沈線を巡らせる。口縁端部は面をもつ。風化が著しいが、肩部にはハケの後、横方向のヘラミガキを施し、内面の粘土の継ぎ目には指頭圧痕が残る。

*204*は頸部に４条、胴部最大径上部に１条の刻目突帯を巡らせる。肩部や底部外面にはヘラミガキ、頸部には横方向のナデがみられる。

底部では*75*・*121*のように底面がドーナツ状の上げ底で外面を縦方向のハケで仕上げるもの、*90*のように底面がドーナツ状の上げ底で体部中央外面を横方向のヘラミガキで仕上げるもの、*74*のように外面に斜め方向のヘラミガキを施したもの、*154*のように外面の底部周辺は縦方向のハケ、体部には横方向のハケ、体部下半内面には横方向のヘラミガキ、上半には斜め方向のヘラミガキで仕上げるものなどがある。*154*の内面は黒化している。

甕

甕では、倒鐘形の体部に如意形口縁をもつものがほとんどであり、口縁端部に刻目を有するものが多い。*43*の口縁端部は四角く面をもち、刻目は下端部に刻まれる。この土器は弥生時代前期土器中、唯一の角閃石と思われる黒色砂粒を含んだ胎土をもつ。甕のほとんどが体部外面の調整をハケで終えているが、*155*・*212*のようにナデで仕上げるものもある。*155*は２条の沈線を巡らせ、口縁端部は丸く尖り気味である。

逆Ｌ字状口縁をもつものは、ＳＫ14 *(85・86)*、ＳＤ３ *(127)*、ＪＴ溝 *(157)* から出土している。これらの遺構からは如意形口縁をもつ甕・鉢も出土している。

85・*86*は口縁端部外側に粘土を貼り付け、玉縁状に肥厚させたもので、ナデによって仕上げている。*85*の口縁端部には指頭圧痕による刻目を施し、体部は無文である。*86*は口縁部直下に３条のヘラ描き沈線を巡らせる。外面はナデによって仕上げている。外面に煤が付着する。

*157*も尖り気味の玉縁状に肥厚させた口縁端部をもつもので、体部は無文である。口縁部外面は横方向のナデによって仕上げ、体部外面は縦方向のハケによって仕上げている。内面は上方向のナデが残る。外面には煤が付着している。

*127*はＳＤ３出土として取り扱っているが、出土状況図からみると、別の遺構（土坑か）に伴うものかもしれない。口縁端部外側に粘土を大きく突出して貼り付けたもので、上側に面を作っている。口縁

部上面に３条のヘラ描き沈線を施す。口縁部直下には８条の沈線がみられるが、詳細に観察すると一部に櫛状工具を用いた状況がみられる。この工具は弥生時代中期の土器にみられるものと比べると、幅が一定しておらず、一本一本が太い。５本単位程度の工具であろう。内外面ともハケの後、ナデによって仕上げており、口縁端部は内側にもわずかに突出する。底部には焼成後の穿孔がみられる。

口縁直下に沈線を巡らせるものでは、沈線の数が２～４条のものが多い。甕では帯状沈線をもつものはみられないが、鉢 *(162)* では１点みられる。

沈線には*159*・*209*・*213*のように非常に幅の広いものがある。*159*は大型の甕であろう。５条の沈線を巡らせ、内外面を横方向のハケで調整し、口縁部は横方向のナデで仕上げる。外面には煤が付着している。*213*は沈線間の間隔も広くなる。

８条のヘラ描き沈線は如意形口縁の*217*に見られ、12条の*160*とともに沈線多条化の傾向がみられるものである。*160*は口縁部の屈曲が強く、端部に細かい刻目をもつ。屈曲の強いものには、他に*82*・*156*があるが、沈線はそれぞれ５条、４条である。

沈線をもたないものには、ＳＫ17出土の*116*、Ｙ18溝出土の*40*、Ｙ2溝出土の*161*、Ｉ－12・13溝２出土の*208*、南Ｉ地区出土の*210*がある。沈線をもたないものは口縁部の屈曲が比較的緩やかである。*116*は大型のものである。*161*外面には縦方向のハケが残る。*210*の外面には縦方向のハケが残り、上方は粗い布ナデで仕上げる。

如意形口縁部直下に貼付突帯をもつものには、ＳＤ５出土の*148*・*149*がある。突帯上には刻目が施される。*149*ではやや屈曲した口縁部からかなり下った位置に貼付突帯が巡る。

ＳＸ10西溝出土の*123*は同時期のＳＫ30に近接して出土している。*123*には３条のヘラ描き沈線の下にヘラ描き複線山形文が施されている。

蓋

蓋は笠形のものが少量出土している。

ＳＫ15出土の蓋 *(93)* では、煮沸に伴う煤痕跡が口縁部内面に約３㎝幅で帯状に観察できることから、煮炊きに用いた甕に伴う蓋であることがわかる。摘み部と天井部境には指オサエが等間隔に残存し、一旦屈曲して大きく開く笠部は、内外面を粗いヘラミガキで仕上げている。天井部外面に黒斑がみられる。

他に南Ｉ地区から*220*・*221*が出土しているが、口縁端部を欠損する。残存部ではナデによって仕上げている。*220*は大型のものである。

ＳＸ３西溝出土の*120*も前期の蓋であろう。砂粒を多く含み、摘みの端部は面取りを施している。

鉢

鉢が少量出土しており、大型のもの、小型のものがある。

ＳＫ14出土の*84*は大型のものである。口縁部直下に２条の沈線を巡らせ、屈曲した口縁上面は横方向のハケで仕上げる。口縁端部は四角く面をもつ。体部外面はハケ、内面はナデによって仕上げており、口縁部外面は横方向のナデで仕上げる。

ＳＤ３から出土した*125*は小型の鉢で、口径13.4㎝、器高8.2㎝を測る。如意形口縁をもつもので、底部外面にヘラミガキを施す。外面に黒斑がみられる。

中央Ⅵ地区Ｙ２溝出土の*162*は椀状の形態をもつもので、口縁端部直下から７条、３条、７条の帯状沈線文をもつ。沈線帯間には竹管刺突文を施すが、下段のものは周の1/4の範囲に施され、上段のものも全周は回らない。底部には焼成後の穿孔が途中まで穿たれている。底部外面には縦方向のハケの後、

横方向のヘラミガキ、内面上半は斜め横方向にヘラミガキが施される。

Ｙ18溝出土の*214・215*は大型の鉢であろう。如意形口縁の直下に沈線を１条巡らせ、把手を貼り付けている。外面のハケは沈線以下に残り、口縁部内外面は横方向のナデで仕上げる。この２点は砂粒を多く含む胎土などから弥生時代前期としているが、同じ遺構から出土した他の遺物からみると、古式土師器かもしれない。

確認調査Ｉ－12・13溝２出土の*219*は直立する口縁部下に把手を貼り付け、その上に小孔を穿つものである。口縁端部までハケ調整を施す。

Ｙ５溝出土の*218*は大きく開いた口縁部をもつもので、口縁端部には面をもつ。外面は縦方向のハケで仕上げ、沈線を１条巡らせる。内面は斜め方向の粗いハケの後、口縁部は横方向のナデで仕上げる。

ミニチュア土器

ミニチュア土器 *(163)* は、あまり張らない肩部から短く外反する口縁部に続く。全面にナデ調整が施されている。広口壺を模したものであろう。高さ約10.2㎝、底径約4.5㎝を測る。東地区の包含層から出土している。 (別府)

弥生中期土器（図版46～48・50～54・56・61～66）

弥生前期に続く中期はここでは櫛描き文出現以降とし、この時期の土器も調査範囲のほぼ全域にわたって出土しており、その量は他の時期を凌ぎ多くを占めている。特に中期後半の土器は掲載分でも約150点にのぼり完形品も多く、同時期の良好な資料として注目に値する。但し残念ながら、調査以降長い年月を経て調査詳細資料等の散逸もあり、出土遺構・層位などの特定が難しく一括資料として捉えられるものが限られ、細かい時期の様相を編年的に捉えることは困難な状況である。

東Ｉ・Ⅱ地区の方形周溝墓出土土器については前期土器との混じりはあるもののこの時期の多くの土器が出土しており、それぞれの周溝墓ごとにほぼ一括の単位で捉えることができる。また、調査区を流れる多くの溝からもかなりの量の土器が出土しており、南北に流れるＹ１溝と南東の方形周溝墓群付近からは多少まとまった出土がある。

溝出土の土器については中期と比定できるものが多数確認できるが、流れ込み等による混じりが大きく一括遺物として捉えることができない。ただ、各土器についてはこの地域・この時期の様相を示す良好な資料である。詳細は遺物観察表に示すとおりであるが、以下では大まかな時期の枠の中での土器様相を述べてみたい。

（１）弥生時代中期前半古相（中期前半　様相２）

旧来畿内第Ⅱ様式と呼称されていた時期を中心し、ヘラ描き沈線文に変わって櫛描き文による加飾が盛行する時期である。この時期の土器を確認できるのは、東地区ＳＸ５のほか、中央地区のＹ１溝周辺、南地区のＹ１溝・Ｙ３溝等である。これらを器種ごとに概観していくことにする。

まず広口壺では東地区ＳＸ５出土の*111・112*、中央地区出土の*44・227・230・232*、南地区Y1溝出土の*62・63・226・228*、Ｙ３溝出土の*222・225*、出土地区不明の*223*がある。

体部の張りはいずれも大きくはなく長い口頸部へとなだらかに続いて大きく開く。特に*223*では長く伸びた口縁部径が大きく開いて体部径を凌駕しており、*230*も長大化した頸部を持つ大型品で、かなり大きく開く口縁部が予測される広口長頸壺である。口縁端部は肥厚・拡張され、下方に引き出されるものや *(111・112)*、上方へ引き上げられるものもある *(228)*。*225・226*では肥厚した口縁端部の下端を

指頭による押さえで波状に仕上げたもので、この時期に特有のものである。また*62*・*222*では口縁部下端にヘラ状工具による刻み目を施す。櫛描きによる加飾は頸部から体部上半にかけて連続的に施され、口縁部直下まで及ぶものもある *(63)*。直線文・波状文がそれぞれ連続して使われることが多い。口縁内面への施文はまれで、*222*では内面に扇形文を施す。*223*ではほぼ全形を見ることができ、長く伸びて大きく開く口縁端部には櫛描き波状文を、頸部～体部上半にかけて櫛描き直線文を12帯、その下に３帯の波状文、さらにその下に直線文をめぐらせる加飾度の高いものである。*232*では直線文帯上に弧状文を配した擬流水文が施される。

*63*では口縁直下まで施された直線文間に横方向にヘラミガキが加えられる河内地方に特徴的な技法を見せている。胎土には金雲母片を含んでおり搬入土器と考えられる。

*229*では屈曲して立ち上がる口頸部下端に指頭圧痕文突帯が加えられており、若干新しい様相を示すものかと思われる。頸部には幅の広い細かい波状文が２帯と直線文が１帯施されている。

*44*は短く外反する口縁端部が肥厚され、断面が三角形状を呈する太頸の広口壺になるもので斜めの口縁端面には櫛描き波状文、頸部には直線文が施される。西摂特有の形態とされているもので、次期の太頸広口壺につながっていくものと考えられる。

無頸壺では中央地区から*45*・*235*が出土しており、内傾する口縁部から肩部にかけて櫛描き直線文が何帯も重ねて施される。*45*は小型品で最大径部まで７帯、*235*では８帯と最下端に波状文が施され、口縁直下に小円孔が穿たれた大型品である。

甕ではこの時期に比定できるものは少ないが、中央地区出土の*236*、南地区Ｙ１溝杭列第２群出土の*64*は如意形口縁を持ち、胴の張りは強くなく、この時期に比定した。*236*は外面と口縁内面に粗いハケ目を持ついわゆる「大和形甕」である。中央地区出土の*164*は屈曲する口縁部を持つが、体部の張りが小さく瀬戸内系の甕であろうかと思われる。

鉢では南地区Ｙ１溝杭列第２群出土の*65*が内彎気味に直口する口縁上端に面を持ち、外面口縁直下に櫛描き文が施される。

（２）弥生時代中期前半新相（中期前半　様相３）

旧来畿内第Ⅲ様式の前半期に相当する時期で、凹線文出現以前の時期で櫛描き文を中心に浮文など多種にわたる加飾が施される時期である。この時期の土器の出土を確認できるのは、中央地区、南Ｉ地区のＹ１溝・南東方形周溝墓周辺である。

広口壺では頸部に突帯をめぐらせるものが少なく、またむしろここでは次の時期になっても口縁部に凹線文を施す例が極めて少ないことからこの時期に比定することに消極的にならざるを得ないのであるが、ひとまず中央地区出土の*238*、南Ｉ地区出土の*237*・*239*～*246*をとりあげた。

これらの肥厚・拡張された口縁端部には刻み目や櫛描き波状文、斜行文が施される。*242*では斜行文を交差させた上に円形浮文が貼り付けられている。

237～*244*は大きく開く口縁部を持ち、*237*では頸部に指頭圧痕文突帯がめぐらされる。*240*・*241*は太頸の短い口頸部である。*246*も太頸で短い口頸部であるが、頸部に指頭圧痕文突帯がめぐる。端部は丸く肥厚され小円孔が穿たれる。櫛描きによる施文はみられず、周辺でもあまり見られない形態である。

*245*は大型品で、大きく開く口縁の端部は下方に拡張され上下端を刻まれる。頸部下端にはここでは唯一の断面三角形突帯が４条めぐる。体部上半に櫛描き直線文６帯と文様帯最下段に細かい間隔で櫛状工具による刺突列点文が施される。体部ヘラミガキは底部には至っていない。

中央地区出土の*165*は縦長の体部で張りは小さく、口縁部を欠くが「摂津型水差し」と呼ばれるものと思われる。

甕では中期を通して出土例が少ないうえに次時期と明確に区別できる要素に乏しいが、くの字形口縁で端部に上方への引き上げがないもので見ると中型・大型のものになる。*284*・*285*・*288*（南Ⅰ地区出土）*287*（南Ⅱ地区出土）・*286*（Ｙ１溝出土）・*289*で、いずれもハケ目により調整されており、*289*の下半部にはヘラミガキが施されている。体部最大径はやや上よりで倒卵形の器形を呈する。

（３）弥生時代中期後半（中期後半　様相１・２）

旧来畿内第Ⅲ様式新段階～第Ⅳ様式に相当する時期で、基本的に凹線文出現以降の時期である。当遺跡ではＹ１溝・東地区の方形周溝墓群をはじめ調査区ほぼ全域において最も多くの土器が確認できる時期である。時期幅としては広く取ったが、ここでは明確な区分のできる要素に乏しく、あえて古相・新相を分離せず個別に評することにした。

広口壺では東地区出土の*97*・*98*（ＳＸ１）、*113*～*115*（ＳＸ３）、*128*・*129*（ＳＸ４）、*46*～*49*・*138*～*142*（ＳＸ６）、北地区出土の*253*・*254*（Ｙ18溝）・*266*（Ｙ17溝）、中央地区出土の*166*・*249*・*260*、南Ⅰ地区出土の*247*・*250*・*255*～*259*・*262*・*265*がある。

この時期には口縁端部の拡張が大きくなり、大きく垂下するものも現れる（*253*～*255*・*259*・*260*）。特に*253*～*255*は刻み目や円形浮文などで多様に加飾される。また凹線文が施されるものでも円形浮文や棒状浮文が加えられるもの（*49*・*259*・*260*）、小円孔が穿たれるもの（*166*）もある。口縁内面には扇形文が施されるものも多く、*256*・*260*では２帯重ねて施文されている。体部は算盤玉形に大きく張り出し、櫛描き文は直線文と波状文が交互に施されたり円形浮文が加えられるなど多様さが見られる。*265*では把手の痕跡が見られる。

ＳＸ６南溝出土の*47*・*48*・*138*は小型品で器形・成形技法・加飾手法などが極めて近似しており、底部に近い体部下半に焼成後穿孔が施されている。いずれも櫛描き文が頸部から始まり、太頸広口壺の加飾法に準じている。外面体部下半のヘラケズリ後のミガキ仕上げが底部近くには及んでおらず、特徴的な一群である。*142*は長頸で加飾はなされていない。これらはむしろ古相を示しているのかもしれないが、同じ溝出土の*49*の体部の張りも大きく、一応ここに所属するとしておきたい。

*266*は小型品であるが櫛描き文・円形浮文による加飾がなされ、体部も算盤玉形を呈していて新相の方に含まれると思われる。色調はやや暗く褐灰色を呈しており、在地の胎土と異なるようである。外面には二次焼成を受け、器壁の剥離も見られる。

*249*は大型受口壺の口縁部で、口縁外面には３条の工具により斜格子文が施される。受け口部の屈曲が角張っており、古相を示す。胎土に金雲母を少量含んでいる。

また*250*は垂下させた口縁部と頸部に廉状文を施し、形態は新相を示す。角閃石・金雲母を含む胎土でいわゆる「生駒西麓型土器」である。

東地区出土の*70*（ＳＫ７）・*99*（ＳＸ１）、南Ⅰ地区出土の*248*・*261*は太頸広口壺で、張り出した体部の重心は下寄りになり、頸部は緩やかに体部に続くが、文様構成等は櫛描き文が主で、基本的に広口壺のそれと変わりはない。*70*と*99*では口縁端面に波状文が施され、凹線文が施されるのは*261*のみである。口縁内面にはそれぞれ櫛状工具により*70*では簾状文状、*261*では扇形文状の刺突文が施される。東Ⅰ地区ＳＸ２出土の*106*は口縁部を欠くが、体部の重心は下方にあり太頸広口壺であろう。

大型細頸壺は東地区の方形周溝墓出土の*107*（ＳＸ２）・*143*（ＳＸ６）のみで、いずれも内彎気味に

立ち上がり、口縁部がすぼまる口頸部に凹線文を施し、*143*では中位に櫛描き直線文が加えられている。*107*では頸部下端に突帯様に画した部分に刺突文をめぐらしており、*143*では細かい波状文をめぐらせている。算盤玉型に張り出した体部上半にも櫛描き直線文・波状文により加飾がなされている畿内系の細頸壺である。

東地区出土の*131*（ＳＸ４）・*144*（ＳＸ６）と口頸部が欠けたＹ１溝出土の*267*は細頸壺である。

131・*144*は体部が算盤玉形に張り、*144*の口頸部は若干内彎気味に立ち上がる。*131*には３帯の直線文とそのうち上下の２帯に円形浮文が貼り付けられる。*144*の頸部下半には直線文、肩部には直線文を挟んで２帯の簾状文、その下に扇形文が施される。

*267*は張り出した体部の重心が下方に偏り、最大径部分には焼成後穿孔が穿たれている。疎な直線文間には横方向にヘラミガキが施され、*63*と同様に河内地方に特徴的な技法によるものである。

東地区出土の短頸壺*130*（ＳＸ４）では体部から緩やかに筒状に立ち上がる口頸部が続く。

水差し形土器はいわゆる「畿内型水差し」と呼ばれるもので、東地区出土の*71*（ＳＫ７）・*101*（ＳＸ１）・*132*（ＳＸ４）、中央地区出土の*268*がある。筒状に立ち上がる口縁部には上端から２～４条の凹線文が施され、体部は算盤玉形に張り、新相を示すものである。

東地区出土の*102*（ＳＸ1）、北地区出土の*270*・*297*、南Ⅰ地区出土の*269*・*271*・*279*、南Ⅱ地区出土の*278*、*274*・*277*は無頸壺である。

269～*271*は内傾する口縁の端部を外側に折り返して段状に形成している。*269*は外面に櫛描き直線文と波状文が施され、*270*には２個一対の小円孔が見られる。*102*・*274*は内彎して立ち上がる体部に内傾した口縁端部を付加したもので、これらの口縁付近にも小円孔が穿たれている。いずれも上端から凹線文により加飾されるが、*102*では脚部に続く基部に断面三角形突帯がめぐり、凹線文の上に刻み目や円形浮文も付加されることからこの時期でも古相に含まれるものと考えられる。

277～*279*はいわゆる円孔脚台付無頸壺で、口縁部は内彎して窄まり、脚部も内傾して窄まる。これらは一体成形により、鉢底部には粘土板がはめ込まれ、それに接する大きな円孔を四方に穿つものである。上下端に凹線文が施された新相を示すものである。*297*（Ｙ19東溝）はくの字形に外反する口縁を持つが、頸部に櫛描き波状文をめぐらせた無頸壺である。

南Ⅰ地区出土の*275*（Ｙ３溝）は器台の上に無頸壺をのせる複合土器の接合部分である。器台の口縁部にあたる部分は下外方に突出し、端面は凹線文と棒状浮文で加飾され、外面及び内面にも丁寧にヘラミガキが施された精製土器である。

鉢はきわめて少数である。中央地区出土の*50*は肩の張る体部からくの字形に屈曲する口縁部を持つ鉢で、口縁端部下端に刻み目がめぐる。南Ⅰ地区出土の*273*は口縁端部を内側に粘土を付加して肥厚したもの、*272*では口縁外側に粘土を付加して段状口縁を形成し凹線文を施したものである。

高杯も少数で、東地区出土の*110*（ＳＸ１）、中央地区出土の*281*・*282*、南Ⅰ地区出土の*280*がある。*280*・*110*は水平口縁を持ち杯部内端に突帯が貼り付けられるもので、*280*は端部をさほど垂下せず内面の突帯の断面は三角形、*110*は大きく垂下しその上端に凹線文を施しており、内面の突帯の断面は矩形を呈している。前者は古相、後者は新相を示すものと思われる。*282*では脚端部近くに小円孔がほぼ等間隔に穿たれる。南Ⅱ地区出土の*276*は高杯としたが、大型受口壺の口縁とも考えられ、屈曲して立ち上がる口縁端部外面に凹線文を６条めぐらせたものである。

甕ではくの字形口縁の端部を上方へ引き上げるものをこの時期に比定した。東地区出土の*103*・*105*

（ＳＸ１）、*108・109*（ＳＸ２）、*117*（ＳＸ３）、*133*（ＳＸ４）、北地区出土の*291・293*、中央地区出土の*294*、南Ⅰ地区出土の*67*（杭列第２群）、*290・292*（Ｙ３溝）、*295・296*（方形周溝墓周辺）であるが、古相と新相に分けるのは極めて難しい。体部は引き続き倒卵形を呈する。前時期に比して小型品が多くなるが（*290～294*）、大型品（*105・117*）も残る。体部はハケ目仕上げで*105*では下半にヘラケズリ、*117*ではヘラミガキ、*133*ではヘラミガキが施された上からさらにヘラケズリが施されている。*296*では肥厚・拡張された口縁端部に凹線文が２条、体部中位には刺突列点文が施されており、中部瀬戸内系の特徴を示す。また*295*では成形時のタタキ目を残しており、内面下半にヘラケズリが見える。

（友久）

弥生後期～古墳時代初頭の土器（図版48・57・58・66・67）

この時期の土器が全出土土器に占める割合はさほど大きくはなく、出土地点にもばらつきが見られる。最もまとまった形では東Ⅰ・Ⅱ地区のＨ１溝で壺・甕・高杯（*168～184*）が出土しており、後期でも終末期の庄内期に該当するものである。その他では北地区Ｙ18溝（*307・311・325・326*）・Ｙ19溝（*301・303・310・312・317・324*）、東地区ＳＫ11（*77・78*）・ＳＫ20（*189・190*）・ＳＫ22（*185*）・*186～188・191～193*、南地区Ｙ３溝（*305・306・309・313～315・318・321・323*）・Ｙ４溝（*322・327*）・*299*、中央地区（*300・302・308*）、*298・299・304・316・319・320・328*である。

（１）弥生時代後期

*301*は直立する頸部を持つ大型品で、大きく胴の張る球形の体部を持つ広口壺である。*302*は外傾する短い口縁部を持つ広口壺で大型品である。*299*は口縁が外反気味に開く細頸壺で、ヘラミガキによって仕上げられる精製品である。*300*のようなやや扁平な体部に続く。

*167・304*はいずれも小型の鉢であるが、*167*の口縁部はわずかに屈曲して開く。*303*は大型品でヘラミガキにより丁寧に仕上げられ、１箇所に注ぎ口を形成していたようである。*306*は砲弾形の尖底で外面にタタキメが見られ、中央に焼成前円孔を穿つ。

高杯では脚部のみの残存であるが、*185・307*にヘソ状充填技法による中心支柱の抜き取り痕が見られる。*185*は中空で裾は広がり僅かに外反し端部は丸くなっており、内面には絞り目が見られる。杯部との接合部下で欠損している。砂粒多く含む。*308*では円盤充填の痕が見られるが、裾部の開きは大きくなく、小円孔が並ぶ。

甕は、外面にタタキメを施すものであるが、*78・309・312・313*はしっかりした平底を持ち、*310*ではやや不安定に、*316*ではむしろ尖底状をなす。*315*は近江地方に特徴的な受け口状口縁で、刺突列点文・櫛描き文で飾られる。体部下半外面にはタタキメが残っている。

（２）弥生時代終末期～古墳時代初頭（庄内～布留期）

東Ⅰ・Ⅱ地区のＨ１溝では壺・甕・高杯（*168～184*）が出土している。

*168*は壺で内湾する体部から外反し端部を上方につまみ出して端面を持つ口縁部となる。端部先端を僅かに欠いている。端面には細かい波状文が施され、内面にも波状文で装飾している。外面はミガキで調整されている。灰黄を呈し砂粒を多く含んでいる。

*169*は完形の細頸壺である。最大腹径16.2㎝が体部中央より下にあり下膨れである。器壁もやや厚めである。ユビ成形からハケ整形しナデ仕上げしている。側部に黒斑がある。口縁部は外傾し端部は内側に向けて尖っている。内外面ともにヘラミガキが施されている。頸部には突帯が巡らされている。浅黄

から灰黄色を呈している。

*170*は口縁部を欠く壺で、丸底で球形の体部である。プロポーションから直口壺になろうと思われる。胎土は精良で一見すると精製土器に見えるが、ユビ成形ののちナデ仕上げする表面は平滑にしているものの粗いつくりである。粘土紐の痕跡が明らかである。底部に黒斑が見られる。

*171*は完形に近い小形丸底壺である。扁平な球形の体部に僅かに内湾する口縁部が付き、端部は尖っている。内外面ともにハケ整形ののちナデで仕上げている。色調は浅黄から明黄褐で、雲母・長石などの砂粒を含んでいる。

*172*は甕口縁部で、内面の稜線が明確でヘラケズリを施している。斜め方向にケズリ、横方向に強くケズることによって頸部に鋭い稜線を形成している。口縁部は外傾し、端部は上方につまみ出している。端面を作っており凹線状の窪みを有している。外面は細かいハケ整形している。口縁部は外傾しているものの、内面は内湾ぎみで新しい要素かと思われる。胎土には酸化粒などのクサリ礫を含んでいる。播磨からの搬入品と思われる。

*173*も甕で底部を欠いているが丸底であろうと思われる。球形の体部に外反ぎみに延びる口縁部が付く。内面は頸部までヘラケズリがなされているがユビ成形も使われている。稜線は*172*ほどシャープではないが鈍くはない。タタキは平行から右上がりの細かいものである。端部は方形に近く仕上げている。体部下半は細かいハケ整形が見られる。薄く仕上げられ、やはり播磨からの搬入品と思われる。にぶい黄橙から灰黄色で煤が付着している。

*174*は尖り底の甕で倒卵形となり内面はヘラケズリで薄くしている。縦方向から斜め方向に施工し頸部下では横方向にケズリ稜線を作っている。ナデもなされており、頸部はシャープではない。外面は丁寧なハケ整形が行われ痕跡を消しているが、左上がりのやや粗いタタキが確認できる。口縁部は僅かに内湾し端面となる。

*175*は球形の体部に外傾する口縁部が付く甕である。口縁部はやや長くヨコナデによって僅かに段になっている。内面はヘラケズリで成形されている。外面はハケ整形である。頸部の稜線は鋭くはない。内面には有機質が付着している。

*176*は倒卵形で尖り底の甕である。内面はヘラケズリで薄く作っている。外面は平行のタタキをナデでほとんど消しており、下半はハケ整形している。口縁部は内湾ぎみで端部は丸くなり、内面の端部下がやや窪んでいる。内面の頸部稜線は甘い。外面下半には煤が付着し内面には有機質が見られる。浅黄から灰黄色を呈しており、砂粒を含む。

*177*は口縁部と体部上半が残存する甕で、右上がりの細かいタタキがなされている。タタキ成形ののちに口縁部を曲げて作っており、口縁部外面にタタキが認められる。内面はユビ成形しナデで仕上げている。比較的薄く作られている口縁部は外反し端面を持ち凹線状の窪みが残る。口縁部内面は赤褐になっており、化粧土が塗布されていた可能性がある。

*178*は口径が最大腹径より小さい甕で、下膨れの丸底となる。粗いタタキ成形ののち強いナデで整形している。タタキ成形ののち口縁部を折り曲げて作っている。端部周辺と内面のみヨコナデである。内面はユビ成形からナデ仕上げで粘土紐が観察される。

*179*は甕口縁部の破片である。やや粗い右上がりのタタキ成形で、内面はナデで仕上げられている。内湾する体部から外反し端部は上につまみ出している。頸部内面の稜線は明瞭ではない。丹波方面からの搬入品と思われる。

*180*は台付き甕で北近畿の影響を強く受けた土器である。ほぼ完形で、器高15.7㎝を測る。外傾する脚台で端部は尖りぎみである。甕体部は球形で口縁部は短く上方につまみ上げている。１条の凹線を端面に有している。内面はユビ成形のままに近く多少ナデ調整している。体部と脚台外面はハケ整形し平滑に仕上げている。赤く焼成されていることもあって精製品にみえるが、器壁は厚い。

*181*は中実の高杯である。脚部は短く外傾し端部は尖り気味。杯部は内湾し端部近くで外反し端部は丸い。ユビ成形ののちナデで仕上げている。チャート粒など砂粒多く含む。

*182*は高杯杯部で二重口縁状になっている。外傾し屈曲して大きく外反し端部は僅かにつまみ出している。端部は面となっており、内外面ともにヘラミガキで仕上げられている。

*183*は高杯脚部で完存している。外傾する裾部で端部は丸い。一見すると中空であるが杯部との接合は円板充填でなく、短い中実であろう。にぶい橙で砂粒含んでいる。内面上部に小さく絞り目が見られる。外面はヘラミガキがなされている。

*184*は口縁端部がさらに上方へ続く製塩土器であろうと思われる。脚台Ⅳ式のものでユビ成形によって脚台を付けている。灰黄色で小砂粒を含んでいる。脚台下面に刺突状の窪みが残っているのは特徴的である。

*186*の広口壺は直立する頸部から口縁部が大きく開くもので、垂下させた端面には凹線文と竹管文押捺円形浮文で加飾している。*187*に見るような球形の体部に続くものと思われる。外面ヘラミガキで仕上げられた精製品である。*188*は外傾する短い口縁で球形の体部を持つ。*317*は四国東部で特徴的な広口壺で、内傾する頸部から口縁部がほぼ直角に屈曲して開く。*318*～*321*は二重口縁壺で、*318*では口縁立ち上がり部に櫛描き波状文や刻み目など古い要素を持つが、*319*・*320*では擬凹線文がめぐり直立に近くなる。*321*では口縁立ち上がり部が外反する。*322*は外傾する口縁部に球形の体部を持つ壺である。

189～*193*・*323*・*324*はいわゆる小型丸底壺で、体部が浅くなる*191*もある。

高杯（*325*～*328*）は、屈曲が甘くなり、小型化する。

311・*314*の甕では口縁端部が引き上げられ、体部はほぼ球状を呈すると思われ、内面にヘラケズリが見られる。

（渡辺）

古墳時代中期～奈良・平安時代の土器　（図版47・58・68）

（１）古墳時代の須恵器

当遺跡の出土須恵器の中で最も古くさかのぼるものとして、南地区Ｓ１溝出土*351*、中央Ｖ－２地区出土の*59*・*60*、ＥＦ10出土*329*～*332*の杯蓋、*352*・*353*の壺がある。

59・*329*～*331*は天井部が平らで、約３分の２の範囲にヘラ削りが施されている。天井部と体部の境は突出し、口縁端部は段をもつ。*331*は口縁端面が水平で、段は顕著ではない。*332*の天井部は２分の１の範囲にヘラ削りが施されている。天井部縁辺は屈曲して口縁部に続く。天井部と口縁部の境の稜線は鈍い。口縁端部は外側に突出し、端面は水平で中央部がわずかに窪む。*351*～*353*は口縁部の断面が三角形状で、頸部に波状文を施す。*351*は断面セピア色を呈する。以上の須恵器は形態的特徴などから陶邑ＴＫ208～ＴＫ23型式段階のものと思われる。

Ⅱ期～Ⅲ期の須恵器としては、*194*～*196*・*333*・*334*・*336*・*337*がある。杯身*333*・*334*は口径13.4～14.0㎝と広く、立ちあがりは直上方向に高く立ち上がる。底部外面にヘラ削りを施す。*333*は口縁端面

に段をもつが、*334*は段の痕跡を残す程度である。杯身*194*～*196*は*333*・*334*より後出のもので、立ちあがりは低く内傾する。底部外面はヘラ削りが施されている。*340*は小片で、天地が判然としないが、口縁部に重ね焼き時の灰色の帯が巡るので蓋と身が逆転した杯身とみなしておく。また、蓋*336*・*337*は口径12.4㎝～16.0㎝で、口縁部は外方に開き、端面には段の痕跡を残す。天井部外面はヘラ削りが施されている。*335*・*338*・*339*は上記の須恵器より後出の一群である。杯蓋*335*は天井部の器壁厚い。天井部周縁は段状にくぼみ、口縁部に続く。口縁部は外側に開き、端部は丸く納める。杯身*338*は口径10.8㎝で、底部はヘラ切り後、軽くヘラ調整を行うが、ヘラ削りは省略する。立ちあがりは低く内傾する。*356*も小片で器種が判然としないが、口縁部の特徴から平瓶とみなしておく。*354*も瓦質で器種は判然としない。壺と見なしておくが、時期は不明である。

（２）奈良時代以降の土器

須恵器・土師器および黒色土器がある。須恵器には*341*～*343*・*382*がある。このうち*341*は杯Ｂ蓋で、天井部は笠形を呈し、頂部のみヘラ削りを行う。つまみは扁平で、口縁端部は内側に傾く。*342*は実測図版では杯として図化しているが、底部がやや斜めになる点と削りによる調整が施されている点から壺蓋になる可能性がある。*343*は口径19.6㎝、器高5.2㎝の大型杯で、口縁部端面は平坦で外側にわずかに突出する。底部外面はヘラ切りのままで調整を行っていない。*382*（写真のみ掲載；第７図）は口径14.4㎝の杯の体部片で、「常」の文字が墨書されている。文字は口縁部を下にして墨書されている。奈良から平安時代のものと思われる。

第７図　墨書土器

土師器には*344*～*346*・*383*がある。このうち、*344*は口径14.8㎝、器高3.1㎝を測る。口縁部はわずかに外反し、口縁内面に沈線を施す。底部外面は指押さえ後、ナデ調整を行う。*346*は口縁部外面を横ナデ、内面はナデ調整を施す。*345*は口径12.9㎝、器高1.4㎝の浅い皿である。底部外面は器面が剥落しているためによくわからないが、ヘラによる削り若しくはナデ調整されている可能性が高い。*383*（写真のみ掲載；第７図）は土師器皿の底部片である。外面は押さえの後、ナデ調整、内面には回転のナデ調整が行われている。「井」の文字が外面に施されている。奈良から平安時代のものと思われる。

黒色土器には*197*～*199*がある。いずれも内黒で磨きが施されている。底部には輪高台が貼り付けられており、体部はやや湾曲しながら斜め上方に立ち上がり、口縁部付近で角度を変え直上に立ち上がる。口縁部内面には沈線状の段がつく。出土場所はいずれも東Ⅱ地区Ｍ３溝である。同種の遺物片はＳＢ４からも出土しており、しかもこの溝はＳＢ４の柱穴群を切っているので、黒色土器群はこのＳＢ４に伴うものかあるいは近い時期のものと判断してよい。時期は平安前期のものと判断される。

（森内）

中世の土器・陶磁器（図版58・68）

中世に属する土器・陶磁器には、土師器皿、瓦質土器羽釜、青磁碗、土師器羽釜、無釉陶器擂鉢・盤などがある。

347～*349*はいずれも非ロクロ成形の土師器皿である。*347*は小形で平底である。体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面には強いヨコナデ調整が、体部内外面にはヨコナデ調整が施される。底部内面には仕上げナデ調整が施される。また、内面の底部と体部の界にはヘラ状工具で沈線が施される。形態・調整技法の特徴から16世紀前半代の京都系土師器皿と考えられる。*348*は体部が緩やかに斜め上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。内面～口縁部外面にかけてはヨコナデ調整を施す。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈する。*349*は体部が僅かに内彎気味に斜め上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面ともヨコナデ調整を施し、焼成は良好である。色調はにぶい黄橙色を呈する。

*350*は瓦質土器羽釜である。体部から口縁部はほぼ直立し、口縁部下に断面三角形状の短い鍔を貼り付ける。粘土紐巻き上げ成形で、外面はヨコナデ調整、内面には横及び斜め方向のハケ目調整が施される。中世前半の所産と考えられる。

*357*は青磁碗の底部である。高台は比較的幅が広く低い。底部の器壁は非常に厚い。内外面とも青磁釉を施釉し、暗オリーブ灰色に発色する。13世紀代の龍泉窯系青磁と考えられる。

*358*は土師器羽釜である。体部は直立し、口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。体部外面には縦方向の粗いハケ目調整を施し、色調はにぶい黄橙色を呈する。

359・*360*・*361*はいずれも無釉陶器擂鉢である。*359*は体部が直線的に斜め上方に延び、口縁部の１ヶ所を捻って片口を作り出す。内外面とも回転ナデ調整の後、体部内面にヘラ描きの擂目を施文する。色調は明褐色を呈する。16世紀後半代の丹波焼と考えられる。*360*は平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部内外面は回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整である。丹波焼と考えられる。*361*は体部内面に密に櫛描きの擂目を施し、底部外面には板状の工具痕が認められる。近世後半の丹波焼と考えられる。

*362*は無釉陶器盤である。平底で体部は直線的に短く斜め上方に延びる。口縁端部は若干内側に肥厚する。色調は暗褐色を呈する。備前焼で16世紀後半～17世紀前半代の時期が考えられる。

363・*364*・*365*も無釉陶器擂鉢である。*363*は体部は直線的に斜め上方に延び、口縁部は上下に拡張して、断面長方形状の縁帯を形成する。口縁部外面に凹線が２条巡る。体部内面には７条１単位の櫛描きの擂目を施文し、色調は暗褐色を呈する。備前焼Ⅴ期の製品で、16世紀代に比定される。*364*は平底で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部内面には13条１単位の櫛描きの擂目を施文する。備前焼と考えられる。*365*も*364*と同様に平底で体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部内面には６条１単位の櫛描きの擂目を施し、色調は暗赤褐色を呈する。備前焼と考えられる。（岡田）

近世の土器・陶磁器（図版59）

近世に属する土器・陶磁器には無釉陶器鉢、施釉陶器椀・秉燭、染付磁器碗・蕎麦猪口がある。

*366*は無釉陶器鉢である。平底で、体部は斜め上方に立ち上がり、中位で「く」の字状に大きく屈曲する。体部外面には灰釉が附着する。器面には長石の噴出しが認められる。信楽焼の可能性が高い。

367～*371*は施釉陶器椀である。*367*の高台は比較的幅が広く低い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち

上がり、中位で屈曲しほぼ直立する。内外面とも鉄釉施釉の後、白泥を横方向にハケ塗りする。肥前系刷毛目唐津で、17世紀後半～18世紀前半代に比定される。*368*は高台が断面長方形状で比較的高い。平底で、底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的にほぼ直立する。内外面とも鉄釉施釉の後、白濁釉を二重掛けする。肥前系唐津椀で、18世紀前半代のものであろう。*369*は高台が台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎して斜め上方に立ち上がり、中位から上はほぼ直立する。内外面とも灰釉を施釉し淡黄緑色に発色する。*370*は高台を断面台形状に比較的低く削りだす。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、高台脇はヘラ状工具で調整する。内外面とも銅緑釉を施釉し、底部内面は蛇ノ目状に釉ハギする。外面の高台脇以下は露胎である。肥前系唐津緑釉椀で、17世紀後半～18世紀前半代に比定される。

*371*は高台が比較的幅が広く低い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲し、ほぼ直立する。内外面とも透明釉施釉の後、白泥、緑釉で草花文を上絵付けする。外面の高台脇以下は露胎である。19世紀前半以降の京焼系の製品と考えられる。

*372*は施釉陶器の秉燭である。平底で脚部は短く直立する。体部は大きく内彎する。底部外面に釘穴を１ヶ所穿孔する。内外面とも鉄釉を施釉し、暗茶褐色に発色する。底部外面は露胎で糸切痕が残る。瀬戸・美濃系の製品で19世紀前半以降に比定される。

373～*380*は染付磁器碗である。*373*は高台が比較的細く高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。外面にコンニャク印判で菊花文を施文する。肥前系波佐見産のいわゆるくらわんか手碗で18世紀前半代の所産である。*374*は高台が比較的細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。外面に手描きの草花文を施文する。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代の所産である。*375*・*376*・*377*も同様のくらわんか手碗で、それぞれ外面には手描きで、*375*は草花文、*376*は丸に花弁文・草花文、*377*は草花文を描く。いずれも18世紀後半代の所産であろう。

*378*は器壁が全体に比較的薄い。高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。外面に雨降り文を施文する。肥前系で19世紀前半代の所産と考えられる。

*379*は器壁が全体に薄く、高台は比較的細く低い。体部は内湾して斜め上方に延びる。外面にやや濃い呉須で山水文・草花文を描く。肥前系の半球形碗で19世紀前半以降の製品と考えられる。

*380*は器壁が全体に薄く底部は丸底風に成形する。高台は細く高く、体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。外面に山水文・草花文を描く。瀬戸産の広東碗と考えられ、19世紀前半以降に比定される。

*381*は蕎麦猪口である。器壁は全体に薄い。平底で外周に低い高台をもつ。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面に丸文・菊花文などを施文する。肥前系で19世紀前半代に比定される。

(岡田)

２．木器（図版69～72）

1975・76・77・78・80・81年度の調査で出土した木器は、ほとんどが溝・流路から出土したものである。保管されていた木器は、出土後長く水浸けされたままで、ほとんどを1987年度にＰＥＧ含浸による保存処理をおこなっているが、そのなかには処理以前に自然乾燥し、変形したものも多く見られる。また、出土状況を示したラベルカードが失われたものも多く見られた。一部はアルコール・キシレン法で処理されている。

また、北Ⅲ地区や南Ⅰ地区で検出された井堰を構成していた杭などは図化し得なかったが、北Ⅲ地区出土と思われる一部保存されていた杭は、丸太材・ミカン割り材を用いており、先端の加工は大きく、金属器と思われる鋭い刃物によっている。

報告できた木器は出土状況がある程度判明できたものであるが、流路などからの出土のため、所属時期が確定できないものが多い。*W27*～*W34*は近世の流路であるＫ１溝から出土しており、同時期に属するものである。その他の木器は、その出土した遺構の年代から、Ｙ溝は弥生時代、Ｓ溝は須恵器が出土する時期に属するものと考えているが、詳細な時期は確定しがたい。

いくつかの木器についてはすでに報告されているが、出土遺構名等の変更があり、詳細については本報告をもって訂正されたい。

*W２*は1976年度調査で、南Ⅰ地区のＹ３溝上面から出土している。同溝からは*W10*や弥生時代中期から古墳時代前期にかけての土器が多く出土している。直柄鍬柄孔部の破片であろう。過半を失うが、上端面と左側面が残存しているものと思われ、10㎝程度の頭部幅が復元される。顕著な隆起部はみられないが、表面では柄孔周辺がわずかに厚くなる。裏面は平らである。丁寧に3.2×3.7㎝の長円形に開けられた柄孔は、60°の角度で斜めに穿たれている。

*W３*は1981年度調査、東Ⅰ地区のＦトレンチ溝内の灰色砂層から出土している。穿孔のある円形の平面形をもち、広葉樹で、コナラ属アカガシ亜属で見られる大型の広放射組織が肉眼で観察できることから、直柄鍬柄孔部の破片とした。風化・変形が著しいが、Ａ５型隆起に分類される、柄孔部周辺が円形に隆起する部位の破片であろうか。柄孔は1.8×2.3㎝の長円形である。但し、同一層からは近世の下駄*(W32)* も出土している。

W４・*W５*は1976年度調査で、北Ⅱ地区のＹ18溝から出土している。同溝からは他に*W16*・*W22*の木器や弥生時代前期から古墳時代後期の土器が出土している。*W４*は組合せ又鋤の鋤身の破片で、半分は失われている。柄装着孔部分に最大厚をもち、刃先部分は薄く作られる。平面形は長方形だが、刃先角は丸く仕上げ、肩部角もわずかに斜めに切り落とす。柄装着孔は2.5×7.8㎝の長方形で、斜めに穿たれており、先端部は１㎝程度の段を作り出す。着柄軸は現状では認められない。裏面には加工痕が顕著にみられる。

*W５*は、鋤・鍬の刃部破片である。*W４*とは異なり、刃部角は隅丸方形に仕上げる。

*W６*は1977年度調査で、北Ⅰ地区のＹ19溝の杭列中から出土している。杭に転用されたものか。同溝からは他に*W８*が杭列中から、*W11*・*W15*・*W21*が上層から、他に*W13*の木器が出土しており、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土している。枘結合法の組合せ鋤で、又鋤の可能性が高い。身の上方に着柄軸をのばし、軸頭に柄を緊縛するための紐かけの段を作り出す。裏面は平滑である。身の中央には柄の先端部を挿入する方形の穿孔が斜めに穿たれている。全体に扁平であるため、柄の先端を加工

しないと着柄が難しい。広葉樹板目材。

*W7*は1975年度確認調査で、中央Ⅶ地区と中央Ｖ－２地区のトレンチの間で出土した。北Ⅱ地区Ｙ18溝の続きと思われる位置から、弥生時代前期の土器などとともに出土しているが、同溝やその延長部からは古墳時代後期までの様々な時期の遺物が出土している。枘結合法の組合せ鋤である。身の上方に着柄軸をのばし、軸頭直下に緊縛のための紐かけの浅い段を幅1.5㎝程度窪ませている。着柄軸の後面は樋状に窪んでおり、一部縁の立ち上がりが残存する。着柄軸の基部には柄の先端部を挿入する方形の穿孔が斜めに貫通しており、前面には方形の穿孔（1.6×2.1㎝）が抜けている。穿孔先端の段は非常に浅い。鋤身の肩の平面形態は角肩で、肩の直下でわずかにくびれる。

柄部も広葉樹で、下端は片面を斜めに削り、小さな段を設けて結合に備えている。柄の残存長は95.6㎝以上あるが、変形・収縮・欠損が著しいことから更に長いものと思われる。柄の上端部にも段が作り出されており、柄の把手装着に備えている。段より上の部分は断面長方形に加工されたものであろう。広葉樹を用いた把手は過半を失うが、長さ9.15㎝の円柱棒状のものが復元でき、長方形の柄孔が貫通して穿たれている。横木を柄に枘結合した把手である。(出土状況は写真図版15左下)

*W8*は1977年度調査で、北Ⅰ地区のＹ19溝杭列中から出土している。一本鋤の未成品であろうか。自然乾燥により変形・収縮が著しいが、現状で75.6㎝の長さがある。肩は角肩である。柄部の断面は現状では長方形を呈している。広葉樹柾目材を用いている。

*W9*は南Ⅰ地区Ｙ１溝から出土している。曲柄又鍬身と考えられるが、刃部の断面も肉厚で、扁平ではなく、先端は両側面から削って断面が方形に近くなり、細く尖らせている。基部の断面も長円形で、曲柄装着のための加工が乏しい。基部先端を失うが、一旦凹部を作り出した後、広がっており、軸頭を作り出して紐かけに備えている（奈良国立文化財研究所　1992)。針葉樹の板目材を加工しており、アカガシ亜属を用いる通有の農具とは異なる。基部や裏面が炭化するまで焼け焦げているが、焼成後に加工を行っている。加工痕は鋭利な利器によっている。

*W10*は1978年度調査で、南Ⅰ地区のＹ３溝から出土している。平面形が平行四辺形を呈した穂摘具(木庖丁）で、広葉樹板目材を用いている。全長のやや偏った位置の背近くに、横長の長方形の紐孔が２ヶ所やや位置をずらして存在し、紐孔は両面から穿孔されているが、一部の石庖丁に見られるような擦切技法や回転穿孔によるものではない。刃は紐孔を中心とした位置に付けられ、片刃である。また、その背部は面取りを行っている。紐孔周辺の紐擦れは見られず、刃部の擦痕も確認できない。

*W11*は1977年度調査の際、北Ⅰ地区のＹ19西溝上層部から出土した竪杵である。一方の搗き部から握部付近までが残存している。握部に向かって徐々に細くなっており、握部との境界は認められない。節帯のないものであろう。搗き部の先端は丸くなる。

*W12*は1981年度調査で、Ｙ１溝につながると考えられる中央Ⅶ地区溝内の暗褐色砂質土・暗褐色粘質土から出土した。目の詰まった針葉樹の柾目に近い木取りの板状の木製品で、表側全面と裏面の一部が焼け焦げている。長方形の板材の一短辺を丸く加工しており、別の短辺は欠損している。断面はやや湾曲した蒲鉾状を呈する。欠損部分にかけて大型の長円形の穿孔が２ヵ所施されており、また、側縁に沿った位置にも小円孔が３ヶ所認められる。

W13・*W14*はともに針葉樹板材に２ヶ所穿孔を施したもので、田下駄の足板と考えられる。*W13*は1977年度調査の北Ⅰ地区Ｙ19溝出土。柾目材の細い板を用いている。穿孔は両面から工具の痕跡を残して、非常に粗く開けている。２ヶ所の穿孔の間隔は６㎝である。

*W14*は1980年度調査の南Ⅰ地区Ｙ１溝から出土した。同溝は下流に井堰を設けており、弥生時代中期の土器が出土している。非常に年輪の詰まった針葉樹の比較的厚い板目材を用いており、平面形は長方形であるが、ひとつの角は斜めに落としている。別の製品から転用したものかもしれない。長辺の側面は平滑であるが、一短辺は一面から斜めに、別の短辺は表裏両面から斜めに削っている。穿孔は、刀子様の刃物で主軸に直交方向に四角く開けられており、紐擦れらしい痕跡が一方は表面、一方は裏面に認められる。２ヶ所の穿孔の間隔は9.5㎝である。

W15・*W16*も*W13*・*W14*と同様に２孔を有した板材であるが、田下駄足板とするには、薄く、加工が丁寧で、穿孔も大形である。他の部材と組み合わせたものであろう。*W15*は1977年度調査の北Ⅰ地区Ｙ19西溝上層部出土。針葉樹の板材を長円形に加工し、断面形は蒲鉾形を呈している。表面には加工痕が残る。両端部近くに比較的大きな5.1×2.5㎝、4.8×2.4㎝の長軸方向に長い長方形の穿孔を２ヵ所もつ。

*W16*は1976年度調査の北Ⅱ地区Ｙ18溝出土。針葉樹板目材の方形の板材の両端部近くに２ヵ所、方形に近い穿孔をもつ。穿孔は鋭い刃物で抉るように施されている。全体に薄く、断面形は中央部がやや厚い蒲鉾形を呈する。

*W17*は1980年度調査の南Ⅰ地区の堰、杭列第２群のロ列出土で、Ｙ１溝に伴う。目の詰まった針葉樹の柾目材を用いており、断面レンズ形の細長い板状を呈している。一端は幅を狭めた後、頭部を作って把手状にしており、もう一端は丸く加工して、大きく方形に切り欠きあるいは方孔を作る。ほぼ中央には円孔を穿つが、これらの孔は木目と関係なくほぼ垂直に穿たれており、鋭利な工具を用いたものと思われる。

W18・*W19*は1976年度調査の南Ⅰ地区Ｓ１溝出土のもので、同溝からは古墳時代後期までの土器が出土している。*W18*は長方形板材の両端部に方形の突起部を設けたもので、一端は欠損する。突起部は短辺の中央ではなく、やや偏った位置に作られている。一方の長側面に沿った位置に２ヶ所、回転によるものと思われる穿孔がある。表面は手斧様の直線的な刃をもつ工具で丁寧に加工されており、突起部に向けて斜めに薄く削っている。大足・田下駄の部材の可能性も残るが、組物の箱型容器の可能性がある。類似したものに５世紀前半から中頃の板付遺跡（福岡県）出土のものがある。

*W19*は、厚さ1.8㎝ほどの比較的厚い針葉樹柾目材の長方形板材の両短辺の角をななめに削って方形の枘状につくる。枘状の一ヶ所は凹状に加工されており、別の部材と組み合わすものと考えられる。表面の加工は丁寧である。大足・田下駄の部材か。

*W20*は1977年度調査の北Ⅰ地区Ｙ18′溝出土。この溝はＹ19溝の上流にあたり、Ｙ19溝に切られている。弥生時代前期の土器もみられるが、中期の土器も出土している。比較的緻密な針葉樹の柾目材を円柱状の棒形に加工した木製品で、両先端部を欠く。中央部の幅を広く作り、一方の面を平らにする。別の部材と組み合わせて用いられたものであろう。

*W21*は1977年度調査の北Ⅰ地区Ｙ19西溝上層部から出土した。針葉樹板目材を加工したもので、使用痕はみられないが、紡織具の横打具であろう。断面形を蒲鉾形に整形し、両端部を枘状に細く削りだす。枘の断面は方形である。

*W22*は1976年度調査の北Ⅱ地区Ｙ18溝出土。比較的目の細かい針葉樹の板目材で、長方板の一角を湾曲させて切り取った板材である。厚さは下方の短辺側が薄くなる。大きな穴は節穴である。

*W23*は南Ⅰ地区Ｙ1溝の堰、木杭列第１群付近出土。船形木製品であろうか。角材の上面を樋状に抉り、下面は手斧様の工具で加工している。一方の端部は両側面からななめに尖らせており、もう一方の

端部は下面から削って尖らせている。節のある針葉樹材を用いており、加工は鋭利な刃物を用いているが、非常に粗い。おそらく金属器を用いたものであろう。

W24・*W25*・*W26*は1976年度調査で南Ⅰ地区の西端のＳ２溝から出土した。Ｓ２溝からは墨書土器なども出土しており、この挽物も奈良時代から平安時代にかけてのものであろう。*W24*・*W25*は挽物皿である。*W24*は針葉樹板目材を用いている。わずかに立ち上がりが残るが、体部以上は欠損する。直径17.4㎝を復元する。

*W25*は針葉樹柾目材を用いる。内法１㎝ほどの深さがあり、口縁部は一部残存する。外面には轆轤痕が顕著に残される。立ち上がり部に２ヵ所小孔が認められ、別の破片の底部にも２ヵ所小孔が見られることから、補修されて使われていたものであろう。直径19.3㎝を復元する。内面には鋭利な刃物でつけられた直線的な毛描線が見られ、底面には「奉」あるいは「春」字の上半部の文字が刻書される。

*W26*も1976年度調査の南Ⅰ地区の西端のＳ２溝から出土した円盤状の柾目板で、曲物の底板であると思われるが、長径が11.3㎝、短径が9.1㎝と形状はやや歪である。厚みのある材で、周縁部を削って薄くしている。

W27～*W34*は東Ⅰ地区の近世溝Ｋ１から出土した。*W32*は1981年度Ｆトレンチ調査時に溝内の灰色砂層から出土しており、同一の溝からの出土である。

W27・*W28*は曲物底板或いは蓋板で、*W27*は直径が12.1㎝。*W28*は過半を失うが、1ヶ所の回転による穿孔と片面には焼印が押される。裏面は外周にそって段状に削っている。

*W29*は曲物側板で、側面下端に３ヶ所の穿孔が認められ、底板を留める目釘孔であろう。樺綴じされた内側の内面には縦方向の細い切込みが数本認められる。また、内側に別の材を当てて、樺綴じしている。

*W30*は卒塔婆で、針葉樹の板目材の薄板の下端部を両側面から斜めに切って尖らせ、上半部には側面からの切れ込みによって五輪塔を形作っている。長さ24.0㎝、幅3.9㎝、厚さ0.6㎝。現状では墨書等は認められない。

W31～*W34*は台と歯を一体に作り出した下駄である。ともに平面形は長円形で、歯は低い。歯や後端部が磨り減って、よく使用されている。

W31・*W32*は２本の歯がつく連歯下駄である。*W31*は全長25.0㎝。最大幅が前歯付近にあり、7.6㎝を測る。比較的薄つくりのものである。裏面の緒孔周辺には鼻緒のすれた痕跡が認められ、上面の前緒孔右にも凹みが認められることから、左足用であったと思われる。比較的目の粗い針葉樹の柾目板を用いている。

*W32*は針葉樹の板目材を用いており、歯裏面には節目が残るが、使用により非常に磨り減っているため、踵側が低くなっている。長さ23.5㎝、幅8.8㎝。

*W33*は前後の木口部周縁を削り残して歯にした庭下駄で、比較的目の粗い針葉樹の板目材を用いている。後孔は大きく開けられている。歯の間の抉り部には手斧様の工具痕が残されているが、歯はよく摩滅しており、特に左側の摩滅が著しい。前緒孔右側に使用痕が認められることから、左足用と思われる。長さ23.6㎝、幅7.8㎝。

この他、前半部の欠損した庭下駄がもう１点（*W34*）出土している。非常に目の粗い針葉樹板目材を用いている。（別府）

参考文献

奈良国立文化財研究所　1992「木器集成図録　近畿原始編」奈良国立文化財研究所　史料第36冊
森内秀造　1983「原田西遺跡」『木製農具について』埋蔵文化財研究会　第14回研究集会資料

３．石器（図版73～77）

31点を図化した。ここでは、器種別に報告をおこなう。

打製石剣（Ｓ５・Ｓ６）

Ｓ５は基部がやや欠損するものの、ほぼ完形の石剣である。作用部は、連続した剥離によって調整されている。表・裏面とも中央に稜が通るため、断面は菱形を呈する。サヌカイト製ではあるが、両面ともに稜の部分を中心として、磨かれた面が見られる。Ｓ６もサヌカイト製である。石剣の基部に相当すると思われる。研磨は行われていない。

石鏃（Ｓ７～Ｓ15）

９点図化した。全てサヌカイト製である。

Ｓ７は縄文時代の石鏃である。基部の抉りはＶ字形で深く、いわゆる「ノコギリ鏃」と呼ばれる縄文時代後期・晩期のものと思われる。Ｓ８・Ｓ９は凹基式の石鏃である。厚みがそれぞれ3.6㎜・3.9㎜と９点の中では薄い。Ｓ10・Ｓ11は尖基式の石鏃である。２点とも明瞭な基部をもたず、作用部は緩やかに外湾する。Ｓ12～Ｓ14は有茎式の石鏃である。Ｓ13は作用部と基部の長さがほぼ等しい、９点の中では一番の大型石鏃である。Ｓ14は逆刺しが鋭角に張り出し、調整は縁辺に行われ、中央には大型の剥離面を残す。Ｓ15は石鏃の基部と思われる。製作中に欠損したため、途中で放棄されたものと考えられる。

削器（Ｓ16・Ｓ17）

Ｓ16・Ｓ17とも、横長剥片の縁辺部に、弧を描く連続した加工が見られる。サヌカイト製である。特にＳ17は、背面から腹面への加工が特徴的である。

楔形石器（Ｓ18）

３辺に細かい階段状剥離が見られる。もう１辺は、剪断面で一部に自然面を残す。サヌカイト製である。

使用痕ある剥片・剥片（Ｓ19・Ｓ20）

Ｓ19はサヌカイト製の横長剥片で、鋭利な１辺に使用による剥離痕が認められる。Ｓ20もサヌカイト製の横長剥片で、表面に自然面を残す。

打製石器の石材

サヌカイト製の打製石器のいくつかは、肉眼観察によると、二上山産と判定できるものを多く含む。例えばＳ８・Ｓ18・Ｓ20などである。

報告番号	器　種	石　材	出土地区	出　土　遺　構	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)
S５	打製石剣	サヌカイト	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	156.4	34.0	15.7	78.1
S６	打製石剣基部	サヌカイト	中央Ⅶ地区	Ｄトレンチ溝拡張	57.3	23.5	11.1	16.3
S７	石鏃	サヌカイト	中央Ⅶ地区	Ｄトレンチ付近表採	17.2	15.2	4.9	0.5
S８	石鏃	サヌカイト	東Ⅰ地区	Ｆトレンチ　住居址関係？	24.5	16.1	3.6	0.9
S９	石鏃	サヌカイト	南Ⅰ地区	方形周溝墓Ⅰ　南溝上面	24.5	19.7	3.4	1.0
S10	石鏃	サヌカイト	東Ⅰ地区	土坑内	47.4	12.6	8.0	4.1
S11	石鏃	サヌカイト			31.3	12.1	1.5	1.5
S12	石鏃	サヌカイト			28.0	15.0	5.6	2.1
S13	石鏃	サヌカイト	南Ⅰ地区		51.9	21.7	5.7	4.4
S14	石鏃	サヌカイト	東Ⅱ地区	Ｈ１溝底小礫層中	34.0	20.0	3.7	1.7
S15	石鏃基部	サヌカイト	東Ⅰ地区	Ｇトレンチ	32.4	14.5	4.2	1.7
S16	削器	サヌカイト	南Ⅱ地区	Ｙ４溝　黒色粘土	53.7	29.7	6.5	12.0
S17	削器	サヌカイト	南Ⅰ地区		52.8	31.0	8.6	11.7
S18	楔形石器	サヌカイト	東Ⅱ地区	ＳＸ11	41.1	32.2	12.8	14.5
S19	使用痕ある剥片	サヌカイト	中央Ⅵ地区	Ａトレンチ溝肩下	56.3	33.8	7.0	13.3
S20	剥片	サヌカイト	南Ⅰ地区	Ｙ５溝	51.7	29.5	10.1	10.8
S21	磨製石包丁	粘板岩	北Ⅰ地区	Ｙ17溝	160.5	45.3	7.2	66.8
S22	磨製石包丁				152.9	49.5	9.2	
S23	磨製石包丁	緑泥片岩	南Ⅰ地区	杭列第２群	126.3	55.4	8.0	72.8
S24	磨製石包丁	緑泥片岩	中央Ⅲ－２地区	西溝　赤褐色砂礫上	92.3	59.5	7.2	55.3
S25	磨製石包丁	緑泥片岩	北Ⅰ地区	Ｙ17溝	72.2	36.6	7.5	28.8
S26	磨製石包丁	粘板岩	南Ⅱ地区	Ｙ１溝	95.8	45.4	8.0	41.8
S27	磨製石包丁	粘板岩	中央Ⅲ－２地区	東溝内黒褐色粘質土	75.0	29.9	9.6	28.6
S28	磨製石包丁	粘板岩			63.8	80.2	12.6	85.7
S29	太型蛤刃石斧	砂岩（硬質）	南Ⅰ地区	Ｙ１溝肩内	173.6	70.0	47.1	956.9
S30	太型蛤刃石斧	砂岩	南Ⅰ地区	Ｙ１溝肩内	106.4	65.7	41.5	431.3
S31	蛤刃石斧	砂岩	南Ⅰ地区	Ｓ１溝	76.3	42.9	31.0	137.1
S32	石斧未製品	安山岩	中央地区		120.0	80.5	73.2	715.7
S33	砥石	砂岩	中央地区	Ｙ２溝	144.8	110.2	60.0	906.9
S34	凹み石	砂岩	中央Ⅲ－２地区	西溝内黒褐色礫混粘土	165.3	99.2	68.0	1720
S35	台石	砂岩			213.2	169.3	78.3	4340

石器計測表

磨製石包丁（*S21～S28*）

８点を図化した。完形品はなく、刃部形態が確認できるものが６点、欠損しているものが２点ある。*S21*は粘板岩製で、刃部が唯一内湾する。刃部のところどころに、使用による微細な欠損が認められる。*S23*・*S24*はともに欠損しているが、刃部は緩く外湾している。刃部に使用による微細な欠損が認められる。緑泥片岩製である。大型の石包丁が多い中で、*S25*はかなり細身である。刃部は直線的で、緑泥片岩の自然面が剥落し、研磨痕は明確に残っていない。*S26*はかなり直線的な刃部を持ち、粗く研磨されている。刃部には使用による微細な欠損が認められる。石理に沿って折れが認められ、一箇所穿孔が見られる。粘板岩製である。*S27*は粘板岩製で、４面とも欠損している。穿孔が見られるので、石包丁であったことは確実である。表面の左側に、欠損後に生じたと考えられる稜が認められ、砥石への転用を示唆するものと考えた。*S28*は他の石包丁に比べ、厚さが１㎝を越えるので、大型石包丁であると考えられる。欠損部が多く、刃部を始めとした全体の形状は不明である。粘板岩製である。

磨製石斧・石斧未成品（*S29～S31*・*S32*）

４点を図化した。*S29*は砂岩製の太型蛤刃石斧である。側縁に明瞭な稜を持たず、断面は楕円形を呈する。表面の上部に少し形成時の敲打痕が残るが、丁寧に研磨されている。柄に装着した際のへこみが基部の両側縁に見られる。表面左側のへこみは、やや深い。*S30*も小ぶりではあるが、砂岩製の太型蛤刃石斧である。表裏両面に、形成時の敲打痕が見られる。側面はやや平坦に仕上げられている。右側側縁及び、基部の全面に敲打痕が残り、敲き石に転用したと考えられる。*S31*は砂岩製の両刃の磨製石斧である。*S30*と同様に、右側縁から裏面にかけて敲打痕が残り、これも敲き石に転用したと考えられる。*S32*は安山岩製で石斧未成品の可能性がある。亜角礫の原石を粗割りにした状態が観察され、両側面に自然面を多く残す。

砥石・凹み石・台石（*S33～S35*）

*S33*は目の粗い砂岩の円礫を利用した砥石である。よく使用された研磨面を持つが、研磨痕や線状痕は見られない。*S34*は砂岩製の凹み石である。両面ともに、凹面が見られるが、側面にも深い溝状のくぼみが見られる。*S35*は砂岩製の台石である。中央部に直径約４㎝、深さ約３㎝の穴が残されているが、どのように使用されたかは不明である。ただし、表面の上下部分と、裏面に煤が付着していることから、調理具として使用された可能性は高い。（古谷）

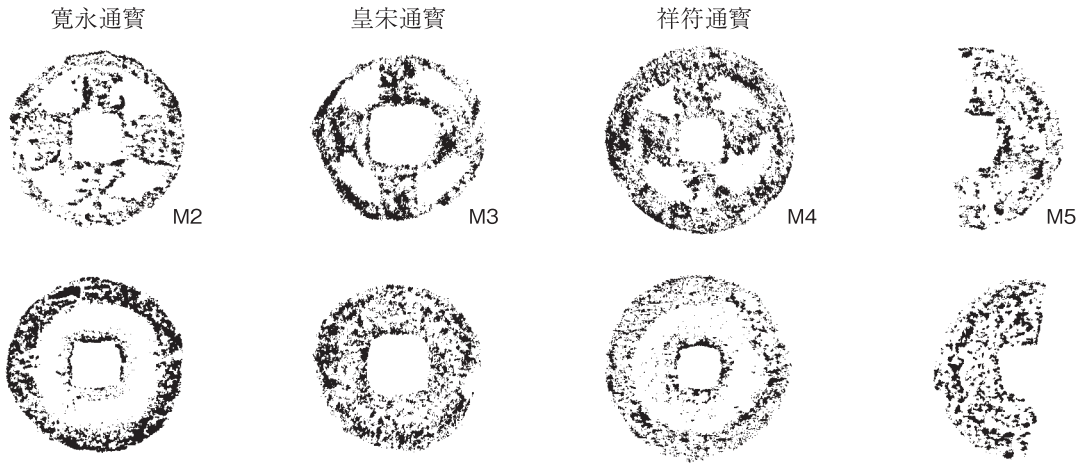
４．金属器

鉄斧（*M１*）；**図版77**

鉄斧は東Ⅱ地区でＨ１溝東周辺の遺構面検出中に出土した。遺構に伴うものではないため、所属時期は不明であるが、古墳時代以降のものであろう。袋部端を欠損しているが、長さ6.9㎝、幅4.0㎝の小形のもので、袋部は両側から折り曲げて接している。本遺跡からの金属器の出土は極めて少なく、本製品も錆化が著しい。（別府）

銭貨（*M2～M5*）

４枚出土している。*M2*は寛永通寶である。径2.3㎝、郭の幅0.2㎝、最大孔径0.59㎝、重さ2.2ｇを測る。1980年度の調査で出土している。古寛永である。*M3*は皇宋通寶の篆書体である。径2.2㎝、郭の幅0.18㎝、最大孔径0.74㎝、重さ1.8ｇを測る。1976年度の調査で出土している。*M4*は祥符通寶で径2.5㎝、郭の幅0.32㎝、最大孔径0.52㎝、重さ3.3ｇを測る。*M5*は判読できない。*M4*・*M5*ともに1976年度の調査のＧＨ６地点で出土している。（渡辺）



第８図　出土銭貨拓影（実寸）

第５章　自然史的背景 (再掲)

第5章は公開していません

第６章　まとめ

第１節　遺構について

１．原田西遺跡の自然的環境と水利施設について

調査の結果、当遺跡地には古猪名川の本流、もしくは分流と推定される大規模な旧河道跡とその支流ともいえる小規模な河道跡が全域に認められた。これらの河道跡（Ｙ１溝・Ｙ18溝・Ｙ19溝）の底に近い堆積土からは弥生時代前期の土器が出土しており、河道跡は弥生時代以前から形成されていたものと推定できる。河道跡内の堆積土からは弥生時代全般の土器が出土し、古墳時代の須恵器を包含する灰色粘土層の堆積によりほぼ埋没している。Ｓ２溝においては奈良から平安時代の墨書土器・曲物を包含する粘土層で埋没している。以上のことから当地は弥生時代から古墳時代にわたっては大小の河道が網状に流れていた状況が推定される。水路内の堆積土はシルトないしは粘土層であり、その中には多量の植物遺体（草本類）が堆積している状況がほぼ河道跡全域で観察できた。このことは当地域の河道跡は雨季などの出水時以外は、ほぼ静水状態にあったことを示すものと考えられる。また、この河道跡の水量状況を推測させるものにＹ18溝における井戸状の「水くみ遺構」がある。これは河床の一部を掘り下げ渇水期における河床下の伏流水を集めるための遺構と考えられる。このこともこの河道に豊富な水流を想定しがたいところである。他方、これらの河道から取水していたと推定される人工水路も存在する。北地区のＹ14溝・Ｙ15溝・Ｙ16溝、南Ⅱ地区のＹ４溝・Ｙ21溝・Ｙ22溝は平面形態が直線的であり、かつ断面形態がＶ字状を呈している。このことは明らかに人工開削による水路と推測される。調査においては調査上の諸制約により水の取り入れ口となる水路の接合部は確認できなかった。人工水路の時期はいずれも出土する土器から弥生時代前期ないし中期と考えられる。

これらの自然河道跡内では水利施設が２地域で確認できた。北Ⅰ地区の堰遺構は弥生時代後期の河道の変化に対応して、護岸施設と用水路への分水との２種類の施設が構築されていた。その時期としては弥生時代後期である。

南Ⅰ地区においては３群の堰遺構群が構築されていた。第１群の堰遺構はＹ１溝内の流水路の変化に対応した施設かと推測される。第３群では５施設が発見されたが河床地形の複雑さもあり機能と相互間の関連性については明らかにできなかった。なかでもＡ・Ｂ遺構については稠密な垂直杭の有り方は堰体構造の一部と推測するが、一方で水利以外の機能―梁もしくはエリ等の漁労施設をも想定したが確証は得られなかった。

第２群においては大小合わせて13基の堰遺構が存在した。中心となる大型堰の平面形態は上流である北方向へアーチ形を描いている。構築は同方向間では下流から上流側へ、かつ西から東へとの順序が堰体構築土層から読み取れる。北方からのＹ１溝への流入水路が３方向みられ、かつ流入方向が移動していったとすると、堰の築造位置はそれぞれの時期の水流方向の変化に対応して西から東へと時計回りに移動したと考えられる。堰の構造ではイ列における「水たたき」施設が認められた。この洗掘防止施設と対応するイ列堰は、越流水を想定した「越流堰」と捕らえることできる。他の堰については越流水への特段の対応する構造は認められなかった。

ここにおいては北から流下してくる大小の河道が１ヶ所に収斂する地点に当たり、堰の築造については河床の中洲状の高まり間を利用していることが見て取れる。その築造時期については集中的に出土する土器の弥生時代中期前半であると考えられる。

Ｙ19溝をはじめとする小規模な堰については、流水方向の変換等の取水機能が想定される。他方、Ｙ１溝杭列第２群の大規模な堰は、Ｙ18溝からＹ１溝に続く幹線水路においてＹ18溝底の土坑が示すように恒常的な流水が想定しがたい状況から、大規模な貯水施設であったと推定できる。　(小川)

２．方形周溝墓について

原田西遺跡の北端部にあたる東地区では、弥生時代前期から近世にいたる各時代の遺構が確認されている。その中でも弥生時代中期（畿内第Ⅱ様式末頃から第Ⅳ様式頃）の方形周溝墓群は10基並んで検出されており、内５基の台状部からは木棺が検出され、棺の木材が残存しているものも確認された。周溝内からは供献土器が比較的良好な状態で出土しているものがみられる。また、南Ⅰ地区南東部でも残存状態は悪いものの方形周溝墓（畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式頃）３基が検出されており、原田西遺跡は調査時点において、兵庫県内で最も多く方形周溝墓が集中して検出された例であった。

原田西遺跡では弥生時代中期の区画をもたない木棺墓・土壙墓・土器棺などの確実なものは検出されていない。地形的には北側がやや高くなることから、北東側に集落の中心があった可能性が高いが、調査では北側に行くほど削平が顕著であった。

東地区の方形周溝墓群は溝を共有するものや切り合っているものがあるが、この状況は南北方向に隣接する周溝墓で顕著である。東がやや北に振った東西方向を基線として並んでおり、ＳＸ１・ＳＸ６及び、ＳＸ２・ＳＸ５・ＳＸ11で構成される２列で、特にＳＸ５とＳＸ11の２基の比較的規模の大きな方形周溝墓が並んでいる。その南北側に規模のやや小さな方形周溝墓が接するように配置されている。南端のＳＸ１とＳＸ６は中規模のものである。最も規模の大きいＳＸ５では16.2m×12.7m、最も規模の小さなＳＸ４では6.8m×5.6mの規模である。最も規模の大きいＳＸ５から出土した土器が最も古い様相を示しており、この周溝墓を中心として周溝墓群が形成されたものと考えられる。

ＳＸ１では南側の一辺の周溝が二重に作られており、当初の溝が埋没したのち、新たに拡張して溝を設けたことが観察できた。ＳＸ２の北側の周溝とＳＫ10もＳＸ１と同様の二重の溝となる可能性があり、ともに他の周溝墓に影響を与えない方向に拡張したものと解釈できる。

周溝はＳＸ３・４・５・10・11がほぼ全周に巡らされており、ＳＸ１・２・６・９では１ヶ所あるいは２ヶ所途切れて陸橋状になっている。

南Ⅰ地区では３基ないし４基程度の方形周溝墓が検出されており、やはり東側が北に振る東西方向に列をなしている。南北方向相互の周溝墓には切り合いが見られる。方形周溝墓Ⅱはコーナー部が途切れるものである。周溝墓に前後する時期の溝が錯綜しており、各周溝墓に所属する土器は確定できない。方形周溝墓は原田西遺跡の大阪府側では検出されておらず、東側にはあまり広がらないものと考えられる。西北に隣接する伊丹市口酒井遺跡では中期後半の方形周溝墓群や後期後半の円形周溝墓が確認されており、別の群を構成している。

大阪空港を挟んだ北側に位置する大阪府の蛍池北遺跡では、中国縦貫自動車道路建設関連で調査された宮の前遺跡を含めて30数基もの方形周溝墓が検出されており、数グループに分かれることが指摘され

ている。また、100基近い木棺墓や土坑墓も検出されている。方形周溝墓が最も集中する地点では同時期の竪穴住居と近接して検出されており、居住域の南側をU字形に囲むように墓域がとりまくように展開する様相が推定されている。時期的にも原田西遺跡の方形周溝墓と重複しており、Ⅳ様式期に衰退し始める。

この他、田能遺跡、豊島南遺跡、勝部遺跡、小曽根遺跡でも弥生時代中期の方形周溝墓が検出されており、猪名川流域の左岸には10基程度を単位とする方形周溝墓群が点在している。これらの墓は衛星的な集落に伴うものと考えられるが、現在のところ近辺では弥生時代中期における中核的な集落は確認できていない。原田西遺跡でも竪穴住居は１棟しか検出されておらず、地形的にやや高い北東側の空港滑走路地下に集落が存在する可能性がある。

(別府)

参考文献

岸本一宏 1988「近畿地方の弥生時代墳丘墓についてー集落構造把握への視点としてー」『網干善教先生華甲記念考古学論集』

岸本一宏 2007「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『第９回播磨考古学研究集会資料集』第９回播磨考古学研究集会実行委員会

宮之前遺跡発掘調査会 1969「宮之前遺跡発掘調査概報」

蛍池西遺跡発掘調査団 1997「蛍池西遺跡ー阪神高速道路大阪池田線池田延伸工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」

池田市 1997「新修池田市史」第一巻

猪名川流域原田下水処理場遺跡調査団 1980「原田西遺跡」豊中市文化財調査報告第７集

豊中市教育委員会 1994「蛍池北遺跡　第12次発掘調査報告」豊中市文化財調査報告第36集

豊中市教育委員会 2000「蛍池北遺跡　第１次発掘調査報告」豊中市文化財調査報告書第48集

豊中市教育委員会 2002「小曽根遺跡　第７次発掘調査報告書」豊中市文化財調査報告書第52集

伊丹市教育委員会 1994「口酒井遺跡発掘調査報告　第22・25次調査」伊丹市埋蔵文化財調査報告書第20集

伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会 1999「口酒井遺跡発掘調査報告　第１～10次・第12～16次調査の概要」

兵庫県教育委員会 2005「岩屋遺跡・森本遺跡」兵庫県文化財調査報告第200冊

３．遺構の立地と時期別分布

第４章第１節において、調査年次との関係から北地区・中央地区・南地区に区分したうえで、各地区の遺構の概要を述べたが、遺構の分布状況から遺跡を大きく区分すると、およそＹ18溝およびＹ１溝付近を境に西側域（北地区・中央地区・南Ⅰ区）の旧河道域と東側域（東地区・南Ⅱ地区・南Ⅲ地区）の住居・墓域を主体とする生活空間域に２分される。すなわち、西側域では弥生時代から古墳時代にかけての自然流路を中心とする不安定な地盤であるのに対して、東側域では比較的安定した地盤であったとみられ、大きな河道の貫流はなく、住居跡、掘立柱建物群、方形周溝墓群などの遺構群で構成されている。従って、ここでは西側域の旧河道を中心とした遺構群と東側域の遺構群の２つに分けて、遺構の変遷を中心に遺跡全体を見通した簡単なまとめを行っておきたい。

西側域の遺構群

西側域における中心河道は弥生時代前期～中期にかけてのＹ18溝・Ｙ２溝およびその下流部のＹ１溝である。北Ⅰ地区から始まるＹ18溝は東行の後、ほぼ直角に方向を変えて南行する。一方、中央Ⅵ地区に始まるＹ２溝は２つに分かれるが、一方は南に、一方は東に向かう。東に向かう溝は中央Ⅱ－２地区

付近でＹ18溝と合流し、Ｙ１溝となる。Ｙ１溝はそのまま南下するが、下流部で深度が浅くなり、静水地状となる。この下流部では多数の杭列を伴った堰遺構群が検出されている。この堰遺構群は第４章第１節および本節第１項で述べられている通り、護岸施設・分水堰・越流堰などの性格が想定されている。Ｙ18溝・Ｙ２溝・Ｙ１溝は弥生時代末には埋没していたと思われ、Ｙ18溝域では埋没後に水利施設を伴うＹ19溝が人為的に掘削され、Ｙ１溝域においてもＳ１溝やＳ２溝が埋没上面を貫流して南に流れる。

このほか、Ｙ１溝と平行してＹ２溝から枝分かれしたＹ３溝が南に下る。このＹ３溝は弥生中期土器が多く出土しているが、同溝内の一部からは古墳時代前期の土器も出土しており、また弥生時代前期のＹ５溝および古墳時代中期のＳ２溝がＹ３溝から分岐する形で検出されていることから、長期間にわたって流れを繰り返していたものと思われる。

東側域の遺構群

本節第１項で述べられているように、西の旧河道の形成は弥生時代以前から開始されており、東地区では縄文土器の出土や弥生時代前期の土坑群（ＳＫ２～６・８・９・13～17・25・27・30）が集中して発見されている。このうち、ＳＫ14～ＳＫ17の弥生前期の遺構については木棺墓もしくは土坑の可能性が高いとされている。弥生時代前期の明確な遺構はこの土坑群のみであるが、上面が削平されて帰属時期の明確でない竪穴住居ＳＨ１が前期の土坑群に伴う住居の可能性が高い。

弥生時代中期の遺構としては東地区と南Ⅰ地区の２つの方形周溝墓群がある。当該調査区では住居に伴う遺構は発見されていないが、墓域と居住域が別であるとすると当該調査区より北東に所在するものと思われる。また、住居域が近隣に存在することは、北地区のＹ14溝・Ｙ15溝・Ｙ16溝および南Ⅱ地区のＹ４溝・Ｙ21溝・Ｙ22溝が人工水路（本節第１項参照）と考えられることや西側河道域のＹ１溝などに堰などが設けられ、灌漑利用が行なわれていることからもわかる。

弥生時代後期～末の遺構としては東区のＳＫ11・20～22およびＨ１溝がある。Ｈ１溝は弥生中期の周溝墓群域を貫いて南流し、溝内から残存状態の良好な土器群が出土している。この時期の遺構は土坑以外には検出されておらず、Ｈ１溝の土器群も上流域から流されてきた可能性が高く、北東方向に居住域の存在を想定させる。また、北東方向における居住域の存在は北Ⅰ地区のＹ19溝で検出されている灌漑施設等の遺構の存在からもうかがうことができる。

古墳時代中期以降（須恵器の出現以降）の遺構の分布は希薄で遺物の出土量も少ないが、南地区で遺構と遺物がやや集中して発見されており、南地区周辺にこの時期の居住空間が存在しているものと思われる。また、東地区ＳＫ26のほか中央地区ＥＦ10溝内からややまとまった量の初期須恵器が出土している点に注目したい。

続く律令期以降の遺構としては、東地区の掘立柱建物ＳＢ４がある。ＳＢ４は柱穴内に混入していた土器の年代から、平安前期ころの時期と推定される。また、南地区でも掘立柱建物群が検出されているが、土器を伴っていないので時代は不明である。但し、このうちの建物（ＳＢ２）の柱穴跡が中世溝Ｍ２によって切られていることから、南地区の建物群の年代が中世以前に遡ることは明らかである。

中世の遺構には、Ｍ１溝、Ｍ２溝～Ｍ４溝があり、いずれも自然の溝ではなく、人為的に掘削された溝である。

Ｍ１溝は幅1.8m、深さ0.8mの断面Ｖ字形を呈する溝であるが、上面は削平された可能性が高く、本来もう少し深さがあったものと思われる。土の堆積状況からは流水の痕跡は認められず、溝の肩部の崩れがないことから長期に存続していたとは思われない。中央Ⅶ区を起点とするが、当該調査区では終結

せず、調査範囲外に伸びる。起点付近では関係施設の痕跡は検出されておらず、途中においても別の溝の合流や水口が設けられた痕跡も確認できなかった。また、Y18溝およびその下流部のＹ１溝の埋没面上を貫流していることから、おそらく中世段階には古代からの旧流路は埋没し、ある程度安定した地盤となっていた可能性が高い。

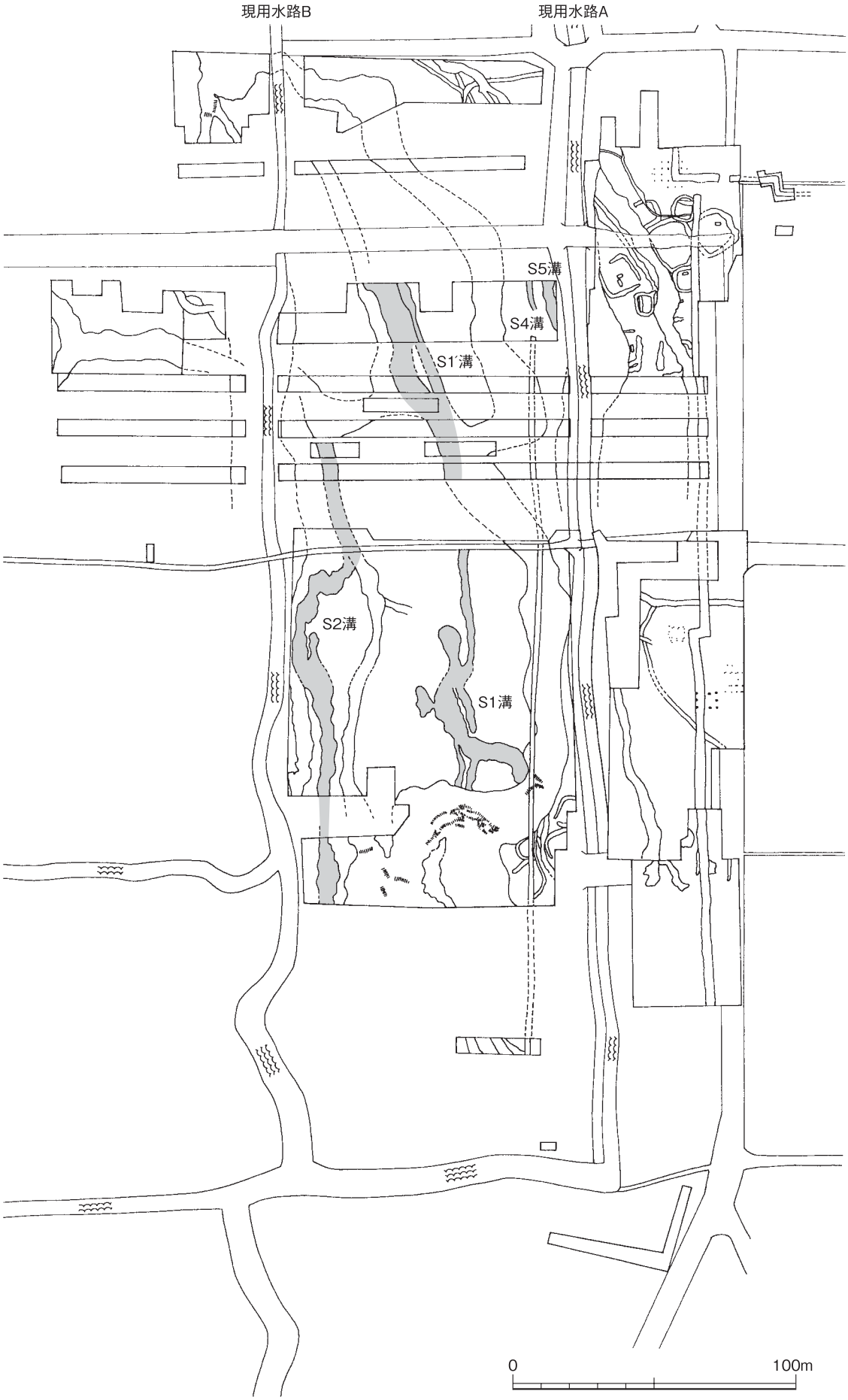
Ｍ２溝～Ｍ４溝は上幅2.8m、深さ1.2mのＶ字溝である。Ｍ２溝は東Ⅱ区を起点とし、Ｌ字にクランクするＭ３溝に近接するが、結合しない。同じくＭ３溝もＭ４溝と近接するが、結合しない。従って、Ｍ２溝、Ｍ３溝、Ｍ４溝の起点口が囲む空間は一種の出入り口のような空間を作り出しているが、門扉や杭等の痕跡は検出できなかった。Ｍ２溝～Ｍ４溝に関しては、それぞれの延伸部については調査範囲外にあたるため確認できていない。このうちＭ２溝は南Ⅱ区において西にクランクしたのち、そのまま再び南下を続けるが、クランク部ではなんらの遺構も発見されていない。Ｍ２溝～Ｍ４溝の特徴としては、いずれも断面はＶ字形で、底は箱形を呈する。土の堆積状況からは流水の痕跡は認められない。また、Ｍ３溝からは頭骨が発見されている。

Ｍ１溝とＭ２溝～Ｍ４溝との関係については、遺物の包含点数が少なく遺物の上では同時期か否かの判断は難しいが、埋土の状況、断面の形状など共通しており、同時期の掘削溝の可能性が高い。Ｍ１溝とＭ２溝は60mの幅をもって平行に掘削されており、何らかの目的をもって掘削されたものと思われる。Ｍ１溝～Ｍ４溝の性格については、もし、灌漑用であれば、いずれかの箇所で水口や河川からの引き込み口が存在するはずであるが、起点部はそれぞれ独立して河川からの引き込み口はまったく存在しない。何よりも前述の通り、流水の痕跡は認められない。いずれも溝断面がＶ字形をしている点、溝の両肩口ともに形崩れしていないことからその存続が長期に及んでいない点、頭骨が出土している点から防御目的の可能性が考えられるが、これ以外に防御施設を裏付ける痕跡はまったく発見されていない。以上の通り、Ｍ１溝とＭ２～Ｍ４溝の関係およびこれら溝全体の性格については、不明な点が多く、それらの解明については、当該地域での今後の調査による新たな知見の発見を待つか、他所での類例の発見を待たざるを得ない。

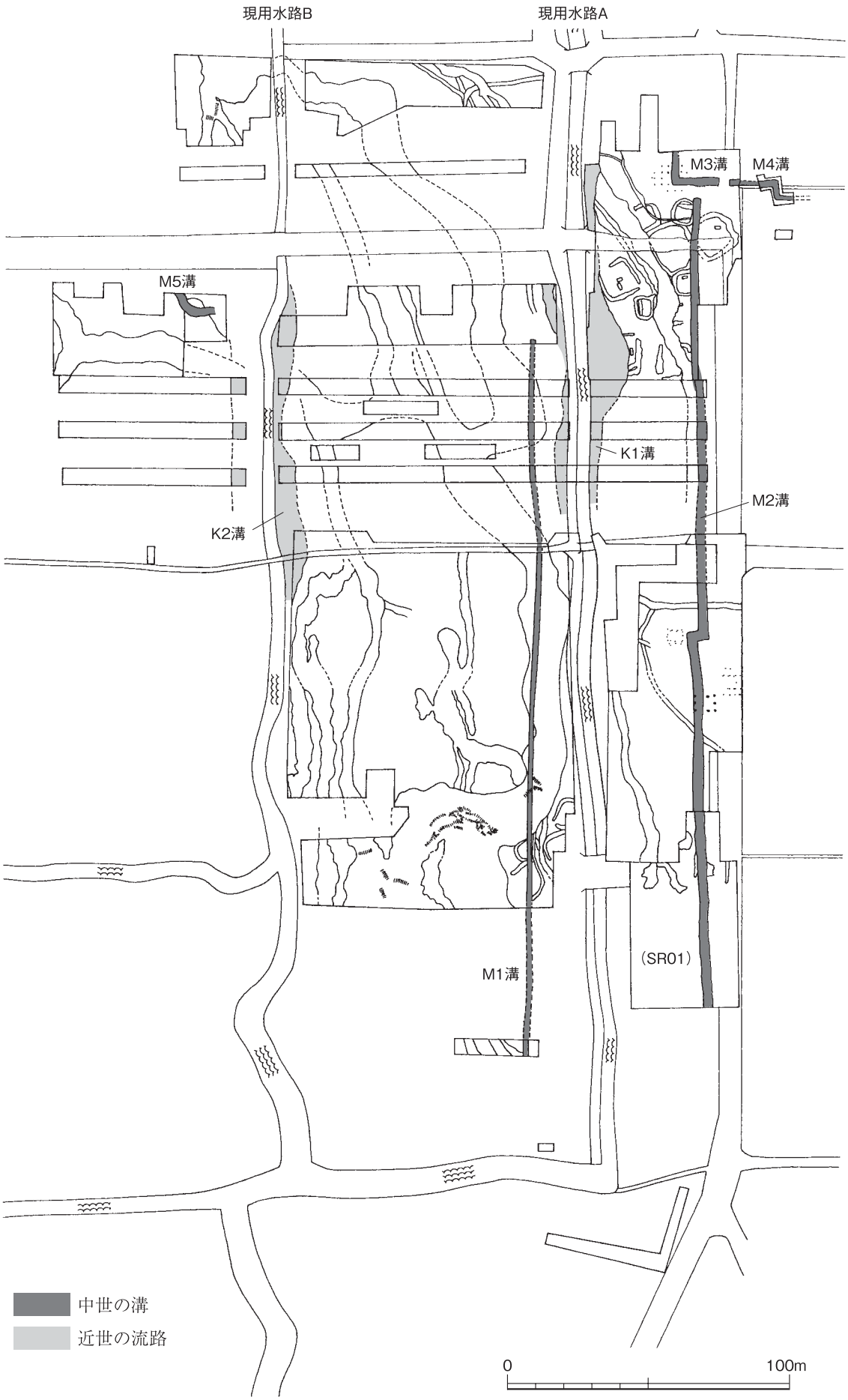
近世の遺構としては、現用水路の下層からＫ１溝、Ｋ２溝が発見されている。現用水路は現在残る条里地割り線上を流れているが、前述の中世溝が条里地割りと位置がずれていることから、現在残る条里地割りは近世の所産である可能性が高い。なお、東地区Ｋ１溝から多量の染付け碗類の出土とともに多数の打ち込み杭が検出されている。杭群は溝と平行して打ち込まれているものと溝を横断して打ち込まれているものがあり、護岸と堰または橋脚の可能性が高い。

(森内)

第13図　弥生時代の溝・流路想定図



第14図　古墳時代の溝・流路想定図



第15図　中・近世の溝・流路想定図

第２節　遺物について

１．弥生前期土器について

当遺跡出土の弥生時代前期の土器は調査範囲の各地区から出土しているが、特に北東部の東地区から多く出土している。

この地区では、ＳＫ８から壺 *(73・74)*、ＳＫ14から壺・甕・鉢 *(79～88)* が、ＳＫ15からは壺・蓋 *(89～93)* などが一括して出土している。その他、比較的まとまった出土状況を示しているのが、ＳＤ５ *(148～150)* やＪＴ溝 *(153～157)*、ＳＤ３ *(125～127)*、Ｉ－12・13溝２ *(204～209・219)* などの溝出土のものである。その他中央Ⅵ地区のＹ２溝 *(158～162)*、南Ｉ地区Ｙ５溝 *(212・217・218・220)* などからも比較的まとまって出土しているが、一括性は低い。

ＳＫ14出土の土器には、壺・甕・鉢がある。壺には段第１種の壺 *(79)* がみられ、ここでは削出突帯第１種をもつ壺 *(80)* や、如意形口縁に５条までの沈線を巡らせた甕 *(82・83)*・鉢 *(84)* が共伴しており、畿内第Ｉ様式１～２期まで遡り得る特徴をもつ。原田西遺跡ではこの段階のものが最古とすることができる。但しＳＫ14では玉縁状の逆Ｌ字状口縁の甕 *(85・86)* や、削出突帯第２種をもつ壺 *(81)* も出土していることから、一括資料としては後出する時期に含まれるのであろう。

近接したＳＫ15出土の土器には、壺・蓋・甕底部がある。削出突帯第２種をもつ壺 *(89)* や、胴部が大きく張った壺 *(90)* がみられることから、畿内第Ｉ様式２～３期の特徴をもつ。東地区のＳＫ25、ＳＫ27、ＳＫ30もほぼ同時期のものと思われる。

ＪＴ溝出土の土器には、壺・甕がある。壺には大型のもの *(154)* や、なで肩のプロポーションをもつもの *(153)* があり、甕には少条の沈線を巡らせた如意形口縁のもの *(155・156)* と、玉縁状の逆Ｌ字状口縁のもの *(157)* がある。畿内第Ｉ様式２～３期頃のものであろう。

続く３～４期に属するものにはＳＫ８、ＳＸ10西溝、ＳＤ３、ＳＤ５、Ｙ５溝出土土器などがある。Ｉ－12・13溝２出土の土器はやや古い要素もみられるが、この時期のものであろう。
ＳＤ10出土の壺 *(152)* は４期のものである。

(別府)

参考文献

井藤暁子 1983「近畿」『弥生土器Ｉ』ニューサイエンス社

森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年―近畿編Ⅱ―』木耳社

伊丹市教育委員会 1994「口酒井遺跡発掘調査報告　第22・25次調査」伊丹市埋蔵文化財調査報告書第20集

伊丹市教育委員会・六甲山麓遺跡調査会 1999「口酒井遺跡発掘調査報告　第１～10次・第12～16次調査の概要」

兵庫県教育委員会 2005「岩屋遺跡・森本遺跡」兵庫県文化財調査報告第200冊

佐原　真 1967「山城における弥生式文化の成立」『史林』90－５

２．弥生中期土器について

当遺跡出土遺物のうち、この時期の土器は調査範囲のほぼ全域にわたって出土しており、特に中期後半の土器は掲載分でも約150点にのぼっている。残念ながら、出土遺構・層位などの特定が難しいものも多く、細かい時期の様相を知ることは困難であるが、東Ⅰ・Ⅱ地区の方形周溝墓や南北に流れるＹ１溝と南東の方形周溝墓群付近からの出土土器等からこの地域の特性をある程度うかがうことができる。概観すると、ほぼ摂津地方の編年観に沿った土器構成と言えるが、多少特徴的なことを列挙しておきたい。

（ア）河内地方からの搬入土器と思われる広口壺・細頸壺が数点見られる。

（イ）広口壺頸部への断面三角形突帯貼付 *(245)*、Ｂ種凹線文施文 *(76・259)* は稀少である。

（ウ）田能で多くの出土例を見る段状口縁を持つ鉢は１点のみ *(272)* で、広口短頸壺も確認できない。

隣接する田能遺跡とも現象をいささか異にするのは時期差によるものか、当遺跡出土の中期土器が方形周溝墓からのものに偏るからであろうか？

ここではまず、東Ⅰ・Ⅱ地区の方形周溝墓ＳＸ１～６出土のまとまった土器を順に見ていくことにしたい。

ＳＸ１からの出土土器では、櫛描きにより加飾された広口壺 *(97・98)* と太頸広口壺 *(99)*、短頸壺 *(100)* 無頸壺 *(102)*、水差し形土器 *(101)*、甕 *(103～105)* が見られる。広口壺の加飾は櫛描きのみで、太頸広口壺でも加飾手法は同様である。無頸壺の口縁部には凹線文の上に刻み目・円形浮文が加えられ、脚部との括れ部には断面三角形突帯がめぐらされる。これらは中期後半でも古い時期の様相を示している。比して水差し形土器は畿内型と呼ばれるもので、凹線文のみで飾られ体部も算盤玉に近く張り、新しい様相を見せている。

ＳＸ２からはやはり櫛描きで飾られた広口壺 *(106)* と口頸部が内彎して立ち上がる大型細頸壺 *(107)*、甕２点 *(108・109)* 及び水平口縁を持つ高杯 *(110)* が出土している。大型細頸壺の口頸部には多条の凹線文が施され、高杯の口縁端部は大きく垂下しており、中期後半でも新しい時期に相当すると思われる。

また、北側周溝に接するＳＫ10からは櫛描きで飾られたやや長胴の体部で頸部下端に凹線文がめぐる壺 *(76)* が出土しており、これもこの周溝墓と時期をほぼ同じくして埋納されたものと見られる。

ＳＸ３出土の広口壺 *(113・114)* では器壁の保存が悪く櫛描き文等を確認することはできず、また凹線文などの新しい要素を見ることもできない。頸部にも突帯や凹線文の痕跡が見られない。しかし、体部の張りが大きく口縁端部が上方へも拡張されることから、新しい要素を持つものと見ることができる。２点とも底部中央に焼成後穿孔が認められる。甕 *(117)* は大型品で、外面体部下半にヘラミガキが施される。口縁部の形態から、やはり中期の後半に所属するものと見ておきたい。

ＳＸ４からは広口壺 *(128・129)* と細頸壺 *(131)*、短頸壺 *(130)*、水差し形土器 *(132)*、甕 *(133)* が出土する。広口壺は両者とも残りが悪く、調整等の確認はできないが、筒状に立ち上がって開く口頸部を持つ。細頸壺は算盤玉形に張る体部に櫛描き文と円形浮文による加飾が見られ、短頸壺は体部になだらかに続く口頸部を持ち、水差し形土器では凹線文が見られることから、中期後半でも新しい時期の所属と考えられる。甕は中型で体部下半にヘラミガキの後ヘラケズリがみられる。

ＳＸ５からは２点の広口壺 *(111・112)* が出土しているが、両者共に口縁端部は下方に拡張され、口頸部はなだらかに体部に続き、頸部～体部に櫛描き文による加飾が施される。体部の張りもあまり見られないことから、中期前半でも古相の所属としておきたい。

ＳＸ６からは81年度調査で出土した *138～147* のほかに、79年度調査においてほぼ完形の広口壺４点

(46～49) が出土している。これらを含めて南溝から出土した広口壺は計８点 *(46～49・138・139・141・142)*、いずれも残りがよく、ほぼ完形に近いもので、*141・142*を除いて口縁部･体部に櫛描き文・斜格子文・円形浮文などの加飾が行われている。中でも*47・48・138*は器形・成形技法・加飾手法などが極めて近似している特徴的な一群である。小型品で底部に近い体部下半に焼成後穿孔が施されている。*46～48*の出土状況の詳細が残っていないのが残念ではあるが、これらの出土地点は近接していたものと思われる。また広口壺 *(142)* も長頸で、いずれも体部の張りが他の土器ほどには見られず古い要素を多く残している。他の広口壺は形態･加飾手法などにばらつきが見られ、体部が算盤玉形に大きく張るものもある *(49)*。また西溝から出土の大型細頸壺 *(143)* の口頸部には凹線文と櫛描き文がみられ、ＳＸ２の大型細頸壺よりは古相を示しているようである。

ただし、東地区の方形周溝墓出土土器ではむしろ口縁部への凹線文が施される広口壺はみられず、*47～49・97・138・139*では波状文や扇形文・円形浮文が口縁端部や内面に施されている。また、これらの土器にはいずれの頸部にも突帯または凹線文など体部と口頸部を画するものがみられない。そのため、凹線文のあり方によって時期を比定することができないのではあるが、ここでは共伴する凹線文土器の様相によって若干の時期差が見られ、古相に含まれるものと新相に含まれるものとに区分できる。

土坑ではＳＫ７で太頸広口壺 *(70)* と畿内型水差し *(71)* 他が出土している。太頸広口壺は櫛描き文のみで加飾されるが、水差しは口縁部に凹線文がめぐり、体部は算盤玉状に張り出している。やはり中期後半の中でも新しい様相と見なされる。

以上、この地区の方形周溝墓群はほぼ中心に位置するＳＸ５が中期前半に先行し、それを取り囲むかのようにその後中期後半に順次築成されていったことが伺える。

各方形周溝墓単位でまとまった出土土器の内訳は以下の表のとおりである。

出土遺構	広口壺				太頸広口壺	大型細頸壺	細頸壺	短頸壺	無頸壺	水差し	高杯	甕	計
	数量	口縁櫛描	口縁凹線	頸部凹線									
ＳＸ１	2	*1*			1			1	1	1		2	8
ＳＸ２	1	*1*				1					1	2	5
ＳＸ３	3											1	4
ＳＸ４	2						1	1		1		1	6
ＳＸ５	2												2
ＳＸ６	9	*3*				1	1						11
ＳＫ７					1					1			2
合計	19	*5*			2	2	2	2	1	3	1	6	38

東地区方形周溝墓群　出土土器器種構成表

表に見るように全体の器種構成の中で各種壺の占める割合は圧倒的であり、なかでも広口壺の傑出が目立つ。ここでは広口壺口縁部・頸部に凹線文を使用しているものは全くみられず、櫛描き文による加飾手法は前時期を受け継ぐ。また、これらの土器にはいずれの頸部にも突帯または凹線文など体部と口頸部を画するものがみられず、同じ加飾手法を持つ太頸広口壺との共存がみられる。しかし体部は算盤玉形を呈し、新相の要素を持つ。また、櫛描き文を持つ大型細頸壺・細頸壺・無頸壺はほぼ補完関係にあることが見てとれる。凹線文使用の水差しと大型細頸壺にもおおよその補完関係が見てとれる。

以上のような凹線文を持たない装飾壺と凹線文のみで飾られた水差しの共伴については、複数の主体部を有する周溝墓の場合、埋葬時期のズレ等の要素を考慮に入れる必要があるかもしれないが、東Ｉ地

区ＳＫ７での出土状況等を見る限り、時期を同じくして供されることもあるという前提の下に考えたい。今一度、田能遺跡の報告書に立ち返ってみると、出土土器の記述において興味深い部分につきあたる。「明らかに第Ⅲ様式に含まれるものと第Ⅳ様式に分けられるものとが『混在』していた。また・・・・・上下で明確には分離しがたく、櫛描き文と凹線文が『共存』していた。それらの各個体をいずれかの時代に振り分けることは実態に即しているとは言えない。櫛描き文は第Ⅱ様式段階から第Ⅳ様式段階まで、凹線文は第Ⅲ様式（新）段階と第Ⅳ様式まで使用されて、例えば『櫛描き文のみによって飾られる土器』であっても、形態及び施文状況から第Ⅲ様式（古）・(新）両時期に共通するものがあり、凹線文についても第Ⅲ様式（新）段階と第Ⅳ様式土器について同様のことが言える。・・・・・・・そこで前述した溝出土の土器について、ここでは第Ⅲ～第Ⅳ様式土器として取り扱い・・・・」(『　』は友久付加)

田能遺跡や周辺の口酒井遺跡・栄根遺跡においても、頸部にＢ種凹線文を持つ広口壺で口縁端部には凹線文を持たず波状文での加飾がなされている例を見ると、この時期まで口縁端部への櫛描き文による加飾手法が続いていると見ることに無理がないことが分かる。また広口壺の頸部への断面三角形突帯の貼り付けが一般的でない地域・器種においては当然のことながら、いわゆるＢ種凹線文への流れも通例どおりにはありえないものである。太頸広口壺にいたってはそもそも器形から頸部突帯を排除しているものである。よって、この田能での土器の有り様はその執筆者も言うように『混在』ではなく『共存』であるということである。そして『櫛描き文のみによって飾られる土器』はさらに前述の文例中の『第Ⅳ様式』まで使用され『共存』していたと言うことができる。

こういった『共存』はこの周辺地域では特異なことではなく、加茂遺跡の住居址や土坑などでも見られるものである。つまり、凹線文の採用が消極的な地域・器種において、凹線文の存在を基準にして時期比定をすることには限界があり、むしろ他の属性によっても判断していく必要がある。器形や共伴関係を丁寧に吟味して実態を明らかにしていかねばならない。こうしたズレは編年試案においても反映されているところであり、中期後半の古相においては「櫛描き文型器種と非櫛描き文型器種との間に時期差、地域差がある」ことが認められている。新相の凹線文盛行期においては「櫛描き文型器種においても近畿全域で凹線文が積極的に用いられる」との指摘がなされているが、なおここに至っても及ばなかったものも少なからずあったということである。そして、当遺跡において凹線文非採用の傾向が方形周溝墓出土の櫛描き文型器種に特に顕著であったといえる。

前述したように、凹線文系の大型細頸壺・水差しと共伴しながらも、広口壺・太頸広口壺の両者において凹線文施文土器は皆無である。凹線文施文土器と「共存」が確認される周辺他遺跡（当遺跡においても他の溝など）の状況とも異なる。方形周溝墓への供献土器ということで、たとえば凹線文系土器に対峙するものとして伝統への特別な意識・執着といったような何らかの別の要素が働いたのであろうか?

少なくとも当遺跡の方形周溝墓への供献土器においては、凹線文を持たない櫛描き文のみにより加飾された土器が、凹線文盛行期の土器と共伴して弥生時代中期後半の新相に至るまで積極的に存続していたという事実を提示しておきたい。方形周溝墓の供献土器を『より地域性の明確な形式』として捉えるか、『外来系』とするのか、いずれにせよ「特別な器種構成」のあり方の一端を示していると考えておきたい。

(友久)

参考文献

井藤暁子 1983「近畿」『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社

森田克行 1990「摂津地域」『弥生土器の様式と編年ー近畿編Ⅱー』木耳社

若林邦彦 2003「近畿地方の土器」　『考古資料大観』第１巻

篠宮正ほか 2007『弥生土器集成と編年ー播磨編ー』　大手前大学史学研究所

尼崎市教育委員会（福井英治ほか）1982「田能遺跡発掘調査報告書」尼崎市文化財調査報告 第15集

伊丹市教育委員会 1994「口酒井遺跡発掘調査報告　第22・25次調査」伊丹市埋蔵文化財調査報告書 第20集

尼崎市教育委員会 1967「田能遺跡発掘調査概報」尼崎市文化財調査報告 第５集

関西大学文学部 1967『摂津加茂』関西大学文学部考古学研究 第３冊

豊中市教育委員会 1972『勝部遺跡』

深沢芳樹 1996「墓に土器を備えるという行為について上･下」『京都府埋蔵文化財情報』第61・62号

若林邦彦 1996「近畿弥生中期における土器地域性構造と社会」『ＹＡＹ!』弥生土器を語る会20回到達記念論文集

近畿弥生の会 2007『墓制から弥生社会を考える』考古学リーダー10

第9回播磨考古学研究集会実行委員会 2008『弥生墓からみた播磨』資料集

第３節　おわりに

昭和50年に開始した原田西遺跡の発掘調査は昭和58年に大半の地区の調査を完了した後、平成15年の調査をもって終了した。

発掘成果としては発掘調査を通して、西摂平野の自然的環境が明らかとなり、この自然環境のなかでの水利用などの状況の一端を知ることができた。また、多数の方形周溝墓群の発見は、その規模、主体部木棺の残存という点で研究の上で貴重な調査例となった。

ただ、調査開始以来、長い年月が経過していたために、事実関係の整理に多くの時間が割かれ、限られた時間の中で、報告書の内容は基本的事実の報告に留めざるを得なかった。また、こうした時間的制約の中で遺物についてはやや未整理な状態での掲載となり、遺構との照合などやや難しい側面も生じているが、上記の状況の中での報告書刊行という点での理解をお願いしたい。

(森内)

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
1	10	須恵器	杯身	―	(3.7)	―	2003	南Ⅲ地区	ＳＸ05	底部は丸みを帯び緩やかに外方に開く体部　受け部は斜上方に延び、立ち上がり部は欠損	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
2	10	須恵器	すり鉢	(18.8)	(12.1)	―	2003	南Ⅲ地区	ＳＸ05	体部から口縁部は連続して僅かに内彎気味に開く　底部は剥離欠損	内面回転ナデの後ヨコナデ調整	
3	10	弥生土器	甕底部	―	(3.2)	(5.2)	2003	南Ⅲ地区	ＳＸ08	僅かに上げ底気味の底部　薄手	外面ヘラミガキ　内面ナデ	外面に煤付着
4	10	須恵器	杯身	(11.5)	(4.4)	―	2003	南Ⅲ地区	ＳＤ01	受け部は体部から直線的に続き僅かに斜め上方に延びる　立ち上がりは僅かに内傾し、口縁端部は内側に段を形成する	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
5	10	弥生土器	高杯	―	(6.5)	―	2003	南Ⅲ地区	ＳＲ01	朝顔状に大きく開く脚部　上端に充填粘土の剥離が見られる	風化顕著で調整不明	
6	10	弥生土器	高杯脚部	―	(2.1)	(14.0)	2003	南Ⅲ地区	ＳＲ01	大きく開く脚部　端部は丸く収める	風化顕著で調整不明	二次焼成による赤変
7	10	須恵器	杯蓋	(13.4)	(2.9)	―	2003	南Ⅲ地区	ＳＲ01	丸みを持つ天井部から屈曲して立ち上がる口縁部　端部は丸く収める	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	口縁部外面に僅かに自然融がかかる
8	10	須恵器	提瓶	―	(4.5)	―	2003	南Ⅲ地区	ＳＲ01	短い鉤状に退化した耳　先端部欠損	外面にカキ目	
9	10	須恵器	杯身	―	(2.6)	―	2003	南Ⅲ地区	鋤溝	丸みを帯びた体部から屈曲して外方に開く受け部　体部に続きほぼ垂直に立ち上がる	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
10	10	瓦質土器	羽釜	―	(2.0)	―	2003	南Ⅲ地区	鋤溝	ほぼ水平に大きく伸びる鍔部	ヨコナデ	
11	10	青磁	椀	―	(3.0)	(6.0)	2003	南Ⅲ地区	鋤溝	高台の付いた平らな底部から椀上に立ち上がる体部	内面に草花文を刻み、施釉　高台端部～内側は露胎	
12	10	弥生土器	広口壺	(20.5)	(4.5)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	外反して朝顔状に大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	風化顕著で調整不明	端部内面黒変　二次焼成によるものか？
13	10	弥生土器	広口壺	(23.2)	(1.2)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	外反して大きく開く口縁部　端部を下方に引き出す	風化顕著で調整不明	
14	10	弥生土器	底部	―	(3.0)	(6.0)	2003	南Ⅲ地区	包含層	厚手の平底から窄まり気味に立ち上がる体部	ナデ調整	
15	10	弥生土器	甕底部	―	(4.7)	5.0	2003	南Ⅲ地区	包含層	平底から外傾して立ち上がる体部	外面ヘラミガキ　内面ユビナデ	外面に煤付着　胎土に微細な雲母粒含む
16	10	須恵器	杯蓋	(12.6)	(3.1)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部　端部は僅かに段を持つ	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
17	10	須恵器	杯蓋	(14.0)	(5.2)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部　端部は内側に段を持つ	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
18	10	須恵器	杯蓋	(12.9)	(3.4)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部　端部は僅かに内側に段を持つ	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	外面に自然釉
19	10	須恵器	杯蓋	―	―	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	僅かに丸みを持つ天井部	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	ほぼ直角に交わる２本のヘラ描き沈線
20	10	須恵器	杯蓋	(11.5)	3.8	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを持つ天井部から僅かに屈曲する口縁部　端部は丸く収める	天井部にヘラ切り後回転ヘラケズリ	外面に薄く自然釉
21	10	須恵器	杯蓋	(10.3)	(3.0)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを持つ天井部から僅かに屈曲する口縁部　端部は丸く収める	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
22	10	須恵器	杯蓋	(13.2)	(3.4)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部　端部は丸く収める	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
23	10	須恵器	杯身	(9.7)	(3.4)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた体部　受け部は斜上方に延び、立ち上がり部は内傾する	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
24	10	須恵器	杯身	(10.0)	(3.7)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた体部　受け部は斜上方に延び、立ち上がり部は僅かに内傾する	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
25	10	須恵器	杯身	―	(3.3)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた体部　受け部はほぼ水平に延び、立ち上がり部は内傾する　端部を欠く	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
26	11	須恵器	杯身	(12.3)	(4.8)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた体部　受け部は斜上方に延び、立ち上がり部は内傾する　端部は内側に段をなす	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
27	11	須恵器	杯身	―	(4.3)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた体部　受け部は斜上方に延び、立ち上がり部は内傾する　端部を欠く	回転ナデ　底部にヘラケズリ	受け部に重ね焼痕　外面の一部に自然釉付着
28	11	須恵器	杯身	(12.2)	(4.0)	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた体部　受け部は斜上方に延び、立ち上がり部は内傾する　端部は丸く収める	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
29	11	須恵器	甕	―	―	―	2003	南Ⅲ地区	包含層	外反して開く口頸部小片	外面に櫛描波状文を施す	

口径・底径（　）は復元径
器高（　）は残存高《　》は復元高

出土土器　観察表（１）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
30	11	須恵器	甕	(12.5)	(3.6)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	外反して開く頸部から屈曲して立ち上がる口縁部	回転ナデ	
31	11	須恵器	平瓶	－	(3.6)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	外傾して立ち上がり、ほぼ直角に屈曲して窄まる体部	回転ナデ	肩部に自然釉付着
32	11	須恵器	鉢	(27.6)	(2.6)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	大きく開く体部から屈曲して立ち上がる口縁部　端部を丸く収める	回転ナデ	端部外面に重ね焼痕
33	11	須恵器	鉢	(25.3)	(3.2)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	大きく開く体部から屈曲して立ち上がる口縁部　端部を肥厚して端面を形成する	回転ナデ	端部外面に重ね焼痕
34	11	須恵器	鉢	(26.0)	(3.7)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	大きく開く体部から屈曲して立ち上がる口縁部　端部を丸く収める	回転ナデ	端部外面に重ね焼痕
35	11	瓦質土器	羽釜	(20.6)	(4.3)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	僅かに内椀して窄まる口縁部　鍔部は水平に短く延びる	口縁ヨコナデ　鍔部は強いヨコナデ	
36	11	瓦器	椀	－	(0.9)	(6.1)	2003	南Ⅲ地区	包含層	低い高台を持つ	風化顕著で調整不明	
37	11	土師器	小皿	(8.6)	(1.8)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸みを帯びた底部から内彎して立ち上がる体部	風化顕著で調整不明	外面二次焼成により赤変
38	11	瓦	丸瓦	－	(4.9)	－	2003	南Ⅲ地区	包含層	丸瓦見込み部	内面に布目痕	
39	46	弥生土器	広口壺	(15.5)	(4.1)	－	1979	中央Ⅱ－２地区	Ｙ１溝	外反して開く口縁部	ヨコナデ、端部内面ヘラミガキ　頸部外面ハケ目	
40	46	弥生土器	甕	(23.2)	《22.6》	－	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	平底から倒卵形に立ち上がる体部　口縁部は如意形に開く	口縁ヨコナデ　体部内面ナデ、外面ハケ目	外面に煤がしっかりと付着
41	46	弥生土器	甕	(35.0)	(13.1)	－	1979	中央Ⅱ－２地区	Ｙ１溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部にヘラ刻み目がめぐる　頸部内面と体部外面にハケ目　体部上端に５条のヘラ描き沈線文がめぐる	
42	46	弥生土器	甕	(26.0)	(3.0)	－	1979	中央Ⅱ－２地区	Ｙ１溝	如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部にヘラ刻み目がめぐる	外面に煤付着
43	46	弥生土器	甕	(19.4)	(7.2)	－	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁　端部を肥厚	口縁ヨコナデ　下端部にヘラ刻み目がめぐる　体部外面にハケ目　体部上端に４条のヘラ描沈線文がめぐる	外面に煤付着
44	46	弥生土器	広口壺	(23.0)	(8.1)	－	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	外反して立ち上がる口頸部　端部を肥厚して断面３角形状を形成する	口縁ヨコナデ　端面に櫛描波状文　頸部ナデ　櫛描直線文を2帯施す	
45	46	弥生土器	無頸壺	9.8	(9.3)	－	1979	中央Ⅳ区	Ｙ１溝	体部から内彎して口縁部が窄まる　端部は丸く収める	内外面ハケの後口縁直下より櫛描直線文が７帯狭い間隔で施される	小片のためか紐孔の痕跡確認できず
46	46	弥生土器	広口壺	(23.2)	(20.5)	－	1979	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	球状の体部から頸部が筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　体部上半に櫛描直線文が５帯施される	
47	46	弥生土器	広口壺	13.0	22.7	6.0	1979	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	球状の体部から頸部が筒状に立ち上がり、大きく外反してほぼ水平に開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　口縁端部と内面に櫛描波状文　頸部から体部上半に櫛描波状文と直線文が交互に５帯施される　下から２帯目の直線文下よりに３個１対の円形浮文が５方に貼り付けられる　体部外面中位はヘラミガキ　下半はヘラケズリ　内面にはハケ目	体部下半に焼成後穿孔がみられる
48	46	弥生土器	広口壺	13.2	22.9	5.9	1979	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	球状の体部から頸部が筒状に立ち上がり、外反・屈曲してほぼ水平に開く口縁部　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　内面に櫛描波状文　頸部から体部上半に櫛描直線文と波状文が交互に５帯施される　体部外面中位はヘラミガキ　下半はヘラケズリ　内面にはハケ目	体部下半に焼成後穿孔がみられる
49	46	弥生土器	広口壺	17.8	29.0	7.6	1979	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	算盤玉状に中位の張り出した体部から口頸部が屈曲、外反して大きく開く　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に斜格子文を施し、その上と口縁内面に円形浮文を狭い間隔で連続して貼り付ける　頸部外面ハケ目　体部上半に櫛描直線文と波状文が交互に９帯施される　最下段の直線文上に円形浮文が口縁部同様に連続して貼り付けられる　体部下半外面はヘラミガキ　内面にハケ目	底部中央に焼成後穿孔がみられる
50	47	弥生土器	鉢	25.0	(7.2)	－	1979	中央Ⅳ地区	Ｙ１溝	球形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端部下端に刻み目がめぐる　体部外面ハケ目、内面ナデ	
51	47	弥生土器	壺	－	(11.0)	－	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	算盤玉状に中位の張り出した体部　重心は下より	外面細かいヘラミガキ、内面指ナデ･板ナデ	
52	47	弥生土器	底部(有孔)	－	(3.8)	7.0	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	平底	外面にハケ目	中央に焼成後穿孔
53	47	弥生土器	底部(有孔)	－	(4.8)	6.8	1979	中央Ⅴ－２地区	Ｙ18溝	ケズリによりやや上げ底　中央に焼成前穿孔	外面にハケ目	
54	47	弥生土器	底部	－	(5.3)	6.8	1979	中央Ⅱ－２地区	Ｙ１溝	平底　底面を削る	外面にハケ目	
55	47	弥生土器	底部	－	(5.0)	6.3	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	平底	外面にハケ目、内面指ナデ	内面に煤付着
56	47	弥生土器	底部	－	(8.9)	7.8	1979	中央Ⅲ－２地区	Ｙ18溝	平底　内彎して立ち上がる体部	外面にハケ目、内面指ナデ　底部ケズリ	
57	47	弥生土器	底部	－	(4.0)	6.6	1979	中央Ⅴ－２地区	Ｙ18溝	平底　底面ケズリ	外面にハケ目後ヘラミガキ、内面ハケ目後指ナデ	
58	47	弥生土器	底部	－	(5.7)	6.0	1979	中央Ⅱ－２地区	Ｙ１溝	僅かに上げ底　底部周辺に指押さえ痕	外面にハケ目、内面不明	

出土土器　観察表（２）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
59	47	須恵器	杯蓋	－	(3.7)	－	1979	中央Ｖ－２地区	Ｓ１'溝	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部　端部欠損	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	ほぼ直角に交わる２本のヘラ描き沈線
60	47	須恵器	杯蓋	－	(3.4)	－	1979	中央Ｖ－２地区	Ｓ１'溝	丸みを持つ天井部	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
61	47	土師器	皿	(19.5)	2.1	(16.6)	1979	中央Ｖ－２地区	Ｓ１'溝	平底から内彎して立ち上がる浅い皿状を呈する	口縁ヨコナデ　端部内側に細い沈線が1条めぐる　底部ヘラ切り後ナデ	
62	47	弥生土器	広口壺	(26.0)	(4.4)	－	1980	南Ｉ地区 杭列第２群	ニ列　溝底	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁端部ヨコナデ　端面下端に櫛状工具による刻み目をめぐらせる　内外面ハケ目	外面に煤付着　金雲母片含む　河内系？
63	47	弥生土器	広口長頸壺	(25.4)	(15.2)	－	1980	南Ｉ地区 杭列第２群	ニ列　溝底	外反して開く長い口頸部	口縁端部ヨコナデ　外面に6条の櫛描直線文を施し文様帯間をヘラミガキする　内面ヘラミガキ	被熱により外面煤付着赤変　金雲母片含む　河内系？
64	47	弥生土器	甕	(19.0)	(10.5)	－	1980	南Ｉ地区杭列第２群	リ列	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目、内面ナデ	外面に煤状炭化物付着
65	47	弥生土器	鉢	14.0	7.3	5.5	1980	南Ｉ地区杭列第２群	ハ列 5Line	円板充填された平底から椀状に立ち上がる体部　口縁は内傾する	口縁ヨコナデ　端部外面に櫛描波状文がめぐる　　体部内外面はナデ	
66	47	弥生土器	甕	(12.6)	(8.3)	－	1980	南Ｉ地区 杭列第２群	ト列	ふくらみを持つ体部から屈曲して開く口縁　厚手で小型	口縁ヨコナデ　体部外面粗いヘラミガキ、内面ハケ目・ナデ一部粗いミガキ	外面にびっしりと煤状炭化物付着　河内系？
67	47	弥生土器	甕	(12.8)	(11.2)	－	1980	南Ｉ地区 杭列第２群	ハ列	ふくらみを持つ体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上下に肥厚	口縁ヨコナデ　端面に凹線文がめぐる　体部内外面はハケ目	
68	47	弥生土器	底部	－	(4.0)	9.5	1980	南Ｉ地区 杭列第２群	イ列杭間	円板充填された平底	外面板ナデ、内面ナデ	底面に木葉痕
69	47	弥生土器	底部	－	(10.2)	6.6	1981	東Ｉ地区	ＳＫ３	平底から斜め上方に立ち上がる体部	内外面ナデ	二次焼成により赤変
70	48	弥生土器	太頸広口壺	22.6	40.5	8.1	1981	東Ｉ地区	ＳＫ７	平底からやや下方に重心を持ちながら膨らむ体部　屈曲せずに緩やかに外反して開く口頸部が続く　口縁端部は上下に肥厚される	口縁ヨコナデ、端面に櫛描波状文、内面に扇形文が連続して施される　外面頸部から体部上半に櫛描直線文と波状文が交互に各５帯施される　頸部内面にハケ目	
71	48	弥生土器	水差し	6.8	(19.5)	6.1	1981	東Ｉ地区	ＳＫ７	算盤玉状に中位の張り出した体部から口頸部が屈曲して筒状に立ち上がる　肩部に把手を貼り付ける	口縁外面に２条の凹線文がめぐる　体部下半外面にヘラミガキ	
72	48	弥生土器	壺	－	(15.7)	5.6	1981	東Ｉ地区	ＳＫ７	算盤玉状に中位の張り出した体部から筒状に立ち上がる口頸部が続く	上端に小円孔の痕跡　体部上半外面にヘラミガキ	
73	48	弥生土器	壺	－	(7.4)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ８	筒状に外反して立ち上がる口頸部	頸部外面に4条のヘラ描き沈線文、以下はハケ目　内面はナデ	
74	48	弥生土器	壺	－	(5.8)	6.5	1981	東Ｉ地区	ＳＫ８	平底から内彎して立ち上がる体部　底部はヘラケズリによって整えられる	外面ヘラミガキ、内面ナデ	
75	48	弥生土器	底部	－	(4.7)	(11.2)	1981	東Ｉ地区	ＳＫ９	円板充填され、ドーナツ状上げ底	外面ハケ目　内面不明	
76	48	弥生土器	壺	－	(28.7)	(8.0)	1981	東Ｉ地区	ＳＫ10	平底からやや下方に重心を持ちながら膨らむ体部　Ｂ種凹線で画された口頸部が続く	体部上半に櫛描波状文と直線文が交互に各３帯施される　体部外面中位はヘラミガキ下半はヘラケズリ　内面上半ナデ下半ハケ目	
77	48	弥生土器	壺	－	(19.1)	9.7	1981	東Ｉ地区	ＳＫ11	大きく膨らむ体部　ドーナツ状上底	体部内面一部にハケ目	
78	48	弥生土器	甕	15.6	27.5	3.7	1981	東Ｉ地区	ＳＫ11	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　底部はドーナツ状上げ底	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ目、内面一部にハケ目	
79	49	弥生土器	広口壺	(18.4)	(9.4)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	体部から外反して開く口縁部　端部は丸く収める	頸部に段を持つ　頸部内面にヘラミガキ	
80	49	弥生土器	広口壺	－	(5.4)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	体部から外反して開く口縁部が続く	頸部に削り出し突帯を持つ　頸部内面にヘラミガキ	
81	49	弥生土器	壺	－	(4.4)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	内傾する体部上半	削り出し突帯上に８条のヘラ描き沈線文がめぐる	
82	49	弥生土器	甕	－	(3.4)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	直立する体部上半からほぼ水平に屈曲して開く口縁	口縁ヨコナデ　端部にヘラで刻み目をめぐらせる　肩部外面に5条のヘラ描き沈線文がめぐる	口縁部に煤付着
83	49	弥生土器	甕	－	(18.9)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁　端部を欠く	肩部外面に４条のヘラ描き沈線文　以下にハケ目、内面不明	外面に煤付着　二次焼成を受ける
84	49	弥生土器	鉢	(37.0)	(14.0)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁内面にハケ目　肩部外面に2条のヘラ描き沈線文　以下にハケ目、内面ナデ	
85	49	弥生土器	甕	－	(4.0)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	端部外面に粘土紐を付加して逆L字状に屈曲して開く口縁を形成する	粘土紐上に指押さえ痕がめぐる	
86	49	弥生土器	甕	(19.0)	(6.5)	－	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	端部外面に粘土紐を付加して逆L字状に屈曲して開く口縁を形成する	口縁ヨコナデ　肩部外面に３条のヘラ描き沈線文	外面に煤付着
87	49	弥生土器	底部	－	(2.7)	(7.0)	1981	東Ｉ地区	ＳＫ14	平底	風化顕著で調整不明	

出土土器　観察表（３）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
88	49	弥生土器	底部	－	(7.0)	(7.4)	1981	東Ⅰ地区	ＳＫ14	平底から内彎して立上がる体部	風化顕著で調整不明	83と胎土類似
89	49	弥生土器	壺	－	(17.0)		1981	東Ⅰ地区	ＳＫ15	下方に重心を持ちながら膨らむ体部　緩やかに外反して立ち上がる口頸部が続く	頸部と肩部に削り出し突帯がめぐり、それぞれ２条・４条のヘラ描き沈線文が施される	
90	49	弥生土器	壺	－	(18.5)	7.4	1981	東Ⅰ地区	ＳＫ15	算盤玉状に中位の張り出した体部　円板充填され、ドーナツ状底	外面ヘラミガキ	
91	49	弥生土器	底部	－	(4.9)	6.9	1981	東Ⅰ地区	ＳＫ15	平底から内彎して立ち上がる体部	風化顕著で調整不明	
92	49	弥生土器	底部	－	(5.2)	5.3	1981	東Ⅰ地区	ＳＫ15	円板充填され、ドーナツ状底	風化顕著で調整不明	
93	49	弥生土器	蓋	(20.0)	9.5	頂6.6	1981	東Ⅰ地区	ＳＫ15	指成形され僅かに窪む頂部から外反気味に大きく開く笠形を呈する	頂部周縁に強い指押え痕 内外面粗いヘラミガキ	口縁端部内面に輪状に煤付着
94	49	弥生土器	広口壺	(15.0)	(23.5)	6.8	1983	東Ⅰ地区	ＳＫ25	下方に重心を持ちながら膨らむ体部から緩やかに立ち上がり外反して開く口縁部が続く	頸部に削り出し突帯様のふくらみが残る 外面ヘラミガキ　内面指ナデ	外面体部下半に少し煤付着
95	49	弥生土器	甕	(23.6)	22.8	(6.0)	1983	東Ⅰ地区	ＳＫ27	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　肩部に3条のヘラ描き沈線文　以下ハケ目　内面ナデ	外面に煤付着
96	49	弥生土器	広口壺	－	(24.2)	(7.2)	1983	東Ⅰ地区	ＳＫ30	算盤玉状に中位の張り出した体部から緩やかに外反して開く口頸部が続く	肩部に数条のヘラ描き沈線文様の痕跡が微かにあるが定かではない	
97	50	弥生土器	広口壺	16.1	30.4	6.5	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１東溝	やや上位に重心を持つ体部から屈曲して筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ、端面に櫛描波状文とその上に円形浮文２対、内面に扇形文が連続して施される　外面体部上半に櫛描直線文が４条と最下段に波状文が施される　器表面の風化顕著で頸部下端の突帯の有無は不明	
98	50	弥生土器	広口壺	(24.0)	(3.3)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１北溝	筒状の頸部から大きく外反して開く口縁部　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　頸部外面粗いハケ目	
99	50	弥生土器	太頸広口壺	21.6	(31.2)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１北溝	下方に重心を持ちながら膨らむ体部から緩やかに立ち上がり外反して開く口縁部が続く　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ、端面に櫛描波状文の痕跡が残る　外面頸腹部に櫛描直線文６帯と波状文１帯が施される	
100	50	弥生土器	短頸壺	(9.4)	(7.1)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１東溝	内彎気味に立ち上がる口縁部	口縁端部外面に1条の凹線文がめぐる	
101	50	弥生土器	水差形土器	7.8	21.2	5.0	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１東溝	算盤玉状に中位の張り出した体部から口頸部が屈曲して筒状に立ち上がる　肩部に半環状把手を体部に挿入して付加する　把手側の口縁部には抉りが入る	口縁ヨコナデ　外面に４条の凹線文がめぐる　体部外面上半にハケ目、下半にヘラミガキが見られる　内面ハケ目	
102	50	弥生土器	無頸壺	13.2	(11.9)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１北溝	椀状の体部から内彎・屈曲して大きく内傾する口縁　連続成形による筒状の脚部が続き、円板充填される	口縁ヨコナデ　外面に４条の凹線文を巡らし、突部にヘラ状工具で刻み目を施す　上３条は１度に刻む　さらに凹線文中最上段に２個１対の紐孔をおそらく相対位置に穿ち、１段あけて６個１対の円形浮文を５方に貼り付ける　杯部外面ハケ目　脚上端に断面三角形突帯を２本貼り付け下に刺突列点文を施す	
103	50	弥生土器	甕	(16.8)	(17.4)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１南溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部内外面ハケ目	外面に煤付着
104	50	弥生土器	甕底部	－	(10.1)	5.4	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１東溝	平底から内彎して立ち上がる体部	体部内外面ハケ目	被熱による剥離顕著
105	50	弥生土器	甕	27.4	39.8	9.0	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ１南溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面上半ハケ目、下半ヘラケズリ　内面ハケ目	外面下半に煤付着
106	51	弥生土器	太頸広口壺	－	(29.1)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ２西溝	算盤玉状に中位の大きく張り出した体部から緩やかに外反して開く口頸部が続く	体部上半に櫛描波状文と直線文が交互に各４帯施される　体部下半外面ヘラミガキ 内面はナデ？	体部下半に被熱、煤付着
107	51	弥生土器	大型細頸壺	11.0	38.8	7.3	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ２西溝	算盤玉状に中位の張り出した体部から口頸部が屈曲して筒状に立ち上がる　口縁は内彎し、端部は肥厚される	口頸部外面に13条の凹線文、下端に突帯状に画した部分にヘラ刻み目をめぐらせる 体部中位に櫛描直線文２帯と波状文３帯を交互に施す　下半はハケ目後ヘラミガキ 内面ハケ目	
108	51	弥生土器	甕	17.2	《24.0》	5.4	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ２西溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目　内面ナデ	外面に煤付着
109	51	弥生土器	甕	(14.8)	《23.5》	5.0	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ２西溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　体部内外面一部にハケ目	外面に煤付着
110	51	弥生土器	高杯	15.5	18.5	12.8	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ２東溝	直線状に開く杯部から突帯で画した口縁部が水平に延び、さらに大きく垂下する　連続成形された脚部はラッパ状に外反して開き端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ、内面に断面矩形の突帯を貼り付ける　垂下した外面上下端に浅い凹線文　杯部内外面はヘラミガキ　脚部端はヨコナデ　脚柱部内面上端に絞り目、以下にヘラケズリ　下端はヨコナデ	

出土土器　観察表（４）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
111	51	弥生土器	広口壺	(17.2)	(24.6)	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＸ５	球形の体部から筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部端部を下方に垂下	体部上半に櫛描直線文５帯、波状文１帯施される　体部内面にハケ目　風化顕著で調整不明	
112	51	弥生土器	広口壺	(23.1)	39.3	7.2	1983	東Ⅱ地区	ＳＸ５	球形の体部から筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部端部を下方に垂下　やや上げ底	頸部から体部上半ナデ、櫛描波状文６帯施される　口縁～体部内面にハケ目　下半は後ナデ	
113	52	弥生土器	広口壺	16.0	28.9	6.8	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	算盤玉状に中位の張り出した体部から筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を下方に垂下　やや上げ底	風化顕著で調整不明　口縁内面に櫛描波状文の痕跡	底部中央に焼成後穿孔？　体部下半に被熱・赤変が認められる
114	52	弥生土器	広口壺	16.6	28.4	5.3	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	算盤玉状に中位の張り出した体部から筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚	風化顕著で調整不明	底部中央に焼成後穿孔？　体部下半に被熱・赤変が認められる
115	52	弥生土器	広口壺	(26.0)	(1.5)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	大きく開く口縁端部を上下に肥厚	風化顕著で調整不明	
116	52	弥生土器	甕	(30.8)	(6.2)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３内 ＳＫ17	椀状の体部から如意形に外反する口縁部	内面ナデ　外面不明	
117	52	弥生土器	甕	(25.0)	《35.7》	8.1	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上下に肥厚	口縁ヨコナデ　体部外面にハケ目後ヘラミガキ	
118	52	弥生土器	底部	－	(4.8)	(8.6)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	平底	内面ナデ	
119	52	弥生土器	底部	－	(1.9)	4.5	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	平底　指成形による	ナデ　外面に指頭痕	
120	52	弥生土器	蓋	－	(4.6)	頂6.8	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ３西溝	皿状に窪んだ頂部から大きく開く	頂部ナデ	
121	52	弥生土器	底部	－	(3.0)	10.35	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ７南溝	やや上げ底	風化顕著で調整不明	
122	52	弥生土器	底部	－	(4.85)	(7.4)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ７南溝	平底	風化顕著で調整不明	
123	52	弥生土器	甕	(32.6)	(6.0)	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＸ10西溝	筒状の体部から如意形に開く口縁部	口縁ヨコナデ　端部に刻み目がめぐる　肩部にヘラ描き沈線文が平行に３条、その下に山形に施される	
124	52	弥生土器	底部	－	(8.9)	6.2	1983	東Ⅱ地区	ＳＸ11	円板充填によるドーナツ状底	外面ヘラミガキ？内面ナデ	
125	53	弥生土器	鉢	(13.4)	8.2	5.4	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４内 ＳＤ３	椀状の体部から如意形に開く口縁　ドーナツ状底	外面下半にヘラミガキが残る　底部成形時のケズリにより角張る	
126	53	弥生土器	底部	－	(4.2)	(6.8)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４内 ＳＤ３	大きく開いて立ち上がる体部　ドーナツ状底	外面ナデ	
127	53	弥生土器	甕	(24.4)	26.7	8.0	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４内 ＳＤ３	ほぼ直角に屈曲して水平に張り出す口縁部を逆L字状に付加する	口縁部上面に３条、肩部に８条のヘラ描き沈線文がめぐる　内外面にハケ目	体部外面に煤付着　底部中央に焼成後穿孔
128	53	弥生土器	広口壺	－	(17.5)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４西溝	球形の体部から筒状に立ち上がる口頸部	風化顕著で調整不明　頸部外面にナデの痕跡　内面に指頭痕	
129	53	弥生土器	広口壺	－	《35.8》	5.6	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４西溝	球形の体部から筒状に立ち上がる口頸部	風化顕著で調整不明　頸部外面ナデ	128と胎土近似
130	53	弥生土器	短頸壺	(9.6)	(28.5)	5.0	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４西溝	球形の体部から筒状に立ち上がる口頸部　口縁端部はあまり開かない	肩部外面にハケ目　底部下端にヘラミガキ	被熱による赤変
131	53	弥生土器	細頸壺	(7.2)	23.1	5.7	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４東溝	算盤玉状に中位の張り出した体部が細くすぼまり筒状に長く立ち上がる口縁部　ドーナツ状底	体部上半に櫛描直線文を３帯施し上下の２帯に円形浮文を連続して貼り付ける　内面頸部に絞り目　体部上半に指頭痕	
132	53	弥生土器	水差し	(11.8)	(5.2)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４南溝	筒状に立ち上がる口縁部　端部僅かに内彎する	内外面ヨコナデ　外面に3条の凹線文を施す	
133	53	弥生土器	甕	15.3	26.2	(5.7)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４西溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁部　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面上半ハケ目、中位ヘラミガキ、下半ヘラケズリ	被熱し外面に煤付着
134	53	弥生土器	底部	－	(3.6)	(12.8)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４南溝	円板充填によるドーナツ状底	外面ナデ	
135	53	弥生土器	底部	－	(2.4)	(6.4)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４東溝	円板充填によるドーナツ状底	風化顕著で調整不明	底面被熱
136	53	弥生土器	底部	－	(3.8)	(8.4)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４南溝	円板充填によるドーナツ状底	内外面ナデ	
137	53	弥生土器	底部	－	(2.9)	(5.6)	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４南溝	平底	外面ナデ	
138	54	弥生土器	広口壺	12.0	18.9	6.2	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	球形の体部から筒状に立ち上がり、大きく外反して水平に開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面と内面に櫛描波状文を施す　頸部から体部上半に櫛描波状文３帯、直線文１帯施し、３個１対の円形浮文を４方に貼り付ける　体部下半にヘラケズリがみられる	体部下半に焼成後穿孔がみられる
139	54	弥生土器	広口壺	(16.6)	(30.2)	7.2	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	球形の体部から屈曲して筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　内面に扇形文、端面に櫛描波状文を施す　体部上半に櫛描直線文５帯と最下段に波状文を施す　体部下半外面にヘラミガキ　内面にハケ目が見られる	
140	54	弥生土器	広口壺	(12.9)	(8.5)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６西溝	球形の体部から筒状に立ち上がり、外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	風化顕著で調整不明	

出土土器　観察表（５）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
141	54	弥生土器	広口壺	12.6	26.0	5.6	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	倒卵形の体部から屈曲して開く口縁部　端部を肥厚する　やや上げ底	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文がめぐる　体部下半外面にケズリ　下端に指頭痕	
142	54	弥生土器	広口長頸壺	21.4	(29.5)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６南溝	球形の体部から屈曲して筒状に長く立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文がめぐる　頸部以下外面に粗いハケ目、内面にハケ目頸部下端に指頭痕　以下ナデ？	
143	54	弥生土器	大型細頸壺	11.5	(21.1)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６西溝	球形の体部から屈曲して筒状に長く立ち上がり、内彎してすぼまる口縁部　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　外面と頸部下端に凹線文をそれぞれ５条・３条めぐらし、頸部に櫛描直線文３帯、体部上半に波状文と直線文を各３帯交互に施したものと思われる	
144	54	弥生土器	細頸壺	(4.7)	20.1	5.6	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６西溝	算盤玉状に中位の屈曲した体部が細くすぼまり筒状に長く立ち上がる口縁部	口縁ナデ　外面頸部下半から体部上半に櫛描直線文・廉状文を各２帯交互に、最下段に扇形文を施す　内面体部上半に指頭痕、下半ハケ目が残る	精良な粘土
145	54	弥生土器	底部	－	(6.3)	7.8	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６西溝	平底　大きく開く体部が続く	風化顕著で調整不明	
146	54	弥生土器	底部	－	(6.4)	6.0	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６西溝	平底　大きく開く体部が続く	風化顕著で調整不明	
147	54	弥生土器	甕	－	(4.35)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ６西溝	如意形に開く口縁	風化顕著で調整不明	
148	55	弥生土器	甕	－	(8.1)	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＤ５	如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　口縁直下に刻み目突帯が１条貼り付けられる	
149	55	弥生土器	甕	－	(5.9)	－		東地区	ＳＤ５	如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　肩部に刻み目突帯が１条貼り付けられる	
150	55	弥生土器	甕	－	(4.7)	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＤ５	如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目　肩部にヘラ描き沈線文が３条めぐる	
152	55	弥生土器	広口壺	(21.1)	29.5	7.8	1983	東Ⅱ地区	ＳＤ10	算盤玉状に中位の張り出した体部から大きく外反して開く口縁部	頸部に６帯、体部中位に２帯の刻み目突帯を貼り付け、中位の突帯間に４条のヘラ描き沈線文を施す　体部外面ハケ後ナデ　中位内面に指頭痕	
153	55	弥生土器	広口壺	－	(16.5)	－	1981	東Ⅰ地区	ＪＴ溝北肩	球形の体部から筒状に立ち上がり、外反して開く口縁部が続く	外面ヘラミガキ　頸部に９条のヘラ描き沈線文　内面ナデ	割れ口も含めて煤付着
154	55	弥生土器	壺(底部)	－	(23.3)	11.4	1981	東Ⅰ地区	ＪＴ溝北肩	平底から大きく開き立ち上がる体部	外面ハケ目　内面上半ヘラミガキ、工具擦痕　下半ナデ	内面黒化
155	55	弥生土器	甕	(24.6)	21.2	7.0	1981	東Ⅰ地区	ＪＴ溝北肩	平底から内彎して立ち上がり、如意形の口縁部を付加する	口縁ヨコナデ　端部に刻み目　肩部にヘラ描き沈線文が２条めぐる　体部外面ハケ目後ナデ、内面指ナデ	被熱し外面煤付着　内面下半に輪状焦げ付き　底部穿孔？
156	55	弥生土器	甕	(18.2)	19.4	6.0	1981	東Ⅰ地区	ＪＴ溝北肩	倒卵形の体部から如意形に開く口縁部	口縁ヨコナデ　端部に刻み目　肩部にヘラ描き沈線文が４条めぐる体部外面にハケ目	外面煤付着　底部に焼成後の打ち欠き(未貫通)
157	55	弥生土器	甕	(18.4)	(14.0)	－	1981	東Ⅰ地区	ＪＴ溝北肩	口縁端部外面に粘土紐を付加して逆L字状の口縁を形成する	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目、一部に工具圧痕　内面ナデ	体部外面煤付着
158	56	弥生土器	甕	(30.0)	(8.3)	－	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目　肩部にヘラ描き沈線文が4条めぐる　体部外面にハケ目　内面にナデ	外面二次焼成により赤変
159	56	弥生土器	甕	(35.4)	(12.75)	－	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目　肩部にヘラ描き沈線文が5条めぐる　体部内外面にハケ目	外面にわずかに煤付着
160	56	弥生土器	甕	(21.8)	(5.5)	－	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝北肩	筒状の体部から如意形に開く口縁部	口縁ヨコナデ　端部に細かい刻み目　肩部にヘラ描き沈線文が12条めぐる　体部内面にナデ	
161	56	弥生土器	甕	(14.2)	(6.25)	－	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ	外面に煤付着
162	56	弥生土器	鉢	20.5	13.7	8.0	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝	椀状の体部口縁はほぼ直立する端部をわずかに肥厚する	口縁外面に多条のヘラ描き沈線文をめぐらし、その間に竹管文による連続刺突が2帯全周の約1/4に施される　体部下半はハケ目後ヘラミガキ　内面にヘラミガキの痕跡	底部中央に焼成後に穿とうとした未貫通の孔がある
163	56	弥生土器	ミニチュア壺	(6.2)	7.1	(4.5)	1983	東Ⅱ地区		しっかりとした平底　球形の体部から外反して開く口縁部	体部内面ナデ	
164	56	弥生土器	甕	(25.6)	(10.2)	－	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝	ふくらみを持つ体部からくの字状に屈曲し外反して開く口縁端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文がめぐる　頸部内外面に指頭痕　体部内外面にハケ目	外面に煤付着
165	56	弥生土器	水差し	－	(19.8)	4.7	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ２溝	長胴の甑形体部　口縁を欠く	内外面ハケ目　外面上半・底部にナデ	外面下半に煤付着　摂津形水差し
166	56	弥生土器	広口壺	12.7	(12.5)	－	1981	中央Ⅶ地区	Ｙ１溝	球形の体部から屈曲、外反して開く口縁部が続く　端部を上下に肥厚する　端部近くに小円孔を穿つ（残存１個）	口縁ヨコナデ　肥厚した端面に４条の凹線文、内面に扇形文を施す　体部外面にはハケ目　櫛描直線文と波状文を各２帯交互に施す　内面肩部にハケ目、以下はナデ	口縁外面に煤付着
167	56	弥生土器	鉢	12.7	9.2	3.9	1981	中央Ⅶ地区	Ｙ１溝	椀状の体部から屈曲して外方へ開く口縁	外面ナデ　内面ハケ目	
168	57	弥生土器	二重口縁壺	－	(11.6)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部から屈曲・外反して大きく開く口縁部　端部はさらに屈曲して立ち上がる	口縁立ち上がり部内外面に櫛描波状文　頸部外面ヘラミガキ、以下も同様と思われる　内面肩部に指頭痕・ハケ目が見られる	
169	57	弥生土器	細頸壺	9.5	17.0	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	上下に圧縮した扁球形の体部に外方へ開く細口の口縁が付加される	口縁ヘラミガキ　口縁下端に突帯が貼り付けられる　体部外面上半板ナデ　下半ケズリ後板ナデ　内面ナデ？	

出土土器　観察表（６）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
170	57	弥生土器	壺	－	(10.0)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球形の体部　厚手で小型	外面指成形後板ナデ　内面指ナデ	
171	57	弥生土器	小型丸底壺	9.2	6.4	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球形の体部に外傾して開く口縁部	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目　内面ケズリ	
172	57	弥生土器	甕	(15.7)	6.2	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目　内面ヘラケズリ	外面に煤付着
173	57	弥生土器	甕	(15.6)	(17.8)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面細かいタタキ　内面ヘラケズリ	外面に煤付着
174	57	弥生土器	甕	(16.6)	22.9	－	1981	東Ⅰ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面細かいタタキ後ハケ目　内面ヘラケズリ	
175	57	弥生土器	甕	(17.2)	20.1	－	1981	東Ⅰ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面細かいタタキ後ハケ目　内面ヘラケズリ底部指頭痕	外面に煤付着
176	57	弥生土器	甕	15.6	22.2	－	1981	東Ⅰ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面細かいハケ目　内面ヘラケズリ底部指頭痕	内面下半に焦げ付き　外面下半に煤付着　金雲母片混入
177	57	弥生土器	甕	(15.0)	(12.2)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ後ハケ目　内面ヘラケズリ	外面に煤付着
178	57	弥生土器	甕	13.1	(14.7)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ後上下ヘラケズリ　内面ナデ	内面下半に焦げ付き　外面に煤付着
179	57	弥生土器	甕	(15.8)	(7.4)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部は受口状に立上がる	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ目　内面ナデ	
180	57	弥生土器	台付甕	9.5	15.7	8.5	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部は受口状に立上がる　内彎して踏張る脚が付く	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目　内面ヘラケズリ　脚部外面ハケ目、内面ナデ	
181	57	弥生土器	高杯	(14.2)	(10.3)	(10.9)	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	杯部口縁は外反して開く　脚部は中実で笠状に開く	杯部内外面、脚部外面はヘラミガキ　脚部内面はナデ、真中に放射状にヘラ圧痕がみられる	
182	57	弥生土器	高杯	(17.4)	(5.7)	－	1983	東Ⅱ地区	Ｈ１溝	杯部は屈曲して外反する口縁部端部を上方に引き上げる	口縁端部ヨコナデ　杯部内外面はヘラミガキにより丁寧に仕上げられる	
183	57	弥生土器	高杯(脚部)	－	(8.1)	13.8	1981	東Ⅰ地区	Ｈ１溝	円錐状に開く脚部　端部はやや下方に尖る	外面ヘラミガキ　内面上端に絞り目	
184	57	弥生土器	製塩土器		(3.6)	(3.2)	1981	東Ⅰ地区	Ｈ１溝	椀状の体部に小さな脚が付く	指成形・ナデ	
185	57	弥生土器	高杯(脚部)	－	(8.8)	12.1	1983	東Ⅱ地区	ＳＫ22	ラッパ状に外反して開く脚部上端にヘソ状粘土充填	外面ナデ　内面上半絞り目、下半ナデ	
186	58	土師器	広口壺	14.3	(6.0)	－	1983	東Ⅱ地区		筒状の頸部から大きく開く口縁端部を大きく垂下する	口縁ヨコナデ　垂下した端面に4条の凹線文を施し、竹管文押捺円形浮文を等間隔に貼り付ける　頸部外面ヘラミガキ、内面ハケ目　肩部に櫛描直線文が残る	
187	58	土師器	広口壺	－	(23.8)	5.2	1983	東Ⅱ地区		球形の体部　底部は突出する平底であるが不安定　頸部は筒状に立ち上がる	外面ヘラミガキ　内面上半ナデ、下半ハケ目	
188	58	土師器	広口壺	(16.0)	(9.4)	－	1983	東Ⅱ地区		球形の体部から屈曲して外方に立ち上がる口縁部	風化顕著で調整不明	
189	58	土師器	小型丸底壺	8.2	8.3	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＫ20	球形の体部から内彎気味に立ち上がる口縁	風化顕著で調整不明	
190	58	土師器	小型丸底壺	－	(5.8)	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＫ20	球形の体部から内彎気味に立ち上がる口縁　端部を欠く	風化顕著で調整不明	
191	58	土師器	小型丸底壺	－	(6.1)	－	1983	東Ⅱ地区		体部は上下に圧縮され角張る口縁の立ち上がり大きい　端部を欠く	体部内面に指頭痕　風化顕著で調整不明	
192	58	土師器	小型丸底壺	－	(5.2)	－	1983	東Ⅱ地区		球形の体部　口縁部を欠く	風化顕著で調整不明	
193	58	土師器	小型丸底壺	－	(6.2)	－	1983	東Ⅱ地区		体部は上下に圧縮された扁球形口縁は外傾し、端部を欠く	風化顕著で調整不明	
194	58	須恵器	杯身	(13.0)	4.2	－	1981	中央Ⅵ地区	Ｙ１溝	丸みを帯びた体部　受け部はほぼ水平に延び、立ち上がり部は内傾する	内面に仕上げナデ　底部回転ヘラケズリ	
195	58	須恵器	杯身	12.3	4.5	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＫ26	丸みを帯びた体部　受け部はほぼ水平に延び、立ち上がり部はほぼ直立する	内面に仕上げナデ　底部回転ヘラケズリ	
196	58	須恵器	杯身	(13.4)	3.7	－	1983	東Ⅱ地区	ＳＫ26	丸みを帯びた体部　受け部はほぼ水平に延び、立ち上がり部は内傾する	内面に仕上げナデ　底部回転ヘラケズリ	
197	58	黒色土器	椀	14.5	5.5	7.8	1983	東Ⅱ地区	Ｍ３溝	内彎して立ち上がる口縁端部は僅かに外反する　高台は低く断面三角形	内面ヘラミガキ、暗文わずかに残る　外面指押さえ痕顕著	
198	58	黒色土器	椀	15.4	6.0	8.3	1983	東Ⅱ地区	Ｍ３溝	内彎して立ち上がる口縁端部は内側に段を持つ　高台は低く断面三角形	内面ヘラミガキ、暗文残る　外面指押さえ痕顕著	高台内に「井」状にヘラ記号

出土土器　観察表（７）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
199	58	黒色土器	椀	17.5	7.1	9.1	1983	東Ⅱ地区	Ｍ３溝	内彎して立ち上がる口縁端部は内側に段を持つ　高台は低く断面三角形	内面ヘラミガキ、暗文わずかに残る　外面指押さえ痕顕著	
200	60	縄文土器	深鉢	－	－	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝	ほぼ直立する口縁端部を折り返し肥厚する	肥厚した端面に爪形の浅い刻み目がめぐる	
201	60	縄文土器	深鉢	－	－	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４東溝	屈曲して内傾する口縁部	口縁端部直下に突帯を貼り付ける	
202	60	縄文土器	深鉢	－	－	－	1981	東Ⅰ地区	ＳＸ４東溝	ほぼ直立する体部	刻み目突帯を貼り付ける	暗茶褐色の胎土
203	60	弥生土器	広口壺	(20.6)	(7.6)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝北側肩部	外反して開く口縁部	口縁端部ヨコナデ　口縁中ほどに小円孔を穿つ　頸部に３条のヘラ描き沈線文がめぐる　外面はヘラミガキ	
204	60	弥生土器	広口壺	23.5	40.7	11.2	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	算盤玉状に中位が張り出し重心が下よりの体部から大きく外反して開く口縁部	口縁ヨコナデ　頸部に４条、体部最大径部に１条の刻み目突帯が貼り付けめぐらされる　頸部にナデ　体部上半にヘラミガキ　他は不明	
205	60	弥生土器	広口壺	(19.0)	(12.4)	－	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	外反して開く口縁部	口縁端部ヨコナデ　内面ナデ　外面ハケ目　肩部ナデ消し　頸部に段を持ちその上に１条のヘラ描き沈線文がめぐる	
206	60	弥生土器	広口壺	(15.6)	(5.9)	－	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	外反して開く口縁部	口縁端部～内面ヨコナデ　外面ハケ目、中位にヨコナデ痕	
207	60	弥生土器	広口壺	(16.6)	(18.3)	－	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	球形の体部から外反して開く口縁　端部外方へ引き出す	口縁ヨコナデ　頸部ヨコナデ　肩部にヘラミガキの痕跡　内面ナデ	胎土粗い砂粒含む　被熱により赤変
208	60	弥生土器	甕	(27.8)	(13.6)	－	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目をめぐらせる　体部内面ナデ	
209	60	弥生土器	甕	(30.3)	《24.5》	7.2	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁　平底	口縁ヨコナデ　端部に刻み目をめぐらせる　肩部に4条のヘラ描き沈線文　体部内面ナデ	
210	60	弥生土器	甕	(26.6)	(17.4)	－	1975	南Ⅰ地区（確認調査）	杭列第２群	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目をめぐらせる　体部内面ナデ　外面ハケ目	
211	61	弥生土器	甕	24.2	(8.5)	－	1975	中央地区（確認調査）	Ｙ18溝（植遺層）	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目をめぐらせる　肩部に4条のヘラ描き沈線文の痕跡　体部内面ナデ　外面ハケ目？	
212	61	弥生土器	甕	(18.8)	(12.2)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ５溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　肩部に4条のヘラ描き沈線文　体部ナデ	
213	61	弥生土器	甕	－	(6.1)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝溝底	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁　端部を欠く	口縁ヨコナデ　肩部に4条のヘラ描き沈線文　体部内面ナデ	
214	61	弥生土器	鉢	－	(7.6)	－	1976	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁　口縁下に瘤状把手が付く	口縁ヨコナデ　把手の高さに１条のヘラ描き沈線文を施し、以下ハケ目　体部内面ナデ	
215	61	弥生土器	鉢	－	(8.1)	－	1976	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	ふくらみを持つ体部から外傾して開く口縁　口縁下に瘤状把手が付く	口縁ヨコナデ　把手の高さに１条のヘラ描き沈線文を施し、以下ハケ目　体部内面ナデ	
216	61	弥生土器	甕	18.4	(7.2)	－	1975	北地区（確認調査）	ＦＧ15・16溝底砂層上面	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に一部刻み目が残る　肩部に４条のヘラ描き沈線文、以下ハケ目　体部内面ナデ	
217	61	弥生土器	甕	(22.8)	(14.1)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ５溝	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	口縁ヨコナデ　端部に刻み目をめぐらせる　体部外面ハケ目、肩部に８条のヘラ描き沈線文　体部内面ナデ	外面に煤付着
218	61	弥生土器	鉢	(30.0)	(6.9)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ５溝	口縁は外反して開き端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　口縁下に１条のヘラ描き沈線文を施す。体部内外面ハケ目	
219	61	弥生土器	鉢	26.4	(10.0)	－	1975	東Ⅰ地区（確認調査）	Ⅰ－12・13（溝２）	内彎気味に立ち上がる口縁　口縁下に耳状把手が付く	把手の上に２個１対の小円孔を穿つ　体部外面ハケ目、内面ナデ	
220	61	弥生土器	蓋	頂7.2	(8.0)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ５溝	頂部に皿状の窪み　外反して開く	頂部内外面ナデ　内面に指頭痕	
221	61	弥生土器	蓋	頂5.8	(2.8)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	頂部に浅い皿状の窪み　外反して開く	内外面ナデ	
222	61	弥生土器	広口長頸壺	17.9	(21.2)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	球形の体部から筒状に長く立ち上がり、大きく外反して開く口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　内面に扇形文（10ヶ所）端面下端に刻み目　頸部から体部上半に櫛描直線文を７帯めぐらし、以下にヘラミガキ　内面にナデ多くの指頭痕、下半にハケ目	
223	61	弥生土器	広口長頸壺	(29.6)	(48.4)	(9.5)				球形の体部から筒状に長く立ち上がり、大きく外反して開く口縁　端部を肥厚する　ドーナツ状底	口縁ヨコナデ　端面に櫛描波状文　頸部から体部上半に櫛描直線文12帯、波状文３帯、最下段に直線文１帯をめぐらせる　頸部～体部外面ハケ目後ナデ　内面頸部板ナデ後指ナデ、体部ナデ	
224	62	弥生土器	広口壺	(31.6)	(9.0)	－	1975	北地区（確認調査）	ＦＧ15・16溝内	筒状の頸部から大きく外反して開く口縁　端部肥厚し垂下する	端部ヨコナデ、他はヘラミガキ	外面に煤付着(破損後)　金雲母含む
225	62	弥生土器	広口壺	(22.8)	(3.5)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	外反して大きく開く口縁部　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　端面下端に指頭圧による加飾が見られる（爪圧痕）	
226	62	弥生土器	広口壺	(16.0)	(8.3)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ１溝杭列第１群付近	外反して開く口縁部　端部は粘土を折り返して肥厚する	口縁ヨコナデ　端面下端に指頭圧による加飾が見られる　頸部内外面ナデ、櫛描直線文が２帯めぐる	
227	62	弥生土器	短頸壺	16.6	(6.8)	－	1975	中央地区（確認調査）	Ｅ11	外反して開く短い口縁	端部ヨコナデ　以下ハケ目	外面に煤付着

出土土器　観察表（８）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
228	62	弥生土器	広口長頸壺	20.0	(17.6)	―	1976	南Ⅰ地区	Ｙ１溝	球形の体部から筒状に長く立ち上がり、大きく外反して開く口縁　端部を肥厚し上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　頸部外面ハケ目　頸部～体部上半に櫛描直線文を４帯めぐらす　内面に多くの指頭痕、一部にハケ目	
229	62	弥生土器	広口長頸壺	―	(12.6)	―	1976	南Ⅰ地区	Ｙ１溝杭列第１群付近	屈曲して筒状に長く立ち上がる頸部、口縁を欠く	外面頸部ヨコナデ、体部ハケ目　頸部下端に指頭圧痕文突帯をめぐらし、頸部に櫛描波状文２帯・直線文１帯、肩部に直線文２帯を施す　肩部内面に指頭痕・工具痕	
230	62	弥生土器	広口長頸壺	―	(25.0)	―	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10	上下に外反して続く太い頸部	外面タテハケ目の後櫛描き直線文を12帯施す　内面頸部ハケ目、肩部ナデ	被熱による赤変　日明山型（和泉）か？
231	62	弥生土器	壺	―	(10.6)	4.4	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19東溝最下層	球形の体部　やや上げ底で重心は上より　小型品	肩部外面に櫛描き波状文を３帯施す　内面に指頭痕、下半にハケ目	
232	62	弥生土器	壺	―	(23.5)	7.2	1979	中央Ⅲ地区	Ｙ１溝	球形の体部、重心は下より	体部上半に櫛描き直線文４帯施し、その上に同じ工具で縦一列に並ぶ弧状文を重ねる　内面ナデ	被熱
233	62	弥生土器	壺	―	(18.5)	7.3	1975	北地区（確認調査）	ＦＧ15・16溝内	球形の体部　僅かに上げ底	体部ハケ目後上半に櫛描き直線文を３帯、その間に波状文1帯を施す　下半はヘラミガキ　内面上半に指頭痕、下半にヘラミガキ？	
234	62	弥生土器	壺	―	(12.0)	―	1977	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	大型壺の肩部　内傾して頸部に続く	外面ヘラミガキ　上端に櫛描き直線文が2帯確認できる　内面ナデ	角閃石・金雲母混じる生駒西麓系か
235	62	弥生土器	無頸壺	(11.0)	(10.3)	―		中央地区	Ｙ１溝	球形の体部　口縁は小さくすぼまる　端部を僅かに引き上げ、直下に小円孔が穿たれる（残存１個）	口縁ヨコナデ　外面上方より櫛描き直線文８帯、最下段に波状文１帯が施される　内面ナデ	
236	62	弥生土器	甕	26.4	(12.5)	―	1975	中央区（確認調査）	E11	ふくらみを持つ体部から如意形に開く口縁	端部を除き、内外面ともにハケ目	
237	63	弥生土器	広口壺	22.8	(4.6)	―		南Ⅰ地区	Ｙ１溝北	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　頸部外面ハケ目　下端に指頭圧痕突帯がめぐる	
238	63	弥生土器	広口壺	11.6	(3.5)	―	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に櫛描き波状文を施す　頸部外面ハケ目　内面ナデ	
239	63	弥生土器	広口壺	(17.4)	(2.0)	―	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に櫛描き波状文を施す　頸部外面ハケ目	
240	63	弥生土器	広口壺	(22.0)	(9.8)	―	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に櫛描き波状文を施す　頸部～体部内外面ハケ目　肩部に櫛描き直線文１帯、波状文２帯を施す	
241	63	弥生土器	広口壺	(24.0)	(9.5)	―				外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　肩部に櫛描き直線文２帯を施す　内面に指頭痕	
242	63	弥生土器	広口壺	(16.4)	(1.6)	―	1975	南Ⅰ地区	三菱No．4トレンチ	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面にヘラ描き斜格子文を施し、円形浮文を等間隔に貼り付ける	
243	63	弥生土器	広口壺	(18.2)	(10.4)	―	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	筒状に立ち上がり、外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　頸部内外面にハケ目　内面下半に強い指ナデ痕	口縁外面一部に煤付着
244	63	弥生土器	広口壺	(43.8)	(2.4)	―	1975	南Ⅰ地区（確認調査）	Ｙ１溝杭列第２群付近	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に櫛描き波状文を施す　頸部外面ハケ目	
245	63	弥生土器	広口壺	(27.0)	《62.0》	12.2	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	球形の体部から屈曲して立ち上がり、大きく外反して開き端部を垂下する口縁部	口縁ヨコナデ　端面上下端に刻み目がめぐる　頸部内外面ハケ目　頸部下端に断面三角形突帯が４本めぐる　体部外面ハケ目、上半に櫛描き直線文が６帯、下端に櫛状工具による刺突文がめぐらされる　下半にヘラミガキ　体部内面ハケ後ナデ、肩部に指頭痕　下半にハケ目	
246	63	弥生土器	広口壺	17.2	(5.3)	―	1975	南Ⅰ地区（確認調査）	Ｙ１溝杭列第２群付近	外反して開く口縁部　端部を丸く肥厚する	口縁端部ヨコナデ、内面ヘラミガキ外面ハケ目　端部近くに3個1対の小円孔が4方に穿たれる　頸部下端に指頭圧痕文突帯がめぐる	
247	63	弥生土器	広口壺	(21.4)	(1.8)	―	1975	南Ⅰ地区（確認調査）	Ｙ１溝杭列第２群付近	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に櫛描き波状文、内面に扇形文を施す	
248	63	弥生土器	太頸広口壺	(21.8)	(28.0)	―	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	下膨れの体部から外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　体部外面ナデ、上半に櫛描き直線文５帯、下端に波状文1帯を施す	
249	63	弥生土器	大型受口壺	(27.0)	(6.7)	―	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10　溝内	外反して開き、屈曲してほぼ垂直に立ち上がる口縁部　端部を水平に肥厚する	口縁ヨコナデ　立ち上がり部外面に櫛描き斜格子文を施す　頸部ハケ後ナデ	金雲母を少量含む
250	63	弥生土器	広口壺	(20.2)	(6.5)	―	1975	南Ⅰ地区（確認調査）	Ｙ１溝杭列第２群付近	外傾して開く口縁端部を下方へ折り返して垂下する	口縁ヨコナデ　端面と頸部に廉状文を施す　内面ハケ目	角閃石・金雲母混じる生駒西麓系か
251	63	弥生土器	底部(有孔)	―	(3.9)	7.2	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	平底　中央に焼成前穿孔	外面ハケ目　内面ナデ	角閃石多く含む
252	63	弥生土器	底部	―	(3.5)	7.1	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	平底　中央に焼成前穿孔(未貫通)	内外面ハケ目	
253	64	弥生土器	広口壺	18.0	(2.3)	―	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝	外反して大きく開く口縁部　端部を下方に垂下し広い端面を形成する	ヨコナデ　端面上半に太い凹線文を施しその上下端に刻み目、その間に円形浮文を等間隔に貼り付けて加飾する	
254	64	弥生土器	広口壺	19.4	(2.3)	―	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝	外反して大きく開く口縁部　端部を下方に垂下し広い端面を形成する	ヨコナデ　端面に細かいヘラ描き斜格子文を施しその上に２段に円形浮文を等間隔に貼り付けて加飾する	

出土土器　観察表（９）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
255	64	弥生土器	広口壺	(29.8)	(3.9)	－	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	下方に大きく垂下し広い端面を形成する	ヨコナデ　内面に櫛描き波状文を施し、端面に２条の突帯を貼り付け、その上と端面上端に刻み目、突帯の下方に廉状文を施す　さらに突帯間と下方の２段に円形浮文を細かく等間隔に貼り付けて加飾する	
256	64	弥生土器	広口壺	(20.6)	(1.6)	－				外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	ヨコナデ　内面に櫛描き扇形文を２重に施し、端面に円形浮文を貼り付ける	
257	64	弥生土器	広口壺	(18.0)	(4.2)	－		南Ⅰ地区	Ｎトレンチ(西部)Ａ溝	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	風化顕著で調整不明　端面に３条の凹線文をめぐらせる	
258	64	弥生土器	広口壺	45.0	(2.6)	－		南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	内面に扇形文を施す　端部上端に刻み目をめぐらせ、２個１対の円形浮文を貼り付ける	
259	64	弥生土器	広口壺	(19.5)	(7.2)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ１溝	外反して開く口縁部　端部を下方に垂下し広い端面を形成する	口縁ヨコナデ　内面に櫛状工具による刺突文を施す　端面に５条の凹線文をめぐらせ、２個１対の円形浮文を８方に貼り付ける　頸部ナデ　外面に４条のＢ種凹線文をめぐらせる	
260	64	弥生土器	広口壺	(24.8)	(3.6)	－	1975	中央地区(確認調査)	ＥＦ10溝底	外反して開く口縁部　端部を下方に垂下し広い端面を形成する	口縁ヨコナデ　内面に櫛状工具による連続刺突文を二重に施す　端面に５条の凹線文をめぐらせ、5本1対の棒状浮文を貼り付ける	
261	64	弥生土器	太頸広口壺	(22.7)	(15.7)	－		南Ⅰ地区	トレンチ	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	端面に２条の凹線文をめぐらせ、内面に櫛状工具による刺突文がめぐる　外面ハケ目、頸部～体部に櫛描き波状文・直線文を交互に施す　内面ハケ目	口縁外面一部に煤付着
262	64	弥生土器	広口壺	(23.8)	(6.9)	－	1975	南Ⅰ地区(確認調査)	Ｙ１溝杭列第２群付近	外反して大きく開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　頸部外面にハケ目残る	
263	64	弥生土器	壺	－	(7.7)	－	1975	中央地区(確認調査)	ＥＦ10溝内	大型壺の肩部　内傾して頸部に続く	頸部に櫛圧痕突帯を貼り付ける　肩部に櫛描き直線文3帯を施す　内面ハケ後ナデ	
264	64	弥生土器	壺	－	(22.0)	(7.3)	1975	中央地区(確認調査)	ＥＦ10	球形の体部	肩部に櫛描き波状文1帯、直線文２帯施す　内面ハケ後ナデ　指頭痕残る	被熱による赤変
265	64	弥生土器	広口壺	(12.4)	(10.8)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	筒状の頸部から外反して開く口縁　端部を上下に肥厚する　肩部に把手の痕跡	口縁ヨコナデ　外面ハケ目　内面頸部ナデ、体部ハケ目	外面一部に煤付着
266	64	弥生土器	壺	(9.2)	(16.4)	5.3	1976	北Ⅱ地区	Ｙ17溝	算盤玉状に中位の張り出した体部から筒状に立ち上がり、大きく外反して開く口縁部　端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に浅い凹線文をめぐらせ円形浮文を密に貼り付ける　頸部以下外面ハケ目　櫛描き直線文・波状文を各２帯交互に施文し以下はヘラミガキ　内面頸部はナデ、体部はハケ目、底部は指ナデ	外面二次焼成により剥離顕著で煤付着
267	64	弥生土器	細頸壺	－	(13.0)	5.2			Ｙ１溝	算盤玉状に中位の張り出した体部で重心は下方に寄る　口頸部を欠く	外面ハケ目　櫛描き直線文を４帯施文し文様間と以下にヘラミガキ　内面ハケ目後ナデ、底部は指ナデ	体部中位に焼成後穿孔
268	64	弥生土器	水差し	8.8	(7.4)	－	1975	中央地区(確認調査)	ＥＦ10溝内	内傾する体部から筒状に立ち上がり端部はわずかに内彎する　肩部に把手の痕跡	口縁ヨコナデ　外面に３条の凹線文がめぐる　体部外面ハケ目　内面ナデ	口縁外面に煤付着
269	64	弥生土器	無頸壺	(13.2)	(5.0)	－		南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	内傾する体部の上端を外側に折り返して短い口縁とし、端部を上下に肥厚する	口縁ヨコナデ　肩部に櫛描き直線文と波状文を交互に施す	
270	64	弥生土器	無頸壺	(10.0)	(4.0)	－	1975	北地区(確認調査)	ＦＧ15・16溝内	内傾する体部の上端の外側に粘土紐を付加して口縁とする	口縁内面ヨコナデ　直下に２個１対の小円孔を穿つ	
271	64	弥生土器	無頸壺	(18.9)	(3.1)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	内傾する体部の上端の外側に粘土紐を付加して口縁とする	ヨコナデ	
272	65	弥生土器	鉢	(34.2)	(6.8)	－				外傾する体部の上端をわずかに内傾させ外側に粘土紐を付加して肥厚し口縁とする	口縁ヨコナデ　外面に３条の凹線文がめぐる　体部内外面ハケ目	
273	65	弥生土器	鉢	(28.0)	(3.8)	－	1975	南Ⅰ地区	三菱No．4トレンチ	内彎する体部の上端の内側に粘土紐を付加して肥厚し口縁とする	口縁ヨコナデ　体部外面ヘラミガキ　内面ナデ	
274	65	弥生土器	無頸壺	14.0	(4.9)	－				内彎する体部の上端の内側に粘土紐を付加して口縁とする	口縁ヨコナデ　端部に2個1対の小円孔が穿たれる　外面に５条の凹線文がめぐる	
275	65	弥生土器	複合土器	－	(4.5)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	内彎する体部の最大径に近い部分から粘土紐を垂下させ器台の口縁部様を形成する	体部内外面ヘラミガキ　垂下部分に６条の凹線文をめぐらせ、櫛状工具による刻みの入った3本1対の棒状浮文が貼り付けられる	器台と鉢の結合形式（播磨or紀伊）
276	65	弥生土器	高杯	(28.2)	(4.1)	－	1976	南Ⅱ地区	Ｙ４溝（植物遺体）	屈曲して内彎気味に立ち上がる口縁　端部を肥厚する	内面ヘラミガキ　外面に6条の凹線文をめぐらせる	
277	65	弥生土器	円孔脚台付無頸壺	(17.0)	(6.2)	－			Ｙ１'溝	内彎する体部の上端を内側に引き出して肥厚し口縁とする	外面ナデ　内面ヘラミガキ　外面口縁上端に１条、体部中位に４条の凹線文をめぐらせる	
278	65	弥生土器	円孔脚台付無頸壺	(15.0)	《13.0》	10.2	1976	南Ⅱ地区	Ｙ４溝（植物遺体）	内彎する体部の上端を内側に引き出して肥厚し口縁とする　脚台部はすぼまり円孔を4方に穿つ	口縁及び脚台部ヨコナデ　外面口縁上端に１条、脚部下端に３条の凹線文をめぐらせる　脚部内面に粗いハケ目	
279	65	弥生土器	円孔脚台付無頸壺	－	(6.5)	(9.8)	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	脚台部はすぼまり円孔を４方に穿つ	外面ヘラミガキ　内面ハケ目　端部ヨコナデ、２条の凹線文がめぐる	

出土土器　観察表（10）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
280	65	弥生土器	高杯	(24.4)	(12.2)	－	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	椀状の杯部　口縁端部を水平に延ばし端部を垂下する　連続成形された脚部は柱状	口縁ヨコナデ　杯部～脚部外面ハケ目後ヘラミガキ　内面下半ハケ目　脚部内面に搾り目痕	
281	65	弥生土器	高杯	－	(11.4)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10溝内	連続成形された脚部は外反する	杯部内面・脚部外面ヘラミガキ　脚部内面ヘラケズリ	
282	65	弥生土器	高杯	－	(12.4)	13.8	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10溝内	連続成形された脚部は柱状で端部は外反して開き上方へ大きく肥厚する	外面ヘラミガキ　内面杯部ヘラミガキ、脚部ヘラケズリ　小円孔を８方に穿つ	内外に煤付着？
283	65	弥生土器	脚台	－	(4.3)	9.0	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10溝内	外反して開く脚台部　端部を上方へ大きく肥厚する	外面ヘラミガキ　上端に凹線文　端面に３条の凹線文がめぐる　内面ヘラケズリ	
284	65	弥生土器	甕	(16.6)	(9.0)	－	1975	南Ⅰ地区（確認調査）	Ｙ１溝杭列第２群付近	球形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　体部内外面ハケ目	
285	65	弥生土器	甕	14.2	(9.5)	－	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	球形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　体部内外面ハケ目	
286	65	弥生土器	甕	16.0	(9.3)	－			Ｙ１溝５－15line	球形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　体部内外面ハケ目	外面に煤付着
287	65	弥生土器	甕	(14.0)	(6.3)	－	1976	南Ⅱ地区	Ｙ４溝	球形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　体部内面ナデ　外面ハケ目	外面に煤付着
288	65	弥生土器	甕	(20.0)	(5.4)	－	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	ふくらみを持つ体部から屈曲して外反する口縁　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　他は不明	
289	65	弥生土器	甕	(29.0)	47.0	9.0				倒卵形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　体部内外面ハケ目	外面に煤付着　体部内面一部に炭化物付着
290	66	弥生土器	甕	(10.9)	(4.4)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	ふくらみを持つ体部から屈曲して外反する口縁　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　端面に1条の凹線文がめぐる　体部内外面ハケ目	
291	66	弥生土器	甕	(15.6)	(3.5)	－	1976	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝	体部から屈曲して外反する口縁端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文がめぐる　体部外面ハケ目	
292	66	弥生土器	甕	(14.1)	(4.8)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	体部から屈曲して外反する口縁端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目　内面ナデ	外面に煤付着
293	66	弥生土器	甕	(14.3)	(3.5)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19東溝最下層	体部から屈曲して外反する口縁端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文がめぐる	外面体部下半に煤付着
294	66	弥生土器	甕	(12.6)	(13.4)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10溝内植物層	倒卵形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文がめぐる　体部外面ハケ目　内面ハケ目後ナデ	外面体部下半に厚く煤付着　被熱により器表面の剥離顕著
295	66	弥生土器	甕	15.2	25.8	5.8	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	倒卵形の体部から屈曲して外反する口縁　端部を上方に引き上げる	口縁ヨコナデ　端面に１条の凹線文　体部外面タタキ後ハケ目　内面上半ハケ目下半ヘラケズリ	外面体部下半に煤付着　内面に炭化米付着
296	66	弥生土器	甕	(20.0)	(8.0)	－	1976	南Ⅰ地区	方形周溝墓付近	ふくらみを持つ体部から屈曲して外反する口縁　端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　端面に２条の凹線文　体部外面ハケ目体部中位に櫛状工具による刺突文　内面ナデ	体部列点文は山陰西部系（山陽系？）
297	66	弥生土器	無頸壺	(16.6)	(3.4)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19東溝	内傾する体部から外反して折り返す口縁端部を肥厚する	口縁ヨコナデ　肩部に櫛描き波状文が施されている	
298	66	弥生土器	二重口縁壺	15.2	(3.6)	－				屈曲して立ち上がる口縁	端部～外面ヨコナデ　内面ヘラミガキ　屈曲部外面に２条の凹線文	
299	66	弥生土器	細頸壺	12.4	(15.3)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｓ１溝	筒状に長く立ち上がり外反気味に開く口縁	外面および内面上半ヘラミガキ　内面下半はナデ　肩部指頭痕	
300	66	弥生土器	壺	－	(7.5)	(5.0)	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10　溝内	算盤玉状に中位の張り出した体部	外面ヘラミガキ　内面ナデ	胎土精良
301	66	弥生土器	広口壺	－	(18.0)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19東溝	球形の体部から筒状に立ち上がる頸部　口縁は外反して開く端部欠損	外面ハケ目　内面ナデ	
302	66	弥生土器	広口壺	14.0	(35.8)	4.8	1975	中央地区（確認調査）	ＧＨ10　溝内	球形の体部から屈曲して開く口縁　底部中央窪む	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ後ヘラミガキ　内面板ナデ	
303	66	弥生土器	鉢	(32.2)	(14.0)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19東溝	ふくらみを持つ体部から外反して開く口縁　注ぎ口の痕跡が残る	内外面ヘラミガキ　体部は粗いミガキ	
304	66	弥生土器	鉢	12.6	8.0	4.3			Ｙ１溝	椀状の体部　口縁をわずかに外反させる	口縁ヨコナデ　体部外面ヘラミガキ　内面ナデ	
305	66	弥生土器	ミニチュア鉢	5.4	2.4	2.8	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	手づくねによる鉢形のミニチュア品　底部中央が窪む	指ナデ	
306	66	弥生土器	有孔鉢	－	(7.2)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	不安定で尖った底部中央に焼成前穿孔を穿つ	外面タタキ　内面ナデ	
307	66	弥生土器	高杯脚部	－	(11.3)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝	筒状に細く長い脚柱部　中心に成形時の支柱抜き取り痕	上端に6条、下端に３条のヘラ描き沈線文がめぐる	
308	66	弥生土器	高杯脚部	－	(9.0)	11.0		中央Ⅵ地区	Ｓ３溝	外反して開く脚部　円孔の残存６個（推定９方）　連続成形により円板充填	外面ヘラミガキ　内面ケズリ後ナデ	
309	67	弥生土器	甕	－	(13.7)	4.8	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	ふくらみを持つ体部から外反して開く口縁　端部を欠く　ドーナツ状上底	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ　内面ナデ底部に指頭痕顕著	

出土土器　観察表（11）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
310	67	弥生土器	甕	15.8	20.0	5.0	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19西溝	倒卵形の体部から外反して開く口縁　分割成形痕残る	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ　内面ナデ　底部にハケ目	体部外面全体に煤付着 底部内面に有機物の焦げ付き
311	67	弥生土器	甕	15.0	(4.7)	－	1977	北Ⅱ地区	Ｙ18溝 第１層	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面ハケ目　内面ヘラケズリ	外面に煤付着　チョコレート色の胎土（搬入品か？）
312	67	弥生土器	甕	15.8	18.5	5.0	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19西溝	倒卵形の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる　ドーナツ状上底	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ　内面板ナデ	体部外面全体に煤付着 内面に有機物の焦げ付き
313	67	弥生土器	底	－	(6.0)	4.3	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	ふくらみを持つ体部　ドーナツ状上底	外面タタキ　内面ハケ目	
314	67	弥生土器	甕	(14.8)	(6.6)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	球状の体部からくの字状に屈曲して開く口縁　端部を上方へ引き上げる	口縁ヨコナデ　体部外面タタキ後ハケ目 内面ヘラケズリ	
315	67	弥生土器	甕	16.6	(25.0)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	倒卵形の体部から外反して開く口縁　端部は屈曲して立ち上がる	口縁ヨコナデ　端部外面及び肩部に細い竹管を４本一列に束ねた工具で刺突列点文をめぐらせる　外面体部上半ハケ目、頸部に櫛描き直線文肩部列点文、下方に波状文を施す　下半タタキ　内面ハケ目	外面肩部以下に煤付着 近江系
316	67	弥生土器	甕	15.0	13.4	－				ふくらみを持つ体部から外反して開く口縁　底部は尖り不安定	口縁ヨコナデ　体部内外面ヘラケズリ、底部外面タタキ　内面指頭痕	
317	67	土師器	広口壺	(20.4)	(4.6)	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19西溝	内傾する頸部から屈曲して水平に大きく開く口縁　端部を上方に引き上げる	内外面ヨコナデ	四国系
318	67	土師器	二重口縁壺	22.8	(4.0)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	外反する口頸部から屈曲してさらに外反し立ち上がる口縁端部	口縁端部～外面ヨコナデ　内面ヘラミガキ　端部にヘラ状工具による刻み目がめぐる　立ち上がり部に櫛描き波状文を工具を回転させながら施文している	
319	67	土師器	二重口縁壺	(16.6)	(4.1)	－	1975	(確認調査)	（ホ）トレンチ	外反する口頸部から屈曲して大きく立ち上がる口縁端部	口縁ヨコナデ　立ち上がり部に多条の擬凹線文が施される	
320	67	土師器	二重口縁壺	27.6	(11.5)	－	1975	(確認調査)	（ホ）トレンチＡＢ－９地区	筒状の頸部から屈曲して水平に開きさらに屈曲して大きく立ち上がる口縁端部　屈曲部は外方へつまみ出される	口縁ヨコナデ　受け部外面ハケ目　立ち上がり部と頸部にそれぞれ多条の擬凹線文が施される	
321	67	土師器	二重口縁壺	(17.7)	(7.8)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	外反する口頸部から屈曲してさらに外反し立ち上がる口縁端部	口縁端部～外面ヨコナデ　内面ヘラミガキ　立ち上がり部に退化凹線文が施される	
322	67	土師器	直口壺	(14.0)	(10.8)	－	1976	南Ⅱ地区	Ｙ４溝	球形の体部から屈曲して外方へ開く口縁部	体部外面にタタキ目痕　内面ナデ	胎土精良
323	67	土師器	小型丸底壺	10.5	(5.9)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	半球形の体部から屈曲して外方へ開く口縁部	口縁～内面ヘラミガキ　外面不明	
324	67	土師器	小型丸底壺	8.4	7.3	－	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19西溝	球形の体部から屈曲して外方へ開く口縁部	体部内外面ヘラミガキ	
325	67	土師器	高杯	18.8	(6.2)	－	1977	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	緩やかに外反して開く杯部　中心部には脚柱部の剥離痕	口縁端部ヨコナデ　杯部内外面共にハケ目	
326	67	土師器	高杯	17.6	(6.3)	－	1977	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	屈曲して開く杯部　脚部も屈曲して大きく開く　脚部は杯部に挿入される	外面ヘラミガキ　内面杯部ヘラミガキ　脚柱部絞り目	
327	67	土師器	高杯	－	(10.4)	(11.4)	1976	南Ⅱ地区	Ｙ４溝	緩やかに外反して開く杯部下半に稜が形成される　連続成形により中心部は粘土充填される	風化顕著で調整不明	被熱により赤変
328	67	土師器	高杯	15.5	11.8	10.8				杯部は屈曲して立ち上がる口縁 脚部も屈曲してほぼ水平に開く 脚部は杯部に挿入される	外面ナデ　杯部内面丁寧なナデ　脚部内面ヘラケズリ	
329	68	須恵器	杯蓋	11.9	4.3	－	1975	中央地区 (確認調査)	ＥＦ10溝内	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部 端部は内側に段を持つ	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
330	68	須恵器	杯蓋	12.2	4.1	－	1975	中央地区(確認調査)	ＥＦ10溝内	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部 端部は内側に段を持つ	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
331	68	須恵器	杯蓋	12.2	(4.3)	－	1975	中央地区（確認調査)	ＥＦ10溝内	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部 端部は内側に肥厚する	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
332	68	須恵器	杯蓋	11.6	4.1	－	1975	中央地区（確認調査)	ＥＦ10溝内	丸みを持つ天井部から稜線を持って屈曲して立ち上がる口縁部 端部は外側に肥厚する	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
333	68	須恵器	杯身	13.4	(3.7)	－	1976		75年度トレンチ跡　表採	底部は丸みを帯び緩やかに外方に開く体部　受け部はほぼ水平に延び、立ち上がり部は内傾し口縁端部は内側に段を持つ	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
334	68	須恵器	杯身	14.0	4.7	－		南Ⅰ地区	Ｙ３溝	底部は丸みを帯び緩やかに外方に開く体部　受け部はほぼ水平に延び、立ち上がり部は内傾する	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
335	68	須恵器	杯蓋	11.6	(3.7)	－	1976	北Ⅳ地区	ＤＨ－15トレンチ	丸みを持つ天井部から屈曲して立ち上がる口縁部　端部は丸く収める	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	

出土土器　観察表（12）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
336	68	須恵器	杯蓋	12.4	(3.3)	－	1976	北Ⅳ地区	ＤＨ－15トレンチ	丸みを持つ天井部から屈曲して外方に開きながら立ち上がる口縁部　端部は丸く収める	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
337	68	須恵器	杯蓋	(16.0)	(4.0)	－	1976	北Ⅳ地区	ＤＨ－15トレンチ	丸みを持つ天井部から屈曲して立ち上がる口縁部　端部は丸く収める	回転ナデ　天井部にヘラケズリ	
338	68	須恵器	杯身	10.8	3.8	－				底部は丸みを帯び緩やかに外方に開く体部　受け部はほぼ水平に延び立ち上がり部は短く内傾する	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
339	68	須恵器	杯身	11.4	(3.5)	－				底部は丸みを帯び緩やかに外方に開く体部　受け部はほぼ水平に延び立ち上がり部は短く内傾する	回転ナデ　底部にヘラケズリ	
340	68	須恵器	杯身	10.4	3.1	－				底部は丸みを帯び緩やかに外方に開く体部　口縁部は屈曲して立ち上がり端部は丸く収める	回転ナデ	
341	68	須恵器	杯Ｂ蓋	17.2	3.6	－				丸みを持つ天井部から短く屈曲して立ち上がる口縁部　宝珠形のつまみが付く	回転ナデ	
342	68	須恵器	杯？	(16.5)	(3.3)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10	外傾して立ち上がる口縁部	回転ナデ	壺蓋？
343	68	須恵器	杯	19.6	5.2	－		南Ⅰ地区		内彎気味に立ち上がる口縁　端部を外上方に引き出す	回転ナデ　底部ヘラ切り	
344	68	土師器	杯	14.8	3.1	－		南Ⅰ地区		内彎気味に立ち上がる口縁　端部わずかに外反する	口縁ヨコナデ　体部ナデ　口縁内面に1条の凹線文	
345	68	土師器	皿	12.9	1.4	10.6		南Ⅰ地区		口縁端部わずかに外反する	口縁ヨコナデ　体部ナデ	
346	68	土師器	杯	11.4	(3.1)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	口縁端部わずかに外反する	ヨコナデ　底部ナデ	
347	68	土師器	小皿	8.2	1.6	4.0				わずかに上げ底器壁厚い　口縁部は薄く外方へ立ち上がる	ヨコナデ	
348	68	土師器	小皿	14.6	(2.5)	－	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	口縁端部わずかに外反する	ヨコナデ	
349	68	土師器	小皿	12.0	(2.1)	－	1975	南Ⅰ地区	三菱ＤＨ-3トレンチ	口縁端部は丸く収める	ヨコナデ	
350	68	瓦質土器	羽釜	17.6	(4.4)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10	内傾気味に立ち上がる体部　口縁端部はわずかに肥厚し、直下に水平方向に断面三角形の鍔部が付加される	口縁端部～外面ナデ　内面ハケ目	
351	68	須恵器	甕	16.4	22.0	－	1976	南Ⅰ地区	Ｓ１溝	肩の張る球形の体部から屈曲して外反気味に立ち上がる口縁部端部を肥厚する	口縁回転ナデ　外面に２条の突帯をめぐらし突帯間に櫛描き波状文１帯を施す　体部外面格子タタキ　内面ナデ	外面肩部と内面底部に自然釉付着
352	68	須恵器	壺	15.2	(4.1)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10　溝内	外反気味に立ち上がる口縁部端部を肥厚する	回転ナデ　外面に１条の突帯をめぐらし下方に櫛描き波状文１帯を施す	
353	68	須恵器	壺	15.9	(1.6)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10　溝内	外反気味に立ち上がる口縁部端部を肥厚する	回転ナデ　外面に櫛描き波状文を施す	
354	68	瓦質土器	壺？	13.8	(5.8)	－	1975	中央地区（確認調査）	ＥＦ10　溝内	外反気味に立ち上がる口縁部端部を上方へ引き上げる	回転ナデ　外面に1条の凹線文	
355	68	須恵器	甕	(19.4)	(9.5)	－	1976	南Ⅱ地区	Ｙ４溝	球形の体部から屈曲して開く口縁	口縁回転ナデ　体部外面タタキ　内面ナデ	
356	68	須恵器	瓶	(7.8)	(4.1)	－				外反気味に開く口縁　端部を内側に肥厚する	回転ナデ	
357	58	青磁	碗	－	(3.0)	6.1		東地区		高台は比較的幅が広く、低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも青磁釉施釉。暗オリーブ灰色に発色。畳付・高台裏は露胎。	龍泉窯系青磁。13世紀代。
358	58	土師器	羽釜	(25.2)	(8.2)	－	1983	東地区	Ｍ２溝	体部は直立。口縁端部は若干内側につまみ出す。口縁部外面に断面台形状の幅の広い鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　縦方向の粗いハケ目調整。体部内面ハケ目調整の後、ナデ調整。	色調　にぶい黄橙色。
359	58	無釉陶器	擂鉢	(33.0)	(6.2)	－	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。口縁部の１ヶ所を捻って片口を作り出す。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面にヘラ描きの擂目施文。	色調　明褐色。丹波焼。16世紀後半代。
360	58	無釉陶器	擂鉢	－	(2.8)	12.2	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　不調整。	色調　暗赤褐色 丹波焼擂鉢の底部
361	58	無釉陶器	擂鉢	－	(3.5)	8.0	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面に櫛描きで密に擂目施文。底部外面　板状工具痕。	丹波焼。近世。
362	58	無釉陶器	盤	(36.6)	4.5	(29.2)	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。体部は直線的に短く斜め上方に延びる。口縁端部は若干内側に肥厚する。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　不調整。	色調　暗褐色。備前焼16世紀後半～17世紀前半。

出土土器　観察表（13）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備　　考
				口径	器高	底径						
363	58	無釉陶器	擂鉢	(22.4)	(5.1)	―	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	体部は直線的に斜め上方に延びる。口縁部は上下に拡張して断面長方形状の縁帯を形成する。口縁部外面に凹線２条。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　７条１単位の櫛描きの擂目施文。体部外面に僅かに指頭圧痕が残る。	色調　暗褐色。備前焼Ⅳ期。16世紀代。
364	58	無釉陶器	擂鉢	―	(6.2)	(20.9)	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。体部は直線的に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面　13条１単位の櫛描きの擂目施文。	色調　暗赤褐色。備前焼。
365	58	無釉陶器	擂鉢	―	(4.2)	(10.0)	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面に６条１単位の櫛描きの擂目施文。	備前焼。
366	59	無釉陶器	鉢	11.4	5.4	8.6	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。体部は斜め上方に立ち上がり、中位で「く」の字状に大きく屈曲する。体部外面に沈線１条。	内外面とも回転ナデ調整。底部外面　ナデ調整。体部外面に自然釉が附着する。	器面に長石の噴出しが目立つ。信楽焼。
367	59	施釉陶器	椀	11.6	5.3	4.4	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は断面台形状で比較的高い。平底。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも全面に鉄釉を施釉の後、白泥を横方向に刷毛塗り。畳付の釉はかきとり。	肥前系。刷毛目唐津椀。17世紀後半～18世紀前半。
368	59	施釉陶器	椀	10.0	7.0	4.4	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は断面長方形で比較的高い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的にほぼ直立する。	内外面とも鉄釉施釉の後、白濁釉を淡く二重掛けする。	肥前系。唐津椀。18世紀前半。
369	59	施釉陶器	椀	9.0	6.6	4.6	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内湾して斜め上方に立ち上がり、中位から上はほぼ直立する。口縁端部は尖り気味。	内外面とも灰釉施釉。淡黄緑色に発色。畳付の釉はかきとる。	京焼系？。
370	59	施釉陶器	椀	11.9	5.3	4.2	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は断面台形状に比較的低く削りだす。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。高台脇をヘラ状工具で調整。内外面とも銅緑釉施釉。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面の高台脇以下露胎。	肥前系。唐津緑釉椀。17世紀後半～18世紀前半。
371	59	施釉陶器	椀	11.0	5.7	4.6	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は比較的幅が広く低い。体部は内彎気味に斜め上方に立ち上がり、中位で屈曲し、ほぼ直立する。	内外面とも透明釉施釉の後、白泥、緑釉で草花文を上絵付けする。外面の高台脇以下は露胎。	京焼系。19世紀前半以降。
372	59	施釉陶器	秉燭	6.1	6.1	6.2	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	平底。脚部は短く直立する。体部は大きく内彎する。底部外面に釘穴を１ヶ所穿孔する。	内外面とも鉄釉施釉。暗茶褐色に発色。底部外面　露胎。糸切痕が残る。	瀬戸・美濃系。19世紀前半以降。
373	59	染付磁器	碗	11.4	5.9	4.5	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は比較的細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面にコンニャク印判で菊花文施文。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。波佐見産。くらわんか手碗。18世紀前半。
374	59	染付磁器	碗	10.2	5.4	4.2	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は比較的細く低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面に手描きの草花文施文。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。波佐見産。くらわんか手碗。18世紀後半。
375	59	染付磁器	碗	9.6	6.2	4.0	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は比較的細い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	外面に手描きの草花文施文。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。波佐見産。くらわんか手碗。18世紀後半。
376	59	染付磁器	碗	10.2	5.4	3.9	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は比較的細く低い。底部の器壁は非常に厚い。	外面に丸に花弁文・草花文を手描きで施文。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。波佐見産。くらわんか手碗。18世紀後半。
377	59	染付磁器	碗	9.6	5.0	4.0	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	高台は比較的細く、高い。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に斜め上方に延びる。	外面に手描きの草花文施文。高台畳付の釉はかきとる。	やや小振り。肥前系。波佐見産。くらわんか手碗。18世紀後半。
378	59	染付磁器	碗	10.0	5.9	4.0	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	器壁は全体に比較的薄い。高台は比較的細く、高い。体部は内彎気味に斜め上方に延びる。	外面に雨降り文施文。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系　19世紀前半。
379	59	染付磁器	碗	10.4	5.3	3.7	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	器壁は全体に薄い。高台は比較的細く低い。体部は内彎して斜め上方に延びる。	外面にやや濃い呉須で山水文・草花文を描く。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。半球形碗。19世紀前半以降。
380	59	染付磁器	碗	11.2	6.6	6.2	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	器壁は全体に薄い。底部は丸底風。体部はほぼ直線的に斜め上方に延びる。	高台がやや歪む。外面に山水文・草花文を施文。高台畳付の釉はかきとる。	瀬戸系。19世紀前半以降。
381	59	染付磁器	蕎麦猪口	7.0	5.5	4.0	1981	東Ⅰ地区	Ｋ１溝	器壁は全体に薄い。平底。外周に低い高台をもつ。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　丸文・菊花文等を施文。高台畳付の釉はかきとる。	肥前系。19世紀前半。
382	第7図	須恵器	椀	(14.4)			1976	南Ⅰ地区	Ｓ２溝			口縁部外面に倒立で「常」の墨書　写真のみ
383	第7図	土師器	皿				1976	南Ⅰ地区	Ｓ２溝		外面押さえの後、ナデ調整、内面は回転ナデ	底部外面に「井」の墨書　写真のみ

出土土器　観察表（14）

遺物番号	図版番号	種　別	器　種	法量（cm）			出土年度	出土地区	出土遺構	備　　考
				長	幅	厚				
W１	11	？	杭？	79.7	4.1	3.7	2003	南Ⅲ地区	ＳＸ08	
W２	69	農具	鍬	13.4	9.0	1.9	1976	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	
W３	69	農具	鍬	6.9	7.2	1.1	1981	東Ⅰ地区	Ｆトレンチ溝内	
W４	69	農具	組合又鋤	32.1	20.6	1.7	1976	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	
W５	69	農具	鋤・鍬	17.0	13.3	0.7	1976	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	
W６	69	農具	組合鋤	37.7	10.5	0.4	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19溝　杭列中	
W７	69	農具	組合鋤	①24.1 ②24.6 (16.8+7.8)	① ②13.6 (2.8)	① ②	1975	中央地区 (確認調査)	Ｙ18溝	
W８	69	農具	一本鋤（未製品？）	75.6	10.0	0.8	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19溝　杭列中	
W９	70	農具	曲柄又鍬身	59.8	10.5	2.2		南Ⅰ地区	Ｙ１溝	
W10	70	農具	穂摘具（木庖丁）	15.7	4.3	1.0	1978	南Ⅰ地区	Ｙ３溝	
W11	70	農具	堅杵	50.0	8.3	7.6	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19溝　上層部	
W12	70	農具	板材	42.4	16.6	1.4	1981	中央Ⅶ地区	溝内（暗褐砂質土・暗褐粘質土）	
W13	70	農具	田下駄足板	28.8	5.5	1.4	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19溝	
W14	70	農具	田下駄足板	31.7	8.8	1.5	1980	南Ⅰ地区	Ｙ１溝	
W15	70	農具？	板材（田下駄？）	45.7	8.9	1.5	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19溝　上層部	
W16	70	農具？	板材（田下駄？）	30.9	8.9	1.4	1976	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	
W17	70		板材	61.5	6.3	1.5	1980	南Ⅰ地区	杭列第２群	
W18	71	組物	箱型容器？	27.2	10.4	2.5	1976	南Ⅰ地区	Ｓ１溝	
W19	71	農具	大足・田下駄部材？	36.8	9.9	1.9	1976	南Ⅰ地区	Ｓ１溝	
W20	71	棒状木製品		63.5	6.5	3.7	1977	北Ⅰ地区	Ｙ18′溝	
W21	71	紡織具	横打具	47.5	3.4	1.1	1977	北Ⅰ地区	Ｙ19溝　上層部	
W22	71		板材	47.1	18.9	3.6	1976	北Ⅱ地区	Ｙ18溝	
W23	71	祭祀具	船形木製品	31.2	10.0	6.2		南Ⅰ地区	Ｙ１溝	
W24	72	容器	挽物皿	17.0	6.9	0.7	1976	南Ⅰ地区	Ｓ２溝	
W25	72	容器	挽物皿	17.5	7.2	1.6	1976	南Ⅰ地区	Ｓ２溝	
W26	72	容器	曲物底板	11.4	9.3	0.6	1976	南Ⅰ地区	Ｓ２溝	
W27	72	容器	曲物底板or蓋板	12.6	12.1	0.9	1981	東地区	Ｋ１溝	
W28	72	容器	曲物底板or蓋板	12.1	4.7	0.7	1981	東地区	Ｋ１溝	焼印
W29	72	容器	曲物側板	外径max. Φ15.7	外径min. Φ12.8	幅5.0	1981	東地区	Ｋ１溝	
W30	72	祭祀具	卒塔婆	24.0	3.9	0.6	1981	東地区	Ｋ１溝	
W31	72	服飾具	連歯下駄	25.0	7.6	2.1	1981	東地区	Ｋ１溝	
W32	72	服飾具	連歯下駄	23.5	8.8	2.9	1981	東地区	Fトレンチ溝内	
W33	72	服飾具	庭下駄	23.6	7.8	2.6	1981	東地区	Ｋ１溝	
W34	写のみ	服飾具	庭下駄				1981	東地区	Ｋ１溝	

出土木器　観察表